ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書　XVI－2

高木（浅小井）遺跡

―近江八幡市長田町所在―

1989．3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

高木（浅小井）遺跡

―近江八幡市長田町所在―

1989．3

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では、活力のある県民社会、生き甲斐のある生活を築くための一つとして、文化環境づくりに取りくんでいます。特に、文化財保護行政にたずさわるものとして、近年の社会変化に即応し県下の実情や将来あるべき姿を見定めつつ、文化財の保護と保存に努めております。

先人が残してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々に至る貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深い御理解と御協力を得なければなりません。

ここに、昭和63年度に実施しました県営ほ場整備事業に係る発掘調査の結果を取りまとめましたので、御高覧のうえ今後の埋蔵文化財の御理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施に御理解と御協力を頂きました地元の方々、並びに関係機関に対して厚く御礼申し上げます。

平成元年３月

滋賀県教育委員会
教育長 西池　季節

例　　言

1．本書は昭和62年度県営ほ場整備事業に伴う近江八幡市高木（浅小井）遺跡の発掘調査報告書であり、昭和62年度に発掘調査し、昭和63年度に整理したものである。

2．本調査は県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。

3．発掘調査にあたっては、近江八幡市教育委員会・八日市県事務所土地改良第二課・近江八幡市長田町土地改良区の協力を得た。

4．本書で使用した方位は座標方位（新平面直角座標第Ⅵ系）に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。

5．本事業の事務局は次のとおりである。

昭和62年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部　正
〃　課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林　博通
〃　技師	木戸　雅寿
管理係主任主事	山出　隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理　事　長	吉崎　貞一
事務局長	中島　良一
埋蔵文化財課長	近藤　滋
調査三係長	兼康　保明
〃　技師	小竹森直子
総務課長	山下　弘
主任主事	東浦　良子

昭和63年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	堀出亀与綱
〃　課長補佐	小川　啓雄
埋蔵文化財係長	林　博通
〃　主任技師	木戸　雅寿
管理係主任主事	山出　隆

財団法人滋賀県文化財保護協会

理　事　長	吉崎　貞一
事務局長	中島　良一
企画調査課長	近藤　滋
調査第一係長	大橋　信弥
〃　技師	小竹森直子
総務課長	山下　弘

6．本書の執筆・編集は、調査担当者の小竹森が行なった。

7．出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目　　次

序

例　　言

第1章　位置と環境 …… 1

第2章　調査の経過と方法 …… 2

第3章　調査結果 …… 4

1．試掘調査 …… 4
2．発掘調査 …… 6

第4章　まとめ …… 110

1．遺物 …… 110
2．遺構 …… 111

挿図目次

第1図　高木遺跡周辺遺跡分布図 …… 1
第2図　トレンチ配置図 …… 3
第3図　試掘トレンチ土層柱状図(1) …… 4
第4図　試掘トレンチ土層柱状図(2) …… 5
第5図　T1—SD1・SB1平面図・断面図 …… 6
第6図　T1全体平面図 …… 7
第7図　T2全体平面図 …… 9
第8図　T2—SB1・SB2平面図・断面図 …… 11
第9図　T2—SD1・SK4・SK6平面図・断面図 …… 12
第10図　T3・T4全体平面図 …… 13
第11図　T5全体平面図 …… 15
第12図　T5—SE1・SE2・SK8平面図・断面図 …… 16
第13図　T1～T5出土遺物実測図 …… 17

第14図　T6・T7全体平面図……19・20
第15図　T6～T12出土遺物実測図……21
第16図　T9全体平面図……22
第17図　T10全体平面図……23
第18図　T11全体平面図……24
第19図　T12全体平面図……25
第20図　T13出土遺物実測図……26
第21図　T13・T14全体平面図……27・28
第22図　T15全体平面図……30
第23図　T16全体平面図……31・32
第24図　T17出土遺物実測図……35
第25図　T18出土遺物実測図……36
第26図　T18全体平面図……37・38
第27図　T18—SD2・SD3・SD4・SD5・SK1・SK2平面図・断面図……39
第28図　T18—SB1平面図・断面図……40
第29図　T18—SB2平面図・断面図……41
第30図　T18—SB3平面図・断面図……42
第31図　T18—SB4平面図・断面図……43
第32図　T18—SB5・SB6平面図・断面図……44
第33図　T19—SK1・SD1・SD2・SD3・SD6・SE1平面図・断面図……46
第34図　T19全体平面図……47・48
第35図　T19—SA1・SA2・SA3・SA4平面図・断面図……49
第36図　T19—SD1・SE1出土遺物実測図……51
第37図　T19—SD2・SD3出土遺物実測図……53
第38図　T19—SB1平面図・断面図……54
第39図　T19—SB2・SB3平面図・断面図……55
第40図　T19—SB4平面図・断面図……56
第41図　T19—SB5・SB6平面図・断面図……57
第42図　T20全体平面図(1)……59・60
第43図　T20全体平面図(2)……61・62
第44図　T20—SX1平面図……63・64
第45図　T20—SX1土層断面図……65
第46図　T20—SX1出土遺物実測図……66
第47図　T20—SK1・SK2・SK3平面図・断面図……67
第48図　T20—SK17・SK23・SK24・SK26平面図・断面図・出土遺物実測図……69

第49図　T20—SK29平面図・断面図・出土遺物実測図 ……70
第50図　T20—SD1断面図 ……71
第51図　T20—SD1出土遺物実測図 ……73
第52図　T20—SD3・SD14出土遺物実測図 ……75
第53図　T20—SD・ピット・遺構面出土遺物実測図 ……77
第54図　T20—SB1平面図・断面図 ……78
第55図　T20—SB2平面図・断面図 ……79
第56図　T20—SB4平面図・断面図 ……80
第57図　T20—SB5平面図・断面図 ……81
第58図　T20—SB6平面図・断面図 ……82
第59図　T20—SB7・SB8平面図・断面図 ……83
第60図　T20—SB9平面図・断面図 ……84
第61図　T20—SB10平面図・断面図 ……85
第62図　T20—SB11平面図・断面図 ……86
第63図　T20—SB12・SB13平面図・断面図 ……87
第64図　T20—SB14・SB15平面図・断面図 ……88
第65図　T20—SB16・SB17平面図・断面図 ……89
第66図　T20—SA2・SA3・SA4・SA5・SA6平面図・断面図 ……90
第67図　T20—SB18平面図・断面図 ……92
第68図　T20—SB19平面図・断面図 ……93
第69図　T20—SB20・SB21・SB22平面図・断面図 ……94
第70図　T20—SB23平面図・断面図 ……95
第71図　T20—SB24平面図・断面図 ……96
第72図　T20—SB25・SB26・SA7平面図・断面図 ……97・98
第73図　T20—SB27・SB28平面図・断面図 ……99
第74図　T20—SB29平面図・断面図 ……100
第75図　T20—SB30・SB31平面図・断面図 ……101
第76図　T20—SB32平面図・断面図 ……102
第77図　T20—SB33平面図・断面図 ……103
第78図　T20—SB34平面図・断面図 ……104
第79図　T20—SB35平面図・断面図 ……105
第80図　T20—SB36・SB37・SB38平面図・断面図 ……106
第81図　T20—SB39平面図・断面図 ……107
第82図　T20—SB40・SB41平面図・断面図 ……108
第83図　黒色土器椀内面暗文模式図 ……112

第84図　T20建物群構成模式図……115
第85図　中世居館跡関連遺跡分布図……117

表　目　次

第1表　掘立柱建物規画表

図　版　目　次

図版一　調査対象地周辺遠景（北から）
図版二　T18～20遠景（北東から）
図版三　T20全景（右上隅が北）
図版四　T20—SX1土層堆積状況
図版五　1．調査前全景（西から観音寺山を望む）
　　2．空測用バルーンによる作業状況（T2上空）
図版六　1．T1～T12全景（西から）
　　2．T1・T2方形区画溝内全景（右下隅が北）
図版七　1．T2—SD1石垣状列石遺構検出状況
　　2．T2—SD1石垣状列石遺構側面
図版八　1．T2—SK6石桝状遺構
　　2．T2—SK4配石遺構
図版九　1．T3全景（西から）
　　2．T4全景（西から）
図版十　1．T5全景（西から）
　　2．T5—SE1（南から）
図版十一　1．T6全景（東から）
　　2．T9全景（東から）
図版十二　1．T7全景（右上隅が北）
　　2．T3～T6全景（東から）
図版十三　1．T11全景（東から）
　　2．T12全景（右上隅が北）
図版十四　1．T13全景（西から）
　　2．T13—SD8
図版十五　1．T14西端柱穴分布状況（西から）
　　2．T15全景（東から）
図版十六　1．T18全景（東上空から）
　　2．T18全景（右上隅が北）

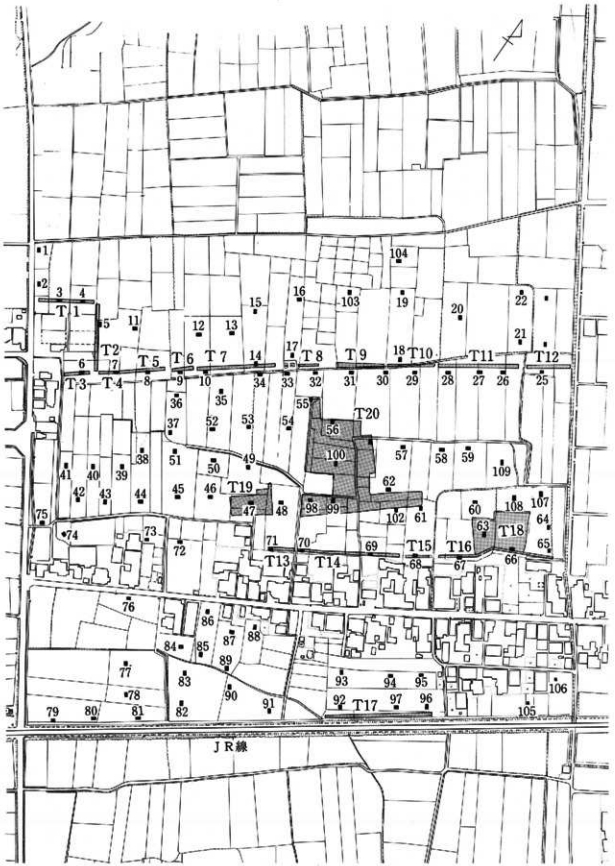
図版十七　1．T18土壙群
2．T18－SK7
図版十八　1．T19全景（東上空から）
2．T19全景（右上隅が北）
図版十九　1．T19－SD6土層堆積状況
2．T19－SB1（北西から）
図版二十　1．T19－SD1・SD2・SD3並列部分
2．T19－SD1・SD2・SD3土層堆積状況
図版二十一　1．T20南半部分全景（西上空から）
2．T20－SD3（東から）
図版二十二　1．T20－SK1土層堆積状況
2．T20－SB群柱穴検出状況
図版二十三　1．T20－SB7　2．T20－SB2
3．T20－SB6　4．T20－SB4
図版二十四　1．T20北半部分全景
2．T20－SB19～26
図版二十五　1．T20－SD1（西から観音寺山を望む）
2．T20－SK17
図版二十六　1．T20－SK18・SK19・SK20
2．T20－SK23・SK24
図版二十七　1．SX1・土壙群（北東から）
2．SX1
図版二十八　1．T20－SX1－Sec．4 土層堆積状況
2．T20－SX1－Sec．6 土層堆積状況
図版二十九　1．T20－SX1　長頸壺形土器出土状況(1)
2．T20－SX1　長頸壺形土器出土状況(2)
図版三十　出土遺物(1)
図版三十一　出土遺物(2)
図版三十二　出土遺物(3)
図版三十三　出土遺物(4)
図版三十四　出土遺物(5)
図版三十五　出土遺物(6)
図版三十六　出土遺物(7)

第1章　位置と環境

高木（浅小井）遺跡の所在する近江八幡市は近江最大の低地である湖東平野にあり、日野川下流域を占めている。湖東平野は布引丘陵・八日市丘陵等を流れ出た日野川・愛知川・犬上川によって形成された扇状地・三角州から構成されているが、湖東島状山地と称される湖東流紋岩・花崗岩を基盤とする標高160m～450mの小山地が散在しており、幾つかの小地域に分割される。近江八幡市域は南を日野川、東を八日市丘陵、北を湖東島状山地の１つである観音寺山に囲まれ、西が琵琶湖岸となる地域であり、かつての蒲生郡金田村の１部にあたる長田町はこの近江八幡市の北端に位置する。観音寺山を中心とする安土町と境界を接し、調査対象地は浅小井町と長田町の間を抜ける県道大津能登川彦根線（通称朝鮮人街道）の南側部分にあたる。

A：調査対象地
1．高木遺跡
2．浅小井城跡
3．後川遺跡
4．金剛寺遺跡
5．金剛寺城跡
6．大手前遺跡
7．御所内遺跡
8．谷氏館遺跡
9．上下遺跡
10．半田遺跡
11．出町遺跡
12．里内遺跡
13．九里氏遺跡
14．蔵ノ町遺跡
15．久郷屋敷遺跡
16．柿木原遺跡
17．森ノ前遺跡
18．堀上遺跡
19．馬渕遺跡
20．千僧供古墳群
21．観学院遺跡
22．新開遺跡
23．香庄遺跡
24．慈恩寺遺跡
25．小中遺跡
26．西才行遺跡
27．常楽寺遺跡
28．瓢箪山古墳
29．安土城跡
30．観音寺城跡

第１図　高木遺跡分布図



第2図　トレンチ配置図

（アミの部分は発掘トレンチ
黒塗り部分は試掘トレンチ）

近江八幡市域における考古資料は旧石器時代に遡るが、明瞭な遺跡は弥生時代以降に拡がりを見せる。弥生時代前期の遺跡は湖岸の長命寺湖底遺跡・大中の湖南遺跡、現在の市街域に位置する堀上遺跡・三明遺跡等が確認されており、湖東平野の中でも一早く弥生文化を受容した地域の1つである。弥生時代中期以降日野川・佐久良川・白鳥川に沿って遺跡が上流へと拡張すると共に、下流域では大小の遺跡が形成されている。長田町周辺では隣接する浅小井遺跡において弥生時代中期～後期の土壙墓・前方後方形周溝墓が検出されているのを始めとして、出町遺跡・安土町西才行遺跡・鳥打峠遺跡等が存在している。

古墳時代に入ると観音寺山の麓に安土瓢箪山古墳が築かれ、市内においても供養塚古墳を始めとして平野部に古墳が散在している。集落遺跡としては常衛遺跡・安土町小中遺跡・慈恩寺遺跡等が知られており、後期群集墳との関連が指摘されている。

近江八幡市域では7世紀前半までは竪穴住居を基本形態とし、後半期には掘立柱建物に交代するとの指摘があるが[1]、近年の調査では長田町周辺において8世紀初頭まで遺存していることが確認されている[2]。

長田町周辺には、古代には蒲生郡篠笥郷・蘇田郷が、中世には佐々木荘が設置された地域であり、佐々木六角氏に関連する観音寺城・金剛寺城・浅小井城・長田城等が存在するが、佐々木氏の滅亡により衰退していったと想定される。高木遺跡内では昭和61年度の調査において、方約50mの堀を有する居館跡が確認されている(3)。

交通経路上、東山道後の中仙道とその間道である朝鮮人街道（浜街道）との中間に位置する。中仙道から安土へ抜ける馬街道と称される間道が通っており、馬三昧の地名が見受けられる。隣接する浅小井町は現在湖岸から約1km内陸部に位置しているが、かつては湖岸に接し浅小井港として機能していた。

第2章　調査の経過と方法

昭和62年度県営ほ場整備事業（近江八幡市金田地区第8工区）が高木遺跡の範囲内で施工されることとなり、事前に発掘調査を行ない遺跡の保護策を講じることとなった。

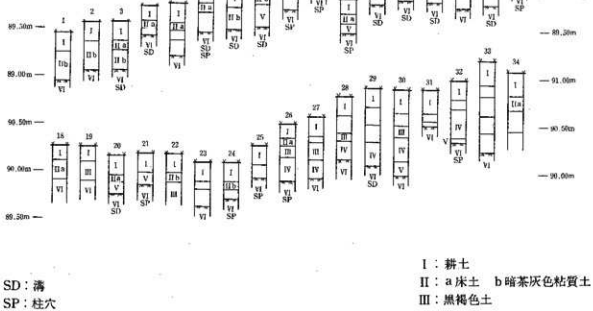
まず、工事対象地区内における遺構・遺物の有無とその深さを確認するための試掘調査を昭和62年4月27日～昭和62年5月8日に実施した。試掘調査は掘削・削平を伴う排水路・切土面を対象とし、2m×3mのトレンチを計106か所設けた。この試掘調査の結果に基づき協議を行ない、切土面については大部分が盛土対応によって遺構の保護が講じられたが、工事により直接影響を受ける排水路および盛土対応が不可能である切土面計8780㎡について発掘調査を実施することとなった。発掘調査は0.4㎥級バックホーを用いて耕土除去後、更に遺構面直上まで掘削し、人力によって遺構検出・掘削を行なった。遺構実測・写真撮影は地上で調査員が行なうと共に、測量用バルーンによる空中測量・写真撮影を実施し記録化を図った。現地調査は昭和62年6月16日～昭和62年11月25日の約6か月間を要し、整理調査は昭和63年度に実施した。

第3章　調　査　結　果

1．試掘調査

排水路　G1・2では淡青灰色粘土が厚く堆積し低湿地状を呈しているが、G3～10・25・26では地表下30～70cmにおいて黄茶色系土を遺構形成面としてピット・溝等が検出された。東に行くにしたがって遺構形成面上に暗褐色系土が10～20cm堆積し、中世土師質土器の小片が若干含まれている。G66～75の内G66～71では、地表下10～60cmのところで茶色系土による遺構形成面を確認し、ピット・溝等が検出された。G72～75は、黒褐色系土・砂利層が堆積し遺構は認められなかった。G79～81・91は遺物を含む落ち込み状を呈しているが、遺構形成面は確認されなかった。しかしながら、隣接する切土面のG92・96・97では、地表下45～60cmにおいてピット・溝等が存在しているので、排水路部分にも拡がる可能性がある。

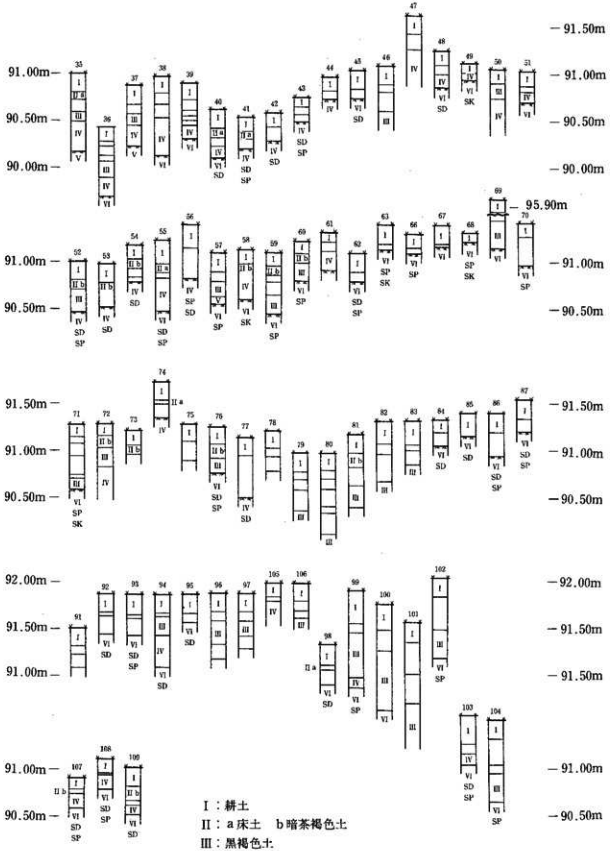
切土面　ほぼ全域において黄茶色系土による遺構形成面が確認され、ピット・溝等が検出された。G55において黒色土器の椀が完形で出土したのをはじめとして、小片ではあるが土師質土器・黒色土器・中世陶磁器類が各トレンチから出土しており、概ね鎌倉時代の遺物・遺構であると考えられるが、集落とJR線との間（G76～97）においては、竪穴住居と想定されるものや須恵器等が出土しており、奈良時代の遺構が重複していると想定される。遺構の確認されなかったトレンチでは、遺構形成面に対応する茶色系土面が他と比較すると50～100cm落ち込んでおり、黒褐色系土が厚く堆積している。



SD：溝
SP：柱穴
SK：土壙

I：耕土
II：a床土　b暗茶灰色粘質土
III：黒褐色土
IV：暗茶褐色土
V：遺構面形成土との混合土層
VI：黄茶色系土＝遺構面形成土

第3図　試掘トレンチ土層柱状図(1)



第4図　試掘トレンチ土層柱状図(2)

2．発掘調査の結果

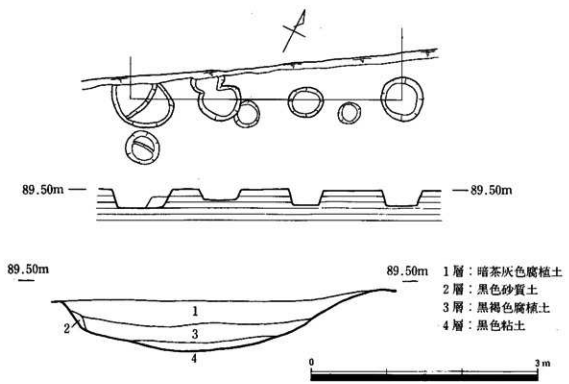
試掘調査の結果に基き、工事により直接影響を受ける排水路(T1～T17)と切土面(T19～21)について、以下トレンチ番号ごとに遺構・遺物の順に記すこととする。尚、遺跡全体の把握については章を改める。

(1)T1

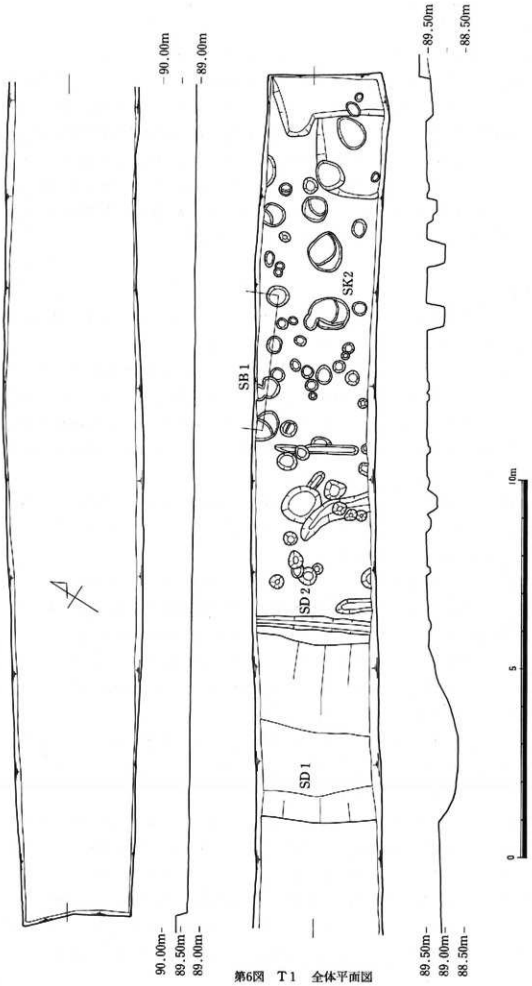
幅約3m、延長約45mのトレンチである。主要遺構は、溝5条、掘立柱建物1棟、円形土壙・不定形土壙数基である。

SD1　トレンチにほぼ直交する状態で検出され、N－28°－Wの方向に延びる。幅は約4.7m、深さは南西肩部と北東肩部との間に約25cmの高低差があるが約75cmを計り、北東壁の傾斜は緩やかである。埋土の上2層は植物遺体を多量に含むスクモ層であり、滞水状態もしくは流水があったことがうかがわれる。SD1の北東にはSD2が並行している。SD1より南西部分については、灰白色粘土が厚く堆積しており北東部分の黄茶褐色系砂質土とは異なる。またヨシ系植物根が認められることから、低湿地状を呈していたと想定される。

SB1　東西3間以上×の掘立柱建物であり、桁行方位はN－27°－Wである。柱穴は径45～75



第5図　T1-SB・SD1　平面図・断面図



第6図　T1　全体平面図

cmの平面円形もしくは楕円形のものである。柱穴間は1.2mである。

ＳＫ２　径約85cm、深さ45cmを計り、埋土は暗灰色粘質土である。埋土内からは、当トレンチ唯一の遺物が出土している（第13図１～３）。１は、灰釉系盤である。口径30cm、器高10.5cmを計る。口縁部は受け口状を呈し、回転糸切り痕を残す底部には、指頭により貼り付けられた扁平な脚が３方向に認められる。内外面上半の釉色は不透明な緑灰白色を呈し、生地は茶灰白色を呈する。２は土師質土器の小皿で、口径9.4cm、器高約2.6cmである。長く延びる口縁の端部はややくせを持ち、軽いＳ字状を呈する。３は土師質土器の大皿で、口径14.4cm、器高約３cmを計る。長く延びる口縁部の中央部が厚くなり、端部は単純におさめている。

(2)Ｔ２

Ｔ１の南東に直交する幅約3.2m、延長約54mのトレンチである。主要遺構は、掘立柱建物２棟、溝５条、石例状遺構１基、井戸１基、土壙数基である。

ＳＢ１　Ｐ２・５・15・22・26を一辺とする南北４間×の掘立柱建物であり、Ｎ－57°－Ｅを主軸方位とする。Ｐ２・15・26は一辺60～85cmの隅丸方形の平面形を呈し、Ｐ２・15には礎石が残存している。この中間に位置するＰ５・22はこれらよりはややこぶりで、一辺約60cmの隅丸方形のもので礎石の存在は認められない。柱穴間は北西から1.88m－1.88m－1.80m－1.64mを計り、建物はトレンチの北東側へ拡がると想定される。

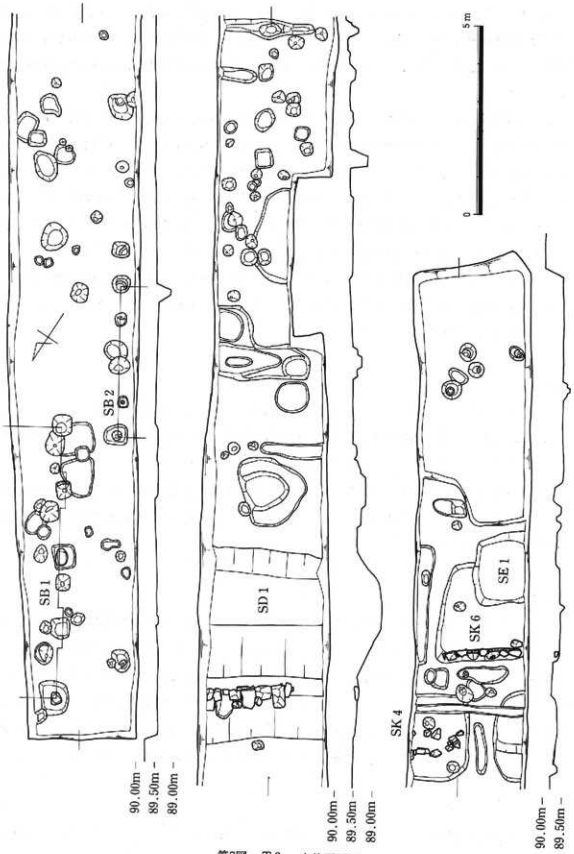
ＳＢ２　南北２間×の掘立柱建物である。ＳＢ１の南側に位置し、主軸方位を同じくする。柱穴は径約45cmの円形もしくは隅丸方形の平面形を呈する。柱穴間は北西から1.84m－2.16mを計り、トレンチの南西側へ拡がると想定される。

ＳＤ１　トレンチにほぼ直交する状態で検出された。幅約５m、深さ約２mを計り、Ｎ－62°－Ｗの方向に延びている。北西肩部つまりＳＢ１・２側には幅約1.8mの１段目を形成し、この面に石垣状列石が残存していた。約30cm×50cm×10～20cmの割石が小口面をそろえて２段認められた。これらの間隙は、約25cm大以下の角礫で埋められ、下段の割石の下には、径約10cmの丸太材が認められた。南東壁は急勾配に立ち上り、石垣状列石あるいはその痕跡は認められなかった。埋土は、Ｔ１－ＳＤ１と同様のスクモ質粘土である。

石垣状列石内埋土から土師質土器皿の小片が２点出土した（第13図４・５）。４は小皿で、口径９cm、器高約2.6cmを計る。口縁部は底部から緩やかに外方へ伸び、端部を単純におさめる。５は大皿であり、口縁端部が僅かにＳ字状を呈する。

ＳＫ４　一辺約2.3m、深さ約20cmを計る、隅丸方形もしくは長方形の土壙であり、ＳＤ６が切り込んでいる。埋土は、暗茶褐色土の単一層である。中央部には、径35～40cm大の角礫によるＵ字形の配石が認められる。これらの角礫には、火を受けた痕跡等は見られない。

ＳＫ６　一辺約2.3m、深さ約30cmの隅丸方形の土壙である。北西壁沿いには、20cm×25cm×10cm大の割石による配石が見られ、最下部には径約10cmの丸太材が遺存している。トレンチ南西壁に沿って１つ配石が延びていることから、２側面にその存在が想定されるが、他側面については


SB 1
SB 2
SD 1
SK 4
SK 6
SE 1
0
5 m
90.00m
89.50m
89.00m
90.00m
89.50m
89.00m
90.00m
89.50m

第7図　T 2　全体平面図

抜き取り痕等は認められない。配石は1段しか残存していないが、所謂石桝状遺構の1つであろう。

SE1　一辺約1.8m、深さ1.5m以上を計り、平面形は隅丸方形を呈する。SK6を切り込み、埋土は上層が暗褐色土、下層が暗灰色粘土となっている。湧水が著しく、トレンチ壁崩壊の恐れがあったため完掘は出来なかったが、掘削部においては、井戸枠等の施設は認められず遺物も出土していない。

T1とT2は一連のものであり、遺構のまとまりの中心の一つでもあるので、ここで若干のまとめをして両トレンチの関係を明確にしておく。まずT1－SD1とT2－SD1は、その埋土の状況が極めて近似し、またその方向からほぼ直角に交わる溝であると想定される。さらに、これらの溝によって囲まれた部分に溝の主軸方位と同じ建物が存在すること、溝の内側に石垣状列石を持つことから、方形区画の塊としての性格が考えられる。この方形区画を一辺40～50mと想定すると、T1とT2は南西隅約¼の部分にあたり、そこに少なくとも3棟以上の建物が存在していたことになる。建物は掘立柱建物のみではなく、T2－SB1の様に大型の物は礎石建物である。時期は遺物が稀少であるため断定はできないが、T1－SK2・T2－SD1出土のものから判断すれば、概ね16世紀である。

(3)T3

幅約2m、延長約23mのトレンチであり、主要遺構は、溝4条、土壙2基である。当トレンチでは青灰白色粘土を遺構形成面としており、他が黄茶色系土を遺構形成面としている状況とは異なる。また、湧水が著しいトレンチでもある。

溝はいずれも北東ー南西方向に延びているが、長さ3m程度で完結している。暗灰色粘土を埋土としている土壙も深さ10cm前後と浅く、当トレンチの状態から見て、低湿地に近い遺跡の縁辺部分にあたると想定される。

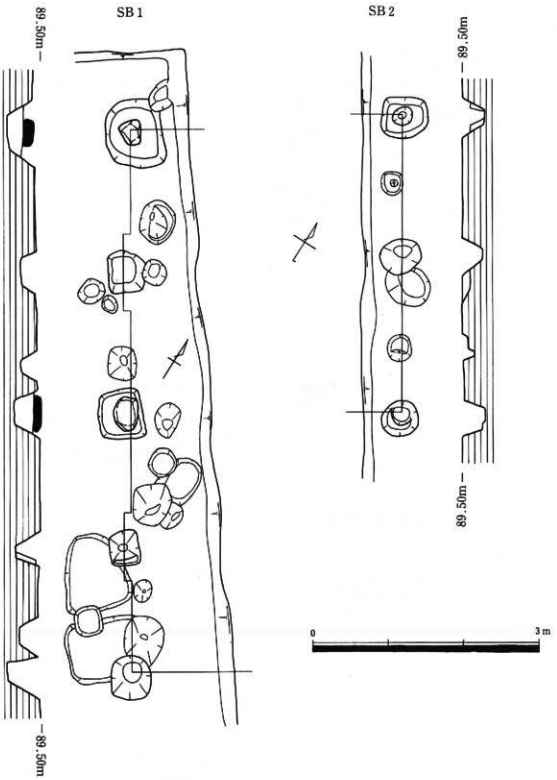
(4)T4

幅約2m、延長約14mのトレンチである。主要遺構は、溝1条、土壙1基である。当トレンチは、T3に近似した状況を呈し湧水も著しいが、遺構形成面は砂利混りの青灰白色粘土である。

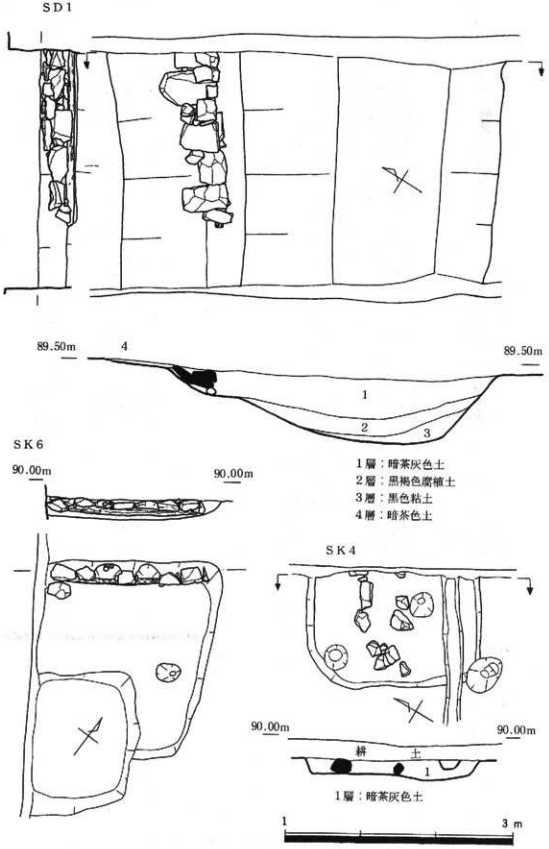
SD1　T字状に分岐する溝であり、幅約2m、深さ約10cmを計る。トレンチに平行するものはN－50°－Eに延び、分岐してトレンチに直行するものはN－36°－Wに延びている。埋土は暗灰色粘土であり、若干の礫が混入している。埋土内からは図示し得ないが、坏身を主とした須恵器の小片が十数点出土している。時期的には、後述するT4－SD1とほぼ同じである。

(5)T5

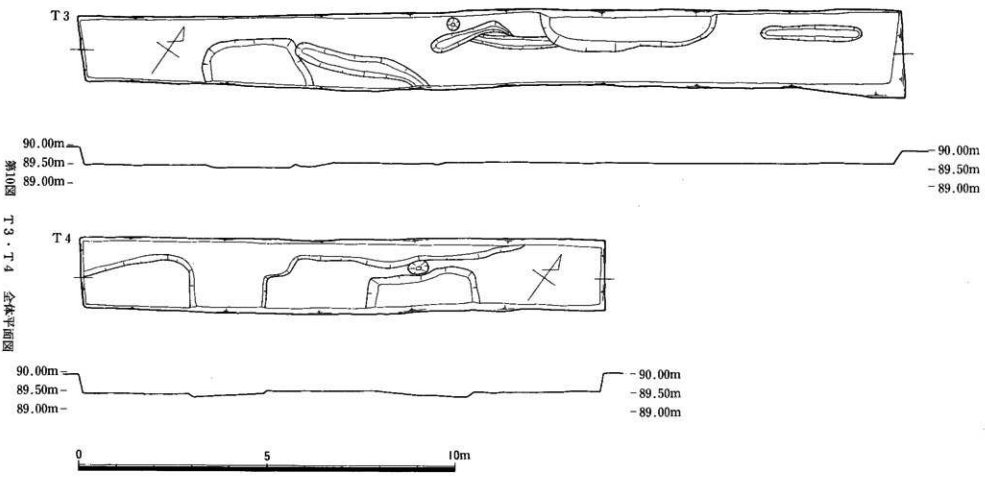
幅3.5m、延長約37mのトレンチである。主要遺構は、溝2条、井戸3基、土壙7基、石桝状遺構1基である。



第8図　T2-SB1・SB2　平面図・断面図



第9図　T2-SD1・SK4 SK6 平面図・断面図



第10図　T3・T4　全体平面図

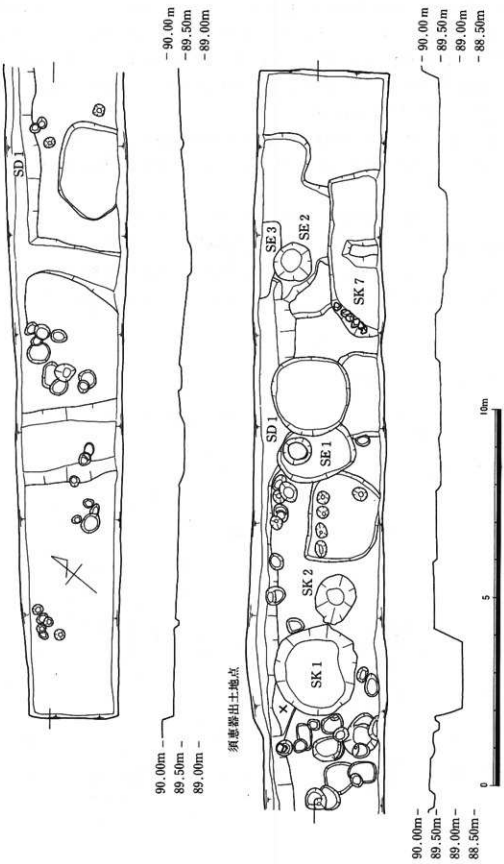
ＳＤ１　トレンチの北西壁に平行して検出されたために、最大幅・深さについては不明であるが、延長約25mを計り、その南西端でＬ字状に屈曲する溝である。トレンチに直交する部分はＮ－27°－Ｗに延び、幅約１m、深さ約15cmと浅くなっている。これにほぼ直交する部分はＮ－50°－Ｅに延び、検出範囲内における深さは約30cmを計るが、その南西端は極めて浅くなって終息している。埋土は、黒褐色粘質土である。ＳＤ１とＳＫ２とが接する部分が若干拡がり平坦面を形成しているが、ここから墨書を有する須恵器の坏身が出土した。坏身は３個が重ねられ、口縁部を下にして平坦部に置かれた状態で検出された。第13図12・13・14は、口径・器高が各々、12.6cm・3.2cm、12.6cm・3.1cm、12.6cm・3.2cmである。12は、口縁部が内彎気味に立ち上がり、端部は丸めにおさめている。底部は回転ヘラ切りであり、やや突出している。底部の外面には、「北院」の墨書が認められる。13は12に類似するが、口縁端部をやや外方へ突出気味におさめている。底部はやはり回転ヘラ切りであるが、平坦である。底部外面には「北院」の墨書がある。14は13に類似するが、回転ヘラ切りの底部は上げ底気味である。14には底部の墨書はないが、坏部外面に「右」の字が認められる。他にも須恵器１点、土師器２点が出土している（第13図10・11・15）。15は墨書を有する12～14のものと同形態を呈すると想定される。10は、口縁端部を外方へ折り気味に突出させて丸くおさめる土師器の皿である。11は、所謂ロクロ土師器と呼ばれているものである。若干突出する底部外面には回転糸切り痕が明瞭に残存し、坏部は大きく外方に拡がっている。胎土は精良で、橙灰色を呈しており、他の土師器との区別は明瞭である。

ＳＫ１　長径約2.4m、短径約2.1m、深さ約75cmを計る、平面形正円に近い土壙である。底面は平坦であり、埋土は上層が暗灰褐色粘土、下層が暗緑灰色粘土である。いずれの土層中にも、植物遺体が多量に含まれている。また下層の暗緑灰色粘土層中には貝殻の堆積が認められ、当土壙が、ゴミ捨て用土壙としての性格を持っていたことが想定される。下層からは、黒色土器椀が１点出土している（第13図６）。口径13.8cmを計るが、高台部が欠損しているため器高は不明である。口縁部外面には、横方向のヘラミガキが比較的丁寧に施されている。これより下部には、高台部から放射状に拡がるループ状のヘラミガキが見られる。内面は、口縁端部に１条の沈線が巡り、ラセン状暗文が施されている。

ＳＫ２　ＳＫ１に隣接して位置する、長径約1.3m、短径１m、深さ80cmの平面楕円形の土壙である。埋土は上層が暗褐色土、下層が暗灰色粘土であり、擂鉢状を呈する。上層からは、土師質の土錘が１点出土した（第13図７）。現存長2.8cm、最大径７mmを計り、橙褐色を呈する小型細形の土錘である。

ＳＫ７　一辺約4.3m、深さ約40cmの、平面方形もしくは長方形の土壙である。北東辺には、約1.2mにわたって配石が認められた。径15～20cm大の角礫６個が面を揃えて並んでいるが、他辺には抜き取り痕等は認められなかった。Ｔ２－ＳＫ６の様な丸太材はなく、扁平な割石を用いていないこと、また土壙内中央部に仕切り状の掘り残し部分があることから、機能・性格に相違があろう。

ＳＥ１　検出時には長径2.1m、短径1.5mの平面楕円形を呈し、北西½において径50cmの曲物



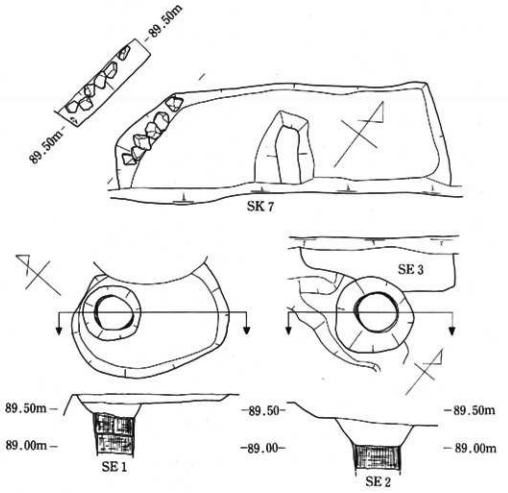
第11図　T５全体平面図

の井戸枠が２段確認された。埋土は最上層が礫混りの暗茶褐色土、上段曲物上面までの第２層が礫混りの黒褐色土、曲物内の第３層が黒褐色粘質土である。第３層からは、黒色土器と土師質土器が出土している（第13図８・９）。８は口径11.8cmを計るが、高台部が欠損しているため器高は不明である。外面はナデによって平滑に仕上げられているが、口縁部にヘラミガキは施されていない。口縁端部の内面は、ヘラミガキによって平坦に形成され、ラセン状暗文が施されている。９は、土師質土器の大皿の口縁部である。

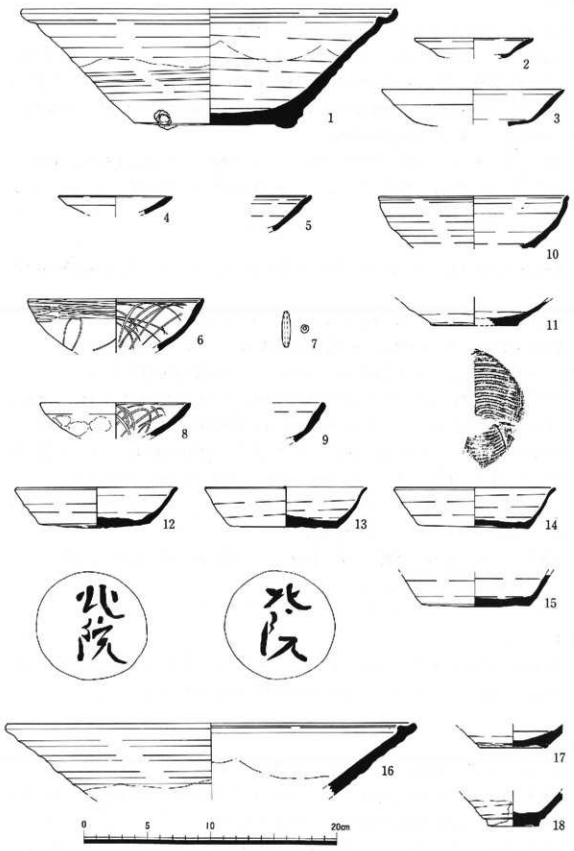
ＳＥ２　ＳＫ７の底面において検出された、径約1.7mの平面円形を呈する井戸である。湧水が著しいため完掘できなかったが、上面から約30cmのところで径約60cmの曲物の井戸枠が検出された。

ＳＥ３　一辺約２m、平面隅丸方形を呈する井戸であり、ＳＥ２が切り込んでいる。

その他に遺構面直上から山茶碗、灰釉系盤、天目茶碗が出土している（第13図16～18）。16は灰釉系の盤であり、口縁端部内面がＹ字状を呈する。釉色はガラス質で黄灰褐色、生地は灰色を呈する。17は山茶碗の底部である。18は天目茶碗の高台部であり、釉色は黒褐色を呈する。



第12図　Ｔ５-ＳＫ７・ＳＥ１・ＳＥ２　平面図、断面図



第13図　T1～T5　出土遺物実測図

(6)T 6

幅約３m、延長約17.5mのトレンチである。主要遺構は、溝５条、柱穴である。

ＳＤ１　トレンチにほぼ平行し、N－47°－Eの方向に延びる溝である。検出部分における最大幅は約1.9mを計り、深さは約45cmである。断面形の観察から、幅は2.5m前後になるものと推定される。埋土の堆積状態から、黒褐色系土により埋没した後、暗褐色粘質土を埋土とする幅約1.2m、深さ約25cmの溝が再び開削されている。

ＳＤ３・４・５　幅25～40cm、深さ約10cmを計り、やや彎曲しているがほぼＳＤ１と平行して延びている。南西部においてとぎれているが、一連のものであると考えられ、さらに隣接するＴ７－ＳＤ２に続いている。

(7)T 7

幅約2.8m、延長約60mのトレンチである。主要遺構は、溝６条、土壙１基、自然流路１条である。

ＳＤ１　検出部分における最大幅が約70cmを計り、Ｔ６－ＳＤ１に続く溝である。

ＳＤ２・３・４・６　幅約50cm、深さ10～20cmの溝であり、Ｔ６－ＳＤ５からの一連のものと考えられる。Ｔ６部分を含めた総延長は約55mとなり、埋土は暗褐色粘質土である。

ＳＤ３からは、黒色土器と土師質土器が１点づつ出土している（第15図１・２）。１は、口径17.4cm、高台径５cm、器高4.9cmを計る黒色土器の椀である。口縁部外面は強いヨコナデが施され、その下方に横方向のヘラミガキが若干認められる。高台部から放射状に施されたヘラミガキは、高台接合部分の整形も兼ねるものである。高台は概ね断面台形を呈するが、やや扁平でいびつである。口縁端部内面には細い沈線が１条巡り、内面には暗文が認められる。２は土師質土器の大皿であり、口縁端部は上方へ突出させておさめる。

ＳＲ１　ＳＤ６を切り込む流路である。暗灰色粘土を上層の埋土としている。埋土内からは、中・近世陶磁器が若干出土している。

(8)T 8

幅約２m、延長約15mのトレンチである。トレンチ全面においてＴ７北東端で検出されたＳＲ１の続きが検出された。埋土からは、若干の中・近世陶磁器が出土している。

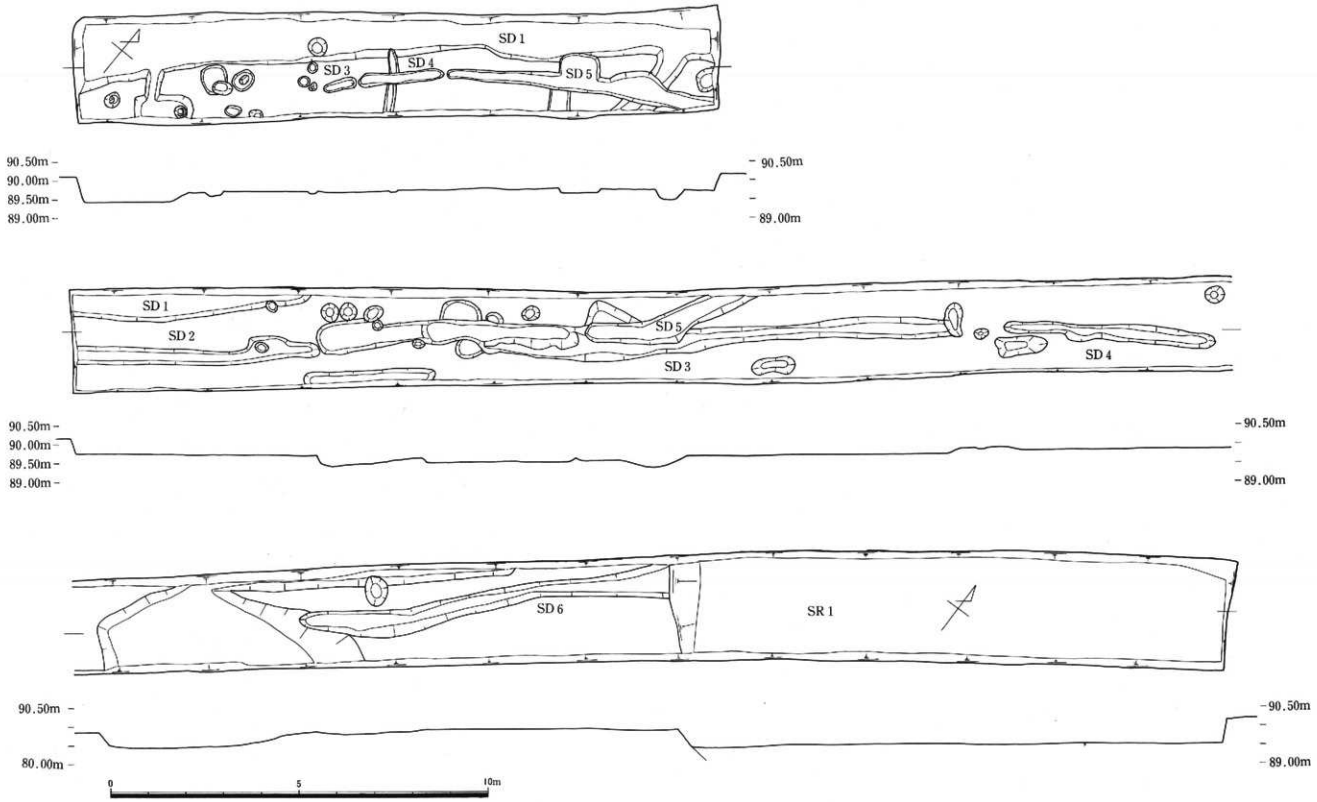
(9)T 9

幅約５m、延長約45mのトレンチである。主要遺構は、溝３条、柱穴、自然流路である。

ＳＲ１　当トレンチの南東に位置するＴ７・８において検出された自然流路の東側肩部にあたる。これにより、ＳＲ１が幅約70mであることが想定される。

ＳＤ２　幅約2.5mを計る２段掘りの溝である。深さは最深部で約65cmであり、N－50°－Wの方向に延びている。埋土は上層が暗褐色土、下層が暗褐色礫層である。

ＳＤ３　トレンチの北東部に位置する溝であり、暗褐色土を埋土とする。溝内の高まりには、



第14図　T 6 ・T 7　全体平面図 (S＝1／100)

20～30cm大の角礫がかたまって検出されたが、直接遺構に伴うものとは考えられない。埋土からは、土師質土器等が出土している（第15図３～６）。３は土師質土器の小皿で、口径11.4cmを計る。大きく外方へ開く口縁部は強いヨコナデによって段を形成し、端部を薄く仕上げる。４・５は、鉢焙である。４は口縁部を内彎させて丸くおさめ、５は底部から明瞭な屈曲部を持って立ち上がる口縁端部を外方へ巻き込んでいる。６は高台径4.8cmを計る、天目茶碗である。

⑽Ｔ10

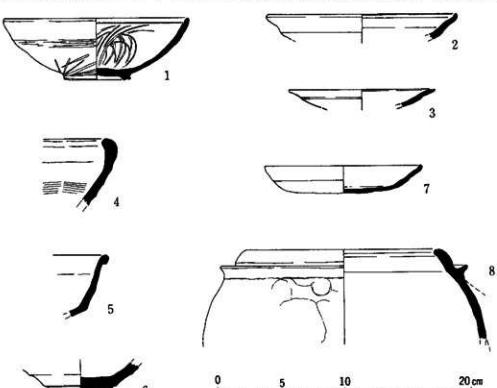
幅約２m、延長約37.5mのトレンチである。主要遺構は、溝６条、不定形土壙、柱穴である。

ＳＤ３　幅約40cm、延長約1.8mの溝である。黒褐色粘質土を埋土とし、土師質土器の大皿が１点出土した（第15図７）。口径12.4cm、器高2.2cmを計る。口縁部は底部から緩やかに立ち上がり、端部を直立気味に突出させておさめている。

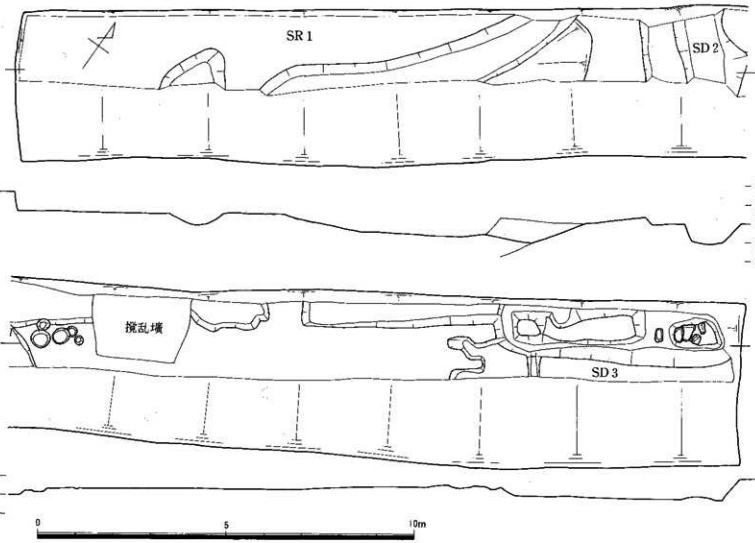
ＳＤ５　幅約75cm、延長23m以上の溝であり、Ｎ－51°－ＥとＮ－37°－Ｗの方向にＴ字状に分岐している。深さは南西部分では約５cmであるが、分岐部分より北東については最深で約40cmとなり、幅も増すようである。黒色粘土を埋土とし、土師質の羽釜が１点出土した（第15図８）。口径は17.6cmを計り、内傾する口縁部からそのまま球状に胴部が拡がっている。鍔は斜め上方に突出し、直下に脚のはがれた跡があることから、三足羽釜である。

⑾Ｔ11

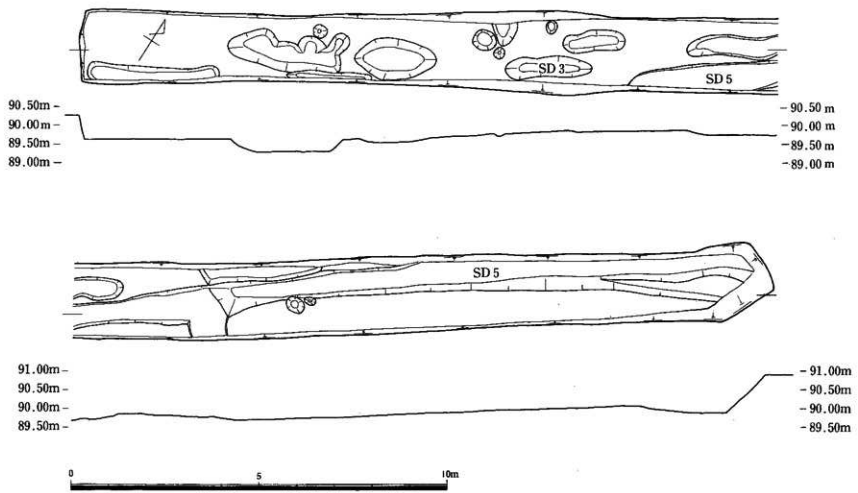
幅約２m、延長約63mのトレンチであり、主要遺構は、溝６条、柱穴である。茶褐色砂質土を



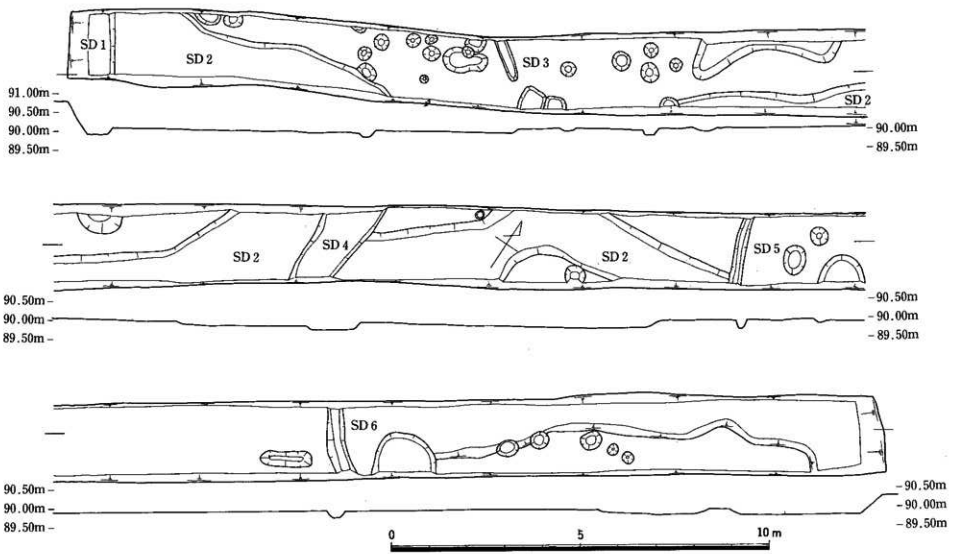
第15図　Ｔ６～Ｔ12出土遺物実測図



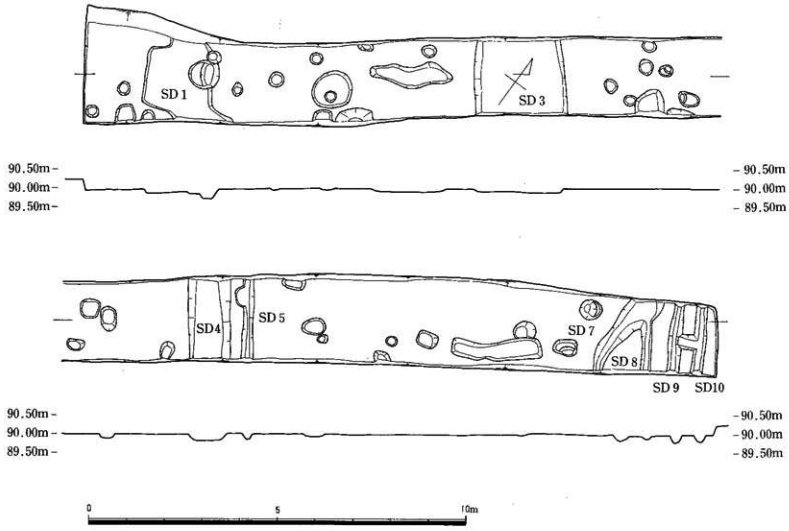
第16図　T9　全体平面図



第17図　T10　全体平面図



第18図　T11　全体平面図



第19図　T12　全体平面図

遺構形成面とし、標高はＴ１～Ｔ11より約50cm高くなっている。

ＳＤ１～６　一定方向性を持つ溝は、トレンチに直交もしくは斜交するＳＤ１（Ｎ－33°－Ｗ）・ＳＤ３（Ｎ－50°－Ｗ）・ＳＤ４（Ｎ－３°－Ｗ）・ＳＤ５（Ｎ－21°－Ｗ）・ＳＤ６（Ｎ－39°－Ｗ）であるが、各々に同軸性は認められない。ＳＤ２は幅1.6m以上の蛇行する溝であり、遺構面形成土とほぼ同質の茶褐色砂質土を埋土としている。

トレンチ北東部分は、北側に向けて若干落ち込んでいる。

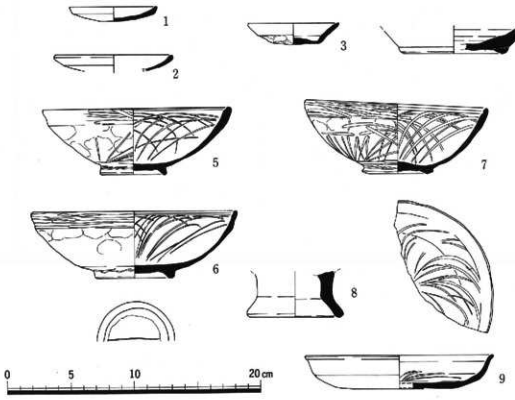
⑿Ｔ12

幅約2.5m、延長約35mのトレンチである。遺構形成面はＴ11と同レベルであるが、黄灰色粘質土を遺構面形成土としている。主要遺構は、溝10条、柱穴である。

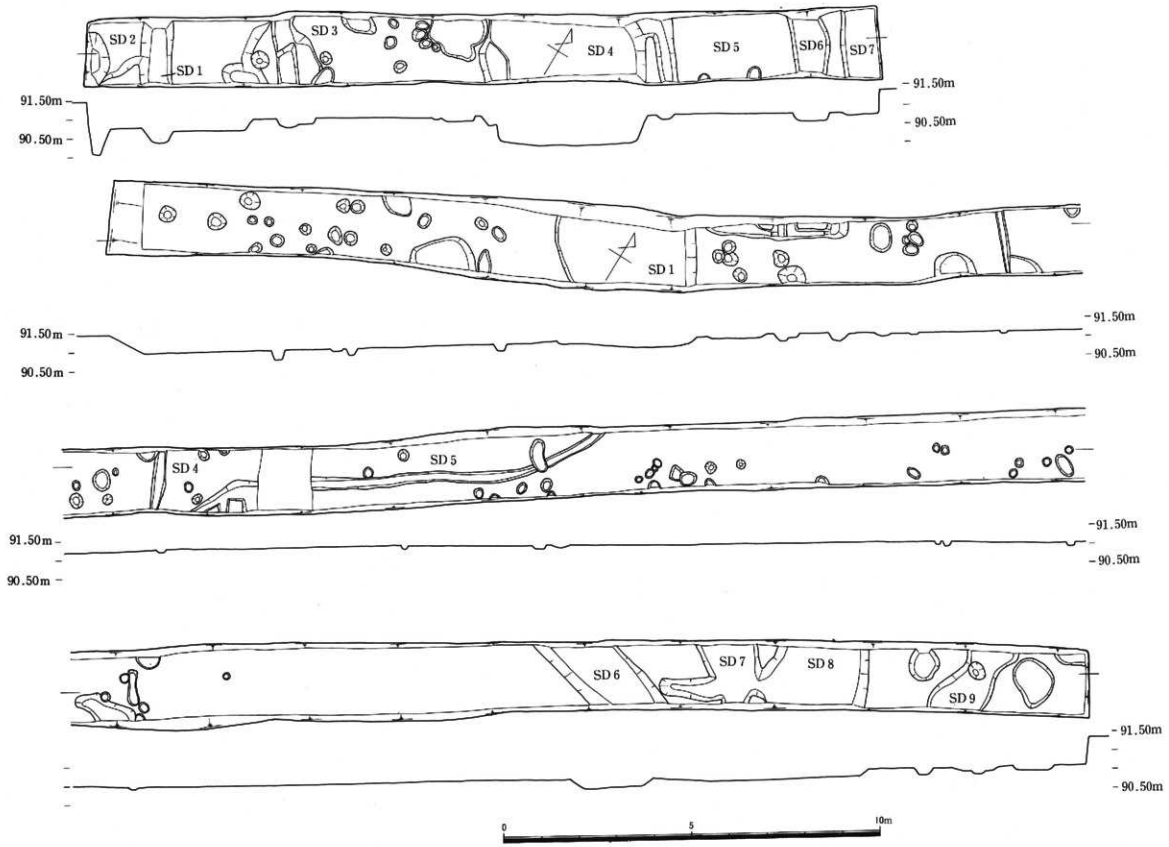
ＳＤ１～10　やや不定形のＳＤ１（Ｎ－40°－Ｗ）、トレンチに斜交するＳＤ７（Ｎ－２°－Ｗ）以外は、Ｎ－30°～35°－Ｗに延びる溝である。ＳＤ３は、幅約2.4m、深さ約10cmを計る浅い皿状の溝である。ＳＤ４と５、ＳＤ８・９は各々近接して並行し、ＳＤ３－ＳＤ４・５－ＳＤ８～10の間隔は、7.5m～10mである。

⒀Ｔ13

幅約1.8m、延長約20mのトレンチである。主要遺構は、溝５条、土壙２基、柱穴である。黄茶



第20図　Ｔ13・Ｔ14出土遺物実測図



第21図　T13・T14　全体平面図

色砂利層を遺構形成面とする。

ＳＤ４　他の溝と同様にトレンチにほぼ直交し、Ｎ－31°－Ｗに延びる幅約3.6m、深さ約70cmの溝である。埋土は上層が礫混りの黒色土、下層が暗茶色礫である。

ＳＤ７　幅１m以上、深さ約10cmの浅い溝であり、Ｎ－33°－Ｗに延びる。黒色粘土を埋土としており、黒色土器、土師質土器が出土した（第20図５～９）。５～７は黒色土器であり、口径・高台径・器高は各々、14cm・５cm・5.3cm、16cm・６cm・5.3cm、14.4cm・5.6cm・5.5cmである。５は口縁部外面に横方向のヘラミガキ、高台部から口縁部に向けて放射状にヘラミガキが施されている。口縁端部の器壁が最も厚くなり、内面に１条の沈線が巡る。高台は断面二等辺三角形を呈しハの字状に貼り付けられている。外面の接合部分はヘラで調整される。６は、高台部からの放射状のヘラミガキがない以外は５と同様のものである。高台は断面台形を呈し、底部外面には横一文字のヘラ描き痕がある。７は、３点の中では最も調整が丁寧なものである。外面の放射状ヘラミガキの密度も高く、高台部周辺は他の２点が余分な粘土をこそぎ取っただけの感があるのに対して、更に２条程度の丁寧な横方向のヘラミガキが加えられている。高台は、断面形が扁平な台形を呈している。８は、土師質土器台付皿の脚台部である。中位部で大きく屈曲して裾部はハの字状を呈するが、上部は直立する。９は、土師質土器の大皿である。口径は14.8cm、器高は3.2cmを計り、口縁端部を外方へ突出させて丸くおさめている。底部内面には、乱雑ではあるがヘラ状工具による放射状圧痕が認められる。

(14)Ｔ14

当初３つのトレンチとして設定したが、最終的に幅約２m、延長約80mの１つのトレンチとした。主要遺構は、溝９条、焼土ピット１個、柱穴である。遺構形成面は南西側では黄茶色砂利混合土であるが、北東に向かうにしたがって茶色系砂質土に変質する。

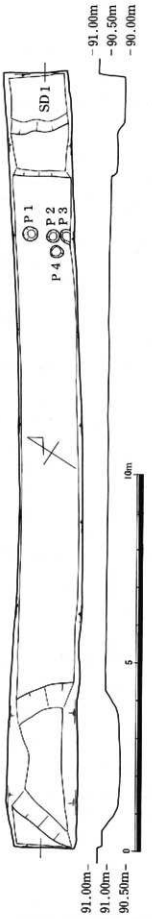
ＳＤ１～３　幅約3.8mのＳＤ１、幅約20cmのＳＤ３・４は、ほぼ方向を同じくしてＮ－23°～38°－Ｗに延びるが、他は不定である。ＳＤ２からは、土師質土器皿が２点出土している（第20図１・２）。１は口縁部をヨコナデによって上方へ突出させただけのものであり、口径6.8cm、器高1.1cmを計る。口縁端部内外面にはタール状物質が付着している。２は、推定口径９cmを計る。底部と口縁部との境が不明瞭で、口縁端部がやや厚く、丸くおさめる。

Ｐ44　焼土である橙褐色土および炭化物を埋土とするピットで、長径約90cm、短径約40cmを計り平面形は長楕円形を呈する。埋土最上面で土師質土器小皿、底面から山茶碗が出土した（第20図３・４）３は、底部屈曲部の器壁が最も薄くなり、やや外反気味に長く口縁部をのばし、端部は丸くおさめている。４は山茶碗の底部であり、高台部にモミ痕が認められる。

(15)Ｔ15

幅約1.8m、延長約16mのトレンチである。主要遺構は、土壙１基、溝１条、柱穴３個である。

ＳＫ１　径4.5m以上、深さ約50cmの土壙である。埋土は暗褐色礫混合土である。



第22図　T15全体平面図

ＳＤ１　トレンチの北東端において約2.5m分が検出されたが、隣接するT16－ＳＤ１の西側肩部になると想定される。１段目は幅約１ｍで深さ約15cm、２段目は深さ約40cmになる。黒褐色土を埋土とする。

Ｐ１～４　径約35cm、深さ約20cmを計り、平面形は円形を呈する。Ｐ１－４はＮ－32°－Ｗを軸としており、ＳＤ１の西側辺と方向を同じくしている。このことから、ＳＤ１に付属する柵状遺構の可能性が考えられる。

⑯Ｔ16

幅約1.8m、延長約95mのトレンチであり、後述するT20と接している。主要遺構は、溝10条、土壙、柱穴である。黄褐色系砂質土を遺構形成面とするが、北東端では一段低くなり、黄褐色砂礫土が遺構形成面となる。

ＳＤ１　深さ約75cmを計り、北東辺はほぼ東西に延びる。埋土は黒褐色土であり、底面に近くなるにつれて粘質性を増す。T15－ＳＤ１と一連の溝である。

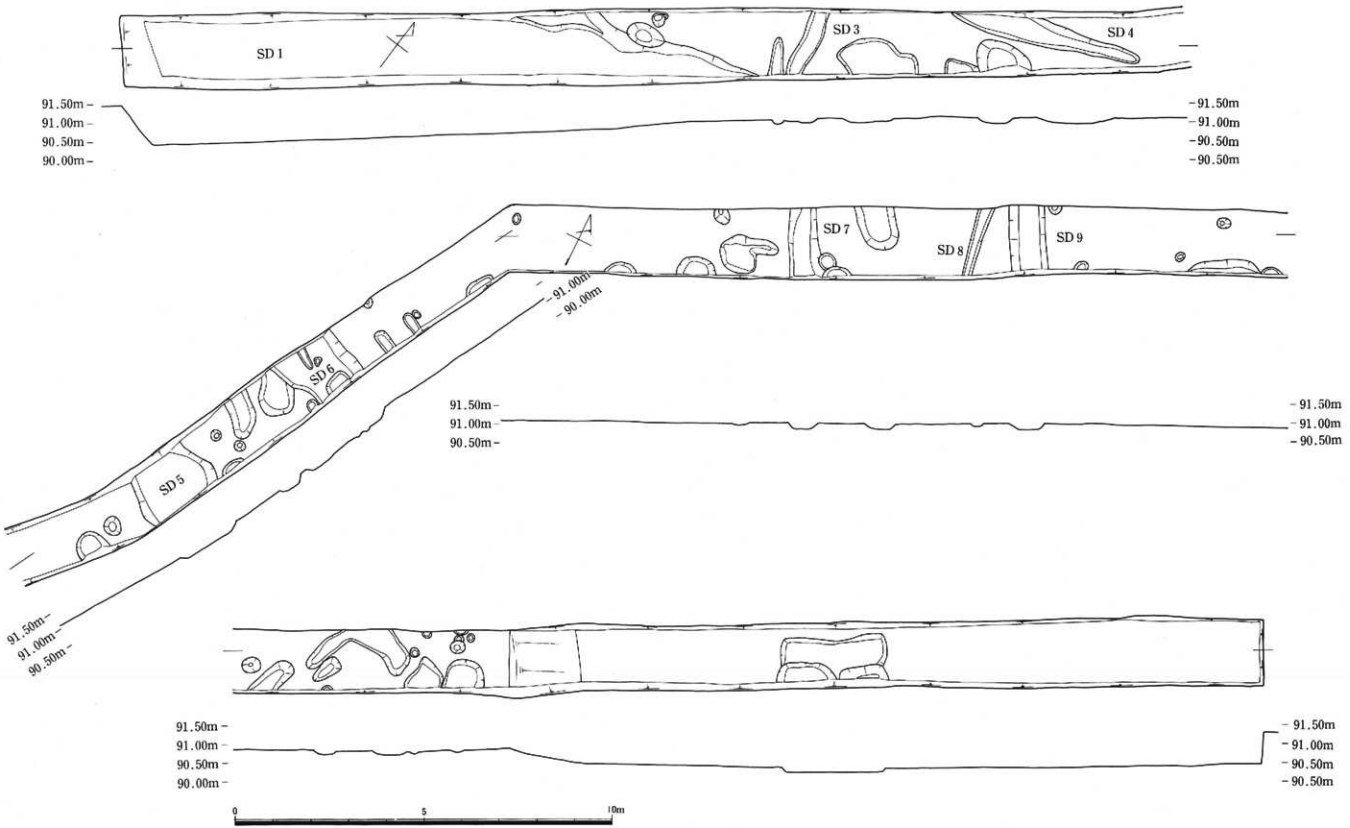
ＳＤ３・４　幅約50cmと70cmの溝である。いずれも暗褐色土を埋土としており、Ｌ字状に連なると想定される。ＳＤ３は、Ｎ－12°－Ｗを主軸方位とする。

ＳＤ８　幅約30cm、深さ約10cmを計り、Ｎ－10°－Ｅに延びている。これは、北側に接しているT18においても検出されている。

⑰Ｔ17

幅約2.5m、延長約40mのトレンチであり、今回調査区の最南端に位置するトレンチである。試掘調査の際、遺物包含層が確認されたため発掘調査となったトレンチであるが、遺構は検出されなかった。包含層は、基本的に上・下２層に分けられる。上層は暗褐色粘質土、下層は暗灰色粘土であるが、遺物が上・下２層間に渡って接合可能であるため、明瞭な時期差を見い出すことはできない。包含層下の基盤層は、青灰白色粘土である。また、包含層は２層ともスクモ質粘土の性質を有しており、当トレンチ周辺が低湿地状を呈していたことがうかがわれる。

出土遺物としては、須恵器坏身・坏蓋・壺、土師器坏・高杯・甕・片口鉢、古瀬戸小皿、信楽擂鉢である（第24図）。



第23図　T16　全体平面図

1は坏C類であり、口径13.6cm、器高1.9cmを計り、器高指数は12となる。口縁部外面はヨコナデ、底部外面はb手法のヘラケズリである。口縁部内面は、間隔の粗い斜放射状暗文が1段施され、底面にはラセン状暗文が認められる。胎土は精良で、色調は橙白色を呈する。2は口径20cm、器高4.4cmを計り、器高指数が22となる坏AⅠ類である。口縁部外面は、ヨコナデの後に粗い横方向のヘラミガキが施されている。底部外面は、b手法のヘラケズリである。口縁部内面には比較的密度の高い斜放射状暗文が施され、底面にはラセン状暗文が認められる。胎土は精良で、色調は橙褐色を呈している。3は椀C類であり、推定口径16cm、推定器高4.2cm、器高指数26を計る。磨滅が著しいため調整は不明瞭であるが、口縁端部は強いヨコナデによってやや外方へつまみ出している。口縁部外面下方には粗い横方向のヘラミガキが認められ、底部外面はヘラケズリである。内面は、口縁端部が内傾した平坦面を有し、その下方に斜放射状暗文が1段認められるが、底面については不明である。胎土はやはり精良であり、色調は黄橙白色を呈する。高坏は小片であるため図示し得ないが、暗文を有する坏部分と脚部の筒状部分が出土している。

4～15は、須恵器である。4は口径14.4cmを計り、やや扁平な宝珠つまみが付く坏蓋である。口縁端部は垂直気味であり、天井部はヘラケズリ部分が平坦である。5．6も4とほぼ同様の形態を呈するものであるが、5は口縁端部が大きく内傾し、6は口縁端部内面に内傾する平坦面を有している。7は、口径18.4cm、器高3.8cmを計る坏蓋である。口縁部内面には丸みを帯びたかえりを有している。8・9は、坏蓋の宝珠つまみである。10は、口径11cm、推定器高3.6cmを計り、かえりを有する坏身である。11～13は、高台を有する坏身B類である。11は、口径14.2cm、器高3.5cmを計る。口縁部は直線的に外方へ開き、高台は断面形が扁平な台形を呈する。12は、口径14.4cm、器高3.7cmを計り、法量的には11とほぼ同じであるが、口縁部はやや外反する。いずれも底部外面は回転ヘラ切りである。13は、断面長方形の高台がハの字状に付いており、外面には自然釉がかかっている。14は口径11.6cm、器高3.6cmを計り、器高指数31となる坏A類である。口縁端部は若干外反し、底部はややふくらんでいる。15は、口径13.2cm、器高4.4cm、器高指数33となる。口縁部は直線的にのび、底部は平坦である。14と共に底部外面は回転ヘラ切りである。須恵器類としては、この他に図示し得なかったが、波状文を有する広口壺、タタキを有する甕の体部破片等が出土している。

16～19は、近江型長胴甕の口縁部である。16は、内彎する口縁端部に面を有し、外面に1条の浅い沈線が巡っている。内面は、全面に横方向のハケメが認められる。17もやはり口縁部が内彎するが、端部は丸くおさめている。口縁部は内外面共にヨコナデ、胴部は内外面共にハケで調整されている。18は、内彎する口縁端部に内傾する平坦面を有している。19は、内面では緩やかに内彎しているが、外面では段を有している。内傾する平坦面を有する端部は、若干外方へ突出している。図示し得ないが、胴部の破片を観察すると、内外面共にハケメ調整のものと、外面ヘラケズリのものがあり、後者が胴部下半から底部にかけての破片となる。20は、土師器の片口鉢である。口径19cm、器高10cmを計り、ほぼ半球状を呈する。外面上半はハケメ調整が施されているが、粘土紐接合痕が明瞭に残存している。下半から底部にかけては、底部から上方へ向けての雑

なヘラケズリが施されている。口縁部はヨコナデによって平滑に仕上げられ、端部内面には凹線状の段を有し、擬口縁状を呈している。内面は一面に丁寧なハケメが施されており。底面は放射状に施した後に中央部だけに1方向のハケメが施されている。片口部分は、強い指ナデによって外方へ突出させている。粘土紐接合痕の観察から、1単位の粘土紐は幅約1.5～2cmであり、底部から5段によって成形されている。成形手法・調整手法等16～19の長胴甕と共通している。

21は、包含層最上面から出土した古瀬戸の小皿であり、口径10cm、器高2.8cmを計る。口縁部は内彎して立ち上がり、高台は断面三角形である。釉色は黄緑色を呈しており、透明なガラス質である。図示し得ないが、21と同地点で信楽の擂鉢の底部が出土している。

(18)小結

ここで、排水路を対象として狭長なトレンチ調査となったT1～T17について若干の整理をしておく。

まず、調査区最南端のT17包含層出土の遺物を見ると、最上層から出土した古瀬戸・信楽を除くと、概ね8世紀前半を中心とする時期の土器群である。当トレンチでは遺構は検出されなかったが、低湿地状を呈していたこの周辺に当該時期の遺構が存在していることを示している。

続く時期の遺構は、明確なものとしては墨書須恵器が出土したT5－SD1、この南西に隣接するT4－SD1に限られる。いずれもL字もしくはT字状に分岐するが、N－50°－Eを一方の主軸方位とする。須恵器の形態から、概ね9世紀頃に相当する。

次はやや間があき、12～13世紀の遺構がT3～T16において溝を主体として検出されている。前2時期のものが地点的にある程度限定されるのに対し、ほぼ全域から検出されており、当段階にはより広範囲に当地域が利用されていたことがうかがわれる。

次に確認された遺構も前時期とはやや間があき、15～16世紀のものとなる。北西端に位置するT1・2を中心とする方形区画溝を有する1群がこれに相当する。溝はN－28°－WとN－62°－Eを主軸方位とし、内部の建物もこれに規制されている。

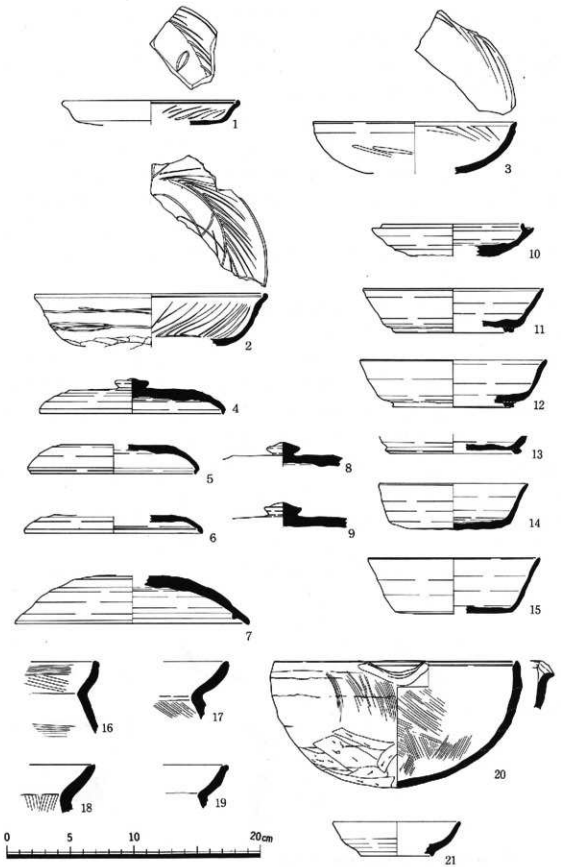
以上の様に、大まかに4時期の遺構の変遷が当調査区内において追えることが仮定できる。

(19)T18

約1400m²のトレンチであり、南側がT16と接している。遺構形成面は暫次変化し、北側1/3では茶褐色系砂質土、中央部1/3では黄茶色砂質土（若干砂利を含む）、南側1/3では黄色砂利層となる。主要遺構は、掘立柱建物6棟、溝11条、楕円形土壙、不定形土壙、柱穴である。

SD1　幅20～30cm、深さ約10cmの溝で、やや彎曲するがN－15°－Wに延びる。T16－SD8の延長である。

SD2～5　いずれも幅約70cmの溝で、N－55°－Eを主軸方位としている。これは、後述するSB5・6の主軸方位とほぼ同じである。深さは西側のSD2が45cmと最も深く、SD3が20cm、SD4・5が18cmと順に浅くなっている。埋土は、いずれも灰褐色土を主体とする。SD2北半



第24図　T17出土遺物実測図

部においては、ＳＢ５側からつまり北西側から溝が埋積していった状況が観察できた。

ＳＤ２からは、瓦質の火舎が出土している（第25図６）。

ＳＫ１　長径２m、短径1.3mを計り、平面形が卵形を呈する土壙である。中央部が１段落ち込んでいるが、埋土は基本的に黒褐色土である。

ＳＫ２　長径2.4m、短径1.9mのやや不定形な楕円形を呈する土壙である。深さは約５cmで、暗褐色土を埋土とし、この中央部に径1.2m、深さ20cmの円形土壙が切り込んでいる。これは、上層が黒褐色土、下層が黄褐色砂質土と黒褐色土が縞状になった土層を埋土としている。

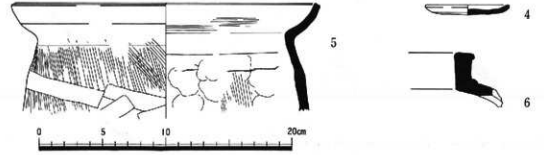
ＳＫ５　長径２m、短径1.3mのややいびつな隅丸長方形を呈する土壙である。底面は２段掘りになっており、埋土はＳＫ１を切り込んでいる円形土壙と同じ状況である。

ＳＫ７　長辺1.6m、短辺75cmの長方形土壙である。中央部が落ち込んでいるが埋土は暗灰色土の単一層であり、近世陶磁器が出土している。

ＳＫ８　長辺1.8m、短辺80cmを計る平面形が隅丸長方形の土壙である。中央部が落ち込むが、ＳＫ７と同様に埋土は暗灰色土の単一層である。

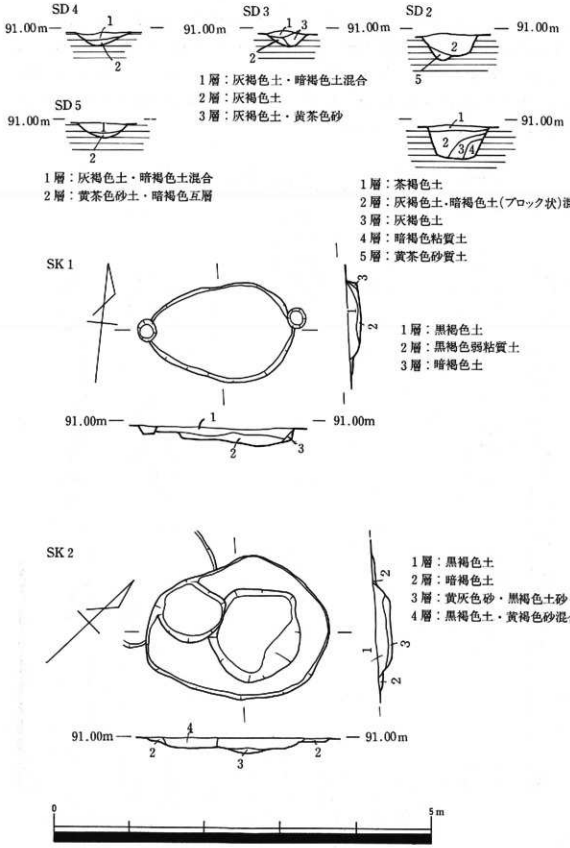
ＳＸ１・２・３　平面形が隅丸方形を呈する土壙であり、３基が切り合っている。底面はややいびつで、埋土は暗褐色土と遺構面形成土である黄茶色砂質土が縞状あるいはブロック状に堆積している。埋土からは、少量の近世陶磁器と瓦が、そしてＳＸ２ではこれらに混じって土師質土器皿が出土している（第25図４）。口径6.6cm、器高0.8cmを計る。

ＳＸ４・５　いずれも2.5m×１m程度の不定形の土壙である。埋土は黒褐色土を基本としているが、焼土および炭化物の混入が認められる。竪穴住居あるいはカマドの可能性が考えられたため周辺を精査したが、それらの痕跡は確認できなかった。ＳＸ４からは、近江型長胴甕が出土している（第25図５）。口径は23.6cmを計る。口縁部は内彎し、端部は面を有している。胴部はほとんど張らずにのび、外面は縦方向のハケメの後、横方向のナデが施されている。ＳＸ５からも長胴甕の胴部破片が１個体分出土している。



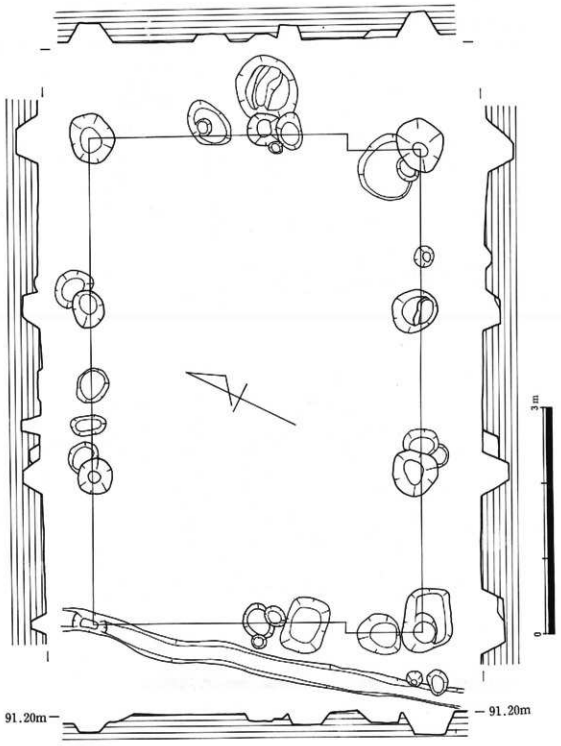
第25図　T18　出土遺物実測図

第26図　T18　全体平面図



第27図　T18-SD 2・3・4・5・SK 1・2　平面図・断面図

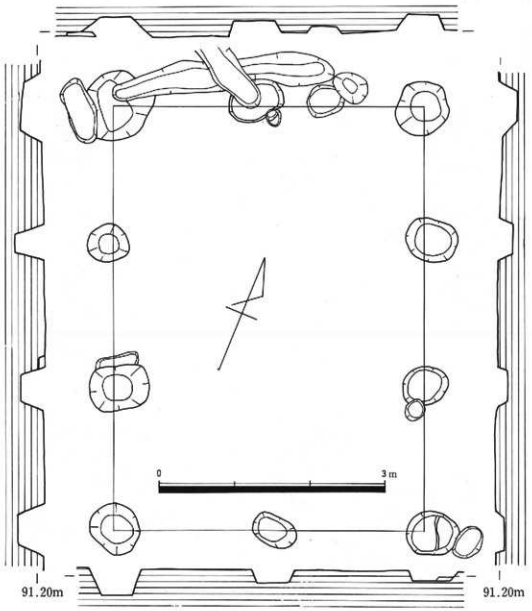
SB1　径50～70cm、深さ約30cmを計る円形柱穴からなる２間×３間の掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西が2.25m—2.25m—2.00m、東辺南北が2.05m—2.35m、南辺東西が2.20m—2.15m—2.10m、西辺南北が2.25m—2.15mであり、N—64°—Eを桁行方位とする。柱穴内埋土は黒褐色土であり、須恵器坏身が出土した（第25図１・２）。口径・器高は各々12.2cm・2.9cm、14cm・2.9cmであり、底部は回転ヘラ切りである。



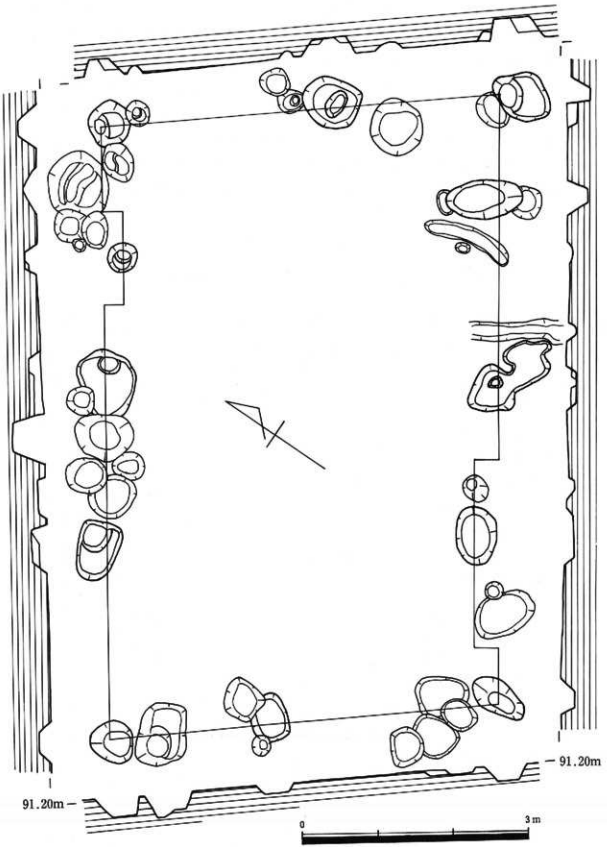
第28図　T18—SB1平面図・断面図

ＳＢ２　２間×３間の規模の掘立柱建物であり、Ｎ－22°－Ｗを桁行方位とする。柱穴は、四隅がやや大きく径約75㎝、他は40～60㎝の円形のものである。柱穴間は北辺東西が2.25m－1.90m、東辺南北が1.95m－1.95m－1.75m、南辺東西が2.00m－2.15m、西辺南北が1.90m－1.90m－1.85mである。黒褐色土を埋土とし、主軸方位と埋土の比較からＳＢ１と同時期のものと想定される。

ＳＢ３　Ｎ－56°－Ｅを桁行方位とする、２間×４間の掘立柱建物である。柱穴間は、北辺東西が1.75m－1.40m－2.35m－2.60m、東辺南北が2.20m－3.10m、南辺東西が1.35m－2.45m－2.05m－2.25m、西辺南北が3.00m－2.15mを計り、ばらつきが著しい。柱穴の平面形も一定で



第29図　T18-SB２　平面図・断面図



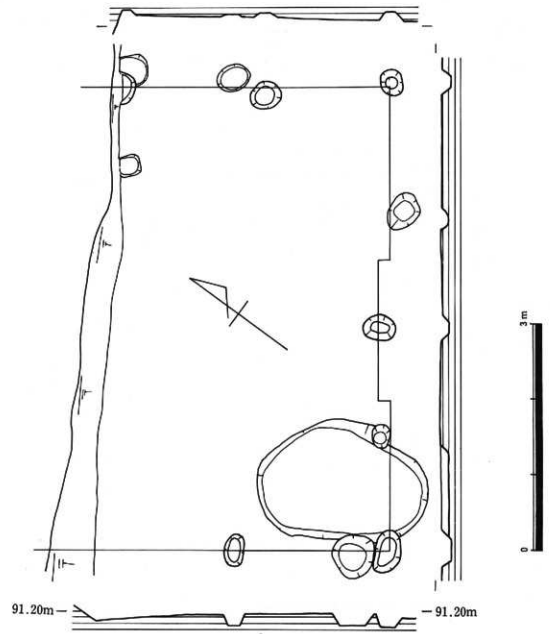
第30図　T18-SB3　平面図・断面図

はなく、暗褐色土を埋土としている。

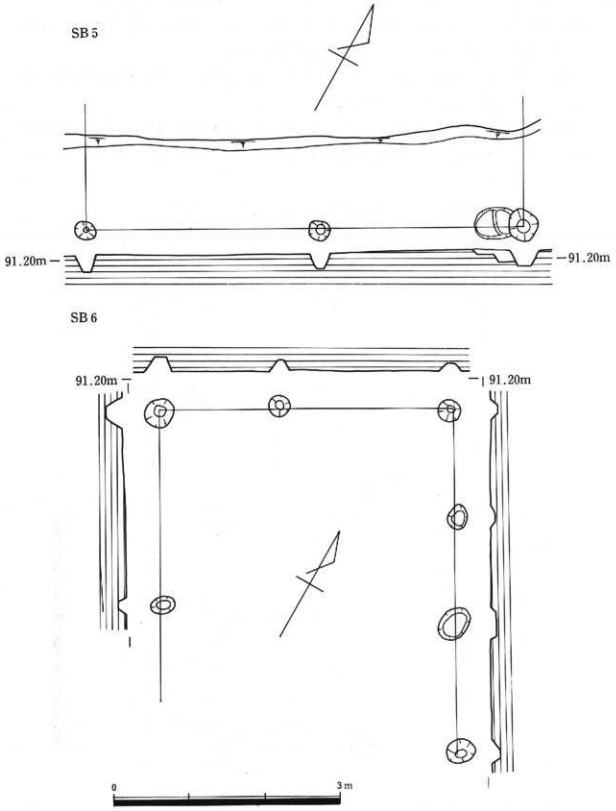
ＳＢ４　径約30㎝の柱穴からなる２間×３間以上の掘立柱建物である。深さは約15㎝と浅く、暗褐色礫混合土を埋土とする。柱穴間は、東辺南北が1.65m—1.85m、南辺東西が3.20m—2.95m、西辺南北が2.05mを計り、N—53°—Eを桁行方位とする。

ＳＢ５　N—30°—Wを主軸方位とする掘立柱建物の南辺である。柱穴は円形で、暗褐色土を埋土とする。柱穴間は、2.70m—3.10mである。

ＳＢ６　２間×３間以上、桁行方位をN—30°—Wにとり、ＳＤ２～５を挟んでＳＢ５の南東に位置する掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西が2.30m—1.60m、東辺南北が1.70m—1.45m—



第31図　T18-SB４　平面図・断面図



第32図　T18-SB5・SB6　平面図・断面図

1.45m、西辺が2.60mであり、南辺は撹乱により消失している。

ここで、T18における主要遺構の推移について若干の整理をしておく。

まず、SX4・5が8世紀代の長胴甕を出土している。不定形の土壙であるが、焼土・炭化物を含んでおり、竪穴住居の痕跡である可能性は否定しきれない。

2間×3間の規模を有する掘立柱建物SB1・2は9世紀代に比定される。N—22°—Wを主軸方位とし、2棟がL字状に隣接して配置されている。時期判断可能な遺物の出土はないが、SB1・2柱穴内埋土と同じ黒褐色土を埋土とするSK1・2が、やはり当時期のものとしてあげられる。これらは、SB1・2とやや間隔を置いた南東に位置している。

SB3～6については、遺物の出土がないため即刻に時期決定することはできないが、SB5・6と関連を持つと考えられるSD2より出土した瓦質火舎から、概ね鎌倉時代後半であると想定され、SB3・4についてもこれに前後する時期であろう。尚、SB3・4はN—34°・37°—Wを、SB5・6はN—30°—Wを主軸方位としており、若干の差違がある。

(20)T19

約520m²のトレンチであり、黄茶色系砂質土を遺構形成面としている。主要遺構は、掘立柱建物6棟、柵列、溝5条、井戸1基、土壙1基等である。

SE1　径約1m、深さ80cm以上の井戸であり、SD1とSB3の中間に位置している。埋土は基本的に上下2層に分かれ、上層は暗茶褐色系土、下層は黒灰色粘土である。遺物は、下層から土師質土器の皿が2点出土した（第36図22・23）。22は、口径10cm、器高1.7cmを計る。口縁部は2段のナデによって成形され、端部は丸くおさめられている。23は、口径11cm、器高1.8cmを計り、口縁端部がやや外方へ丸みを持って突出している。また、平底の底部と口縁部との屈曲が明瞭である。

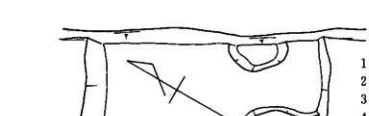
SK1　1辺3.3m、深さ約40cmを計る方形の土壙であり、SB3の東側に位置する。底面はややいびつであるが、埋土最下層の黒褐色粘土と遺構面形成土である淡黄灰色粘質砂土との混合土層上面ではほぼ平坦になる。

SA1　径約20cmの柱穴によって構成される柵列である。主軸方位はN—60°—Wを取り、柱穴間は約85cmである。暗茶褐色土を埋土としている。

SA2　SD1の東側に沿う柵列である。径約15～20cmの柱穴からなり、N—33°—Wを主軸方位とする。埋土は、暗灰色粘土もしくは暗灰褐色粘質土である。

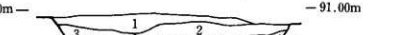
SA3・4・5　SD3の西側に沿う柵列である。主軸方位はN—37°～40°—Wであり、これらの不整合は付け替えによるものと考えられ、本来は1列であったと想定される。

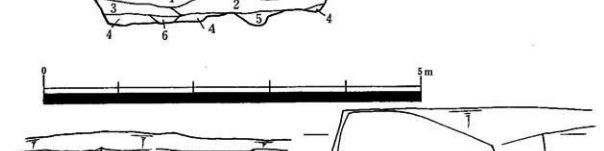
SD1　幅約75cm、深さ25～50cmを計り、SB3・SA2・SE1を囲む様にL字状に屈曲する溝である。埋土は、上層が暗茶褐色土、下層が黒褐色粘質土であり、黒色土器・土師質土器等が出土した（第36図1～21）。1～11は、土師質土器小皿である。1は、底部からなだらかに口縁部に移行するものであり、両者の境が不明瞭である。口縁端部は尖り気味におさめ、口径8.2cm、



SK1

1層：暗茶褐色土
2層：黒褐色粘土・黄茶色土混合
3層：黒褐色粘質土・暗褐色粘質土混合
4層：黒褐色土・淡黄色粘質土混合
5層：黒褐色粘質土
6層：暗灰色粘質土

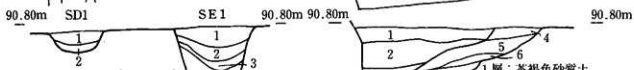




1層：暗褐色土
2層：黒褐色粘質土

1層：暗茶褐色土
2層：暗花褐色粘質土
3層：暗茶褐色粘質土・黄色砂混合
4層：暗灰褐色粘質土

1層：茶褐色砂質土
2層：淡黄灰色砂質土
3層：黄茶色砂質土
4層：暗茶褐色土
5層：暗褐色粘質土
6層：暗褐色粘質土・黄色粘土混合
7層：黒色粘土・淡緑灰色砂土互層
8層：黒色粘土

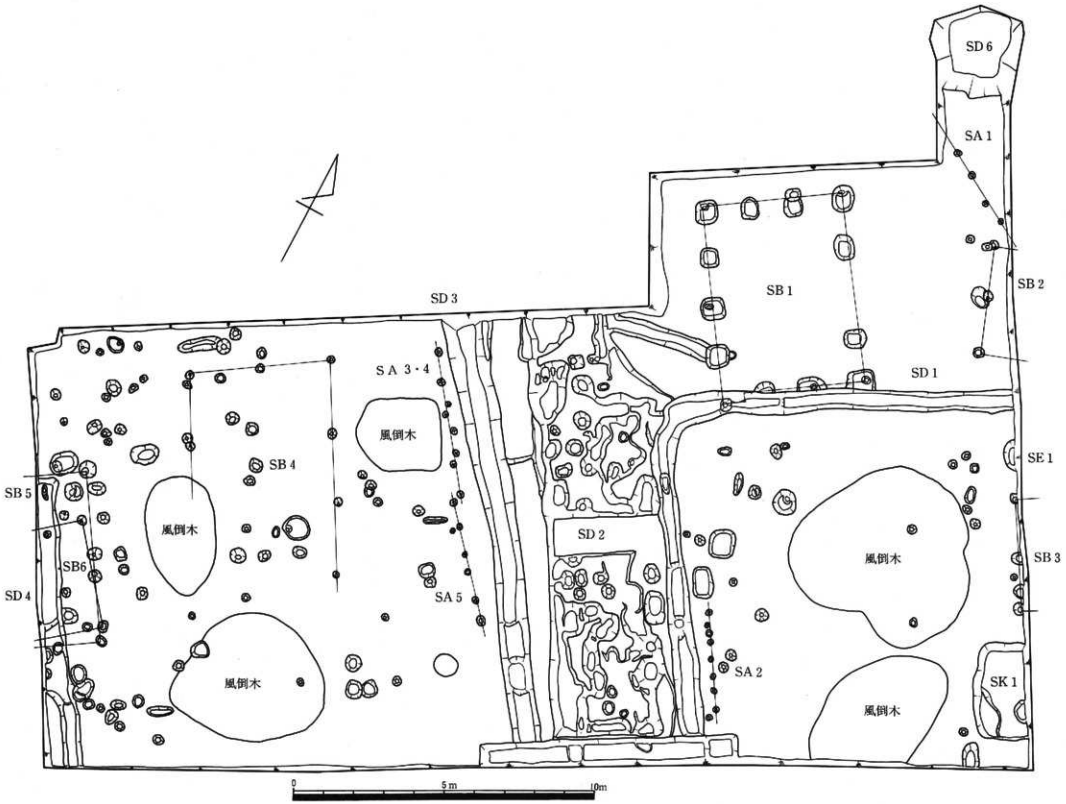


1層：暗褐色土
2層：黒褐色土
3層：暗褐色土・黄色砂混合

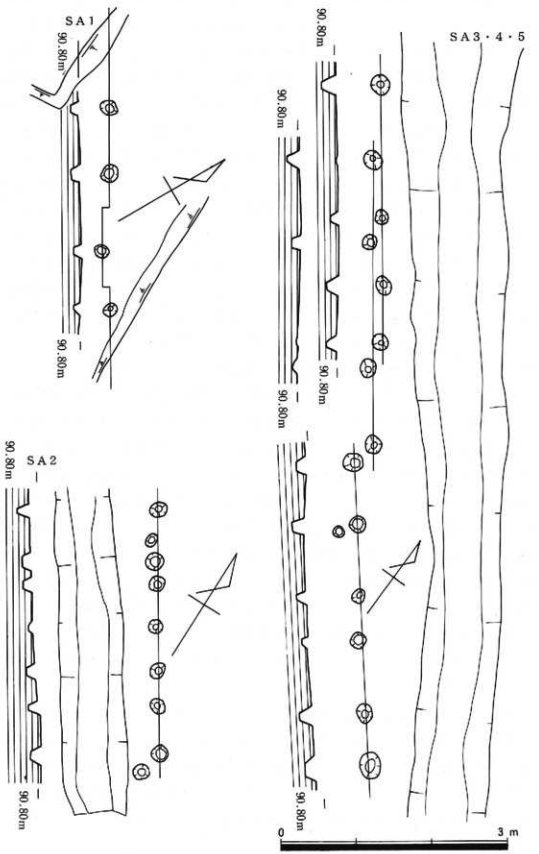
1層：暗褐色土
2層：暗褐色土・黄色砂混合
3層：暗褐色土
4層：黒褐色弱粘質土
5層：黒褐色粘質土・黄色粘質土混合
6層：黒褐色土
7層：暗褐色土・黄色砂混合
8層：黒褐色粘土・黄色粘土（ブロック状）
9層：黄茶色粘質土

1層：暗褐色土
2層：黒褐色土
3層：暗褐色粘土・黄色砂混合

第33図　T19-SK1・SD1～3・SE1 平面図・断面図



第34図　T19　全体平面図　（S＝1／100）



第35図　T19-SA1・SA2・SA3・SA4　平面図・断面図

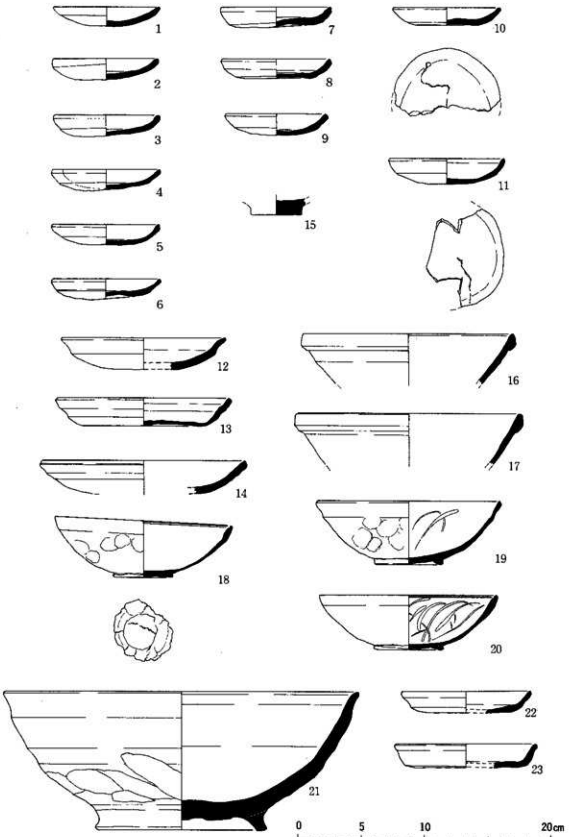
器高1.5cmを計る。2・3は1に類似しているが、口縁端部は丸くおさめる。4～9は、口縁端部に押しナデを加えるものである。口径は7.6cm～8.4cm、器高は1.5cm～1.7cmの範囲内である。10・11も同類であるが、底部外面において粘土接合痕を観察することができる。12～14は、土師質土器大皿である。12は口径12.6cmを計り、口縁部を外彎気味に突出させる。13は、平底の底部から明瞭な屈曲部を有して口縁部が立ち上がる。口縁部には2段ナデによる段が生じており、端部は押しナデにより平坦面を形成している。口径13.4cm、器高2.2cmを計る。14は、口縁部の成形は13と同じであるが、底部との境は緩やかであり、口径16cmを計る。18～20は、黒色土器である。18は、口径13.9cm、高台径4.4cm、器高4.5cmを計る。外面ではなだらかであるが、内面では口縁部のヨコナデ部分に屈曲が見られる。外面は指頭圧痕のみで、ヘラミガキは施されていない。内面はハケメが顕著に残存しているが、暗文は磨滅のため不明である。19は、口径14.2cm、高台径5cm、器高5cmを計る。口縁部には、ヨコナデによる屈曲が見られ、端部に平坦面を有する。高台は、断面三角形を呈している。20は、口径14cm、高台径5cm、器高5.3cmを計り、口縁部の器壁が最も厚くなる。口縁端部は丸くおさめ、高台はやや扁平である。19・20はいずれも外面を平滑に仕上げているが、口縁部、高台部周辺のヘラミガキは認められない。

16・17は、白磁の碗である。共に玉縁状口縁であるが、17の方が若干扁平である。両者の口径は、16.6cm・17.4cmである。21は、灰釉のこね鉢である。体部は半球状を呈し、口縁部は若干外方へ突出する。外面上半はヨコナデ、下半は大まかなヘラケズリにより成形される。高台は、ハの字状に貼り付けられている。口径27.6cm、器高11cmを計り、色調は灰白色を呈する。

SD2　幅約4m、深さ約55cmを計り、N―33°―Wに延びている。底面には、径50cm～1mの円形もしくは不定形のくぼみが一面にあり、平坦面は稀少である。このくぼみは埋土上面では確認されず、底面の精査によって検出されたものである。南東壁面における土層断面の観察から、SD2には少なくとも3次にわたる開削の痕跡が認められる。1次は、幅約3m、深さ約60cmの規模である。これが埋没した後に、やや西側にずれて幅1.2m以上、深さ約60cmの2段掘りの溝が掘削される。更にこれが埋没した後に、1次のものとほぼ同規模の溝がやや東側にずれて掘削され、廃絶されている。1次溝は黒褐色土・黒褐色粘質土およびこれらと黄色粘質砂土との混合土を、2次溝は黒褐色粘質土を、3次溝は暗褐色系土を埋土としており、3次溝の埋土はSD1・3と近似している。

遺物は、ほとんどが3次溝に伴って出土している(第37図1～8)。1～7は、土師質土器小皿である。1～6は口縁端部に押しナデを加えるもので、底部との境は明瞭である。法量は近似しており、口径7.8cm～8.4cm、器高1.2cm～1.4cmの範囲内に収まる。これら6点はほぼかたまって出土している。7は、底部から緩やかに口縁部に移行し、端部を丸くおさめる。口径8cm、器高1.4cmを計る。8は、脚台付皿の脚部である。脚端部は丸くおさめ、内外面共にヨコナデによって平滑に仕上げられている。

SD3　SD2の西側にほぼ並行する溝であり、幅約90cm、深さ約50cmを計る。SD1と近似する暗褐色系土を埋土とし、SA3～5はこれに付随する施設である。埋土内からは、土師質土



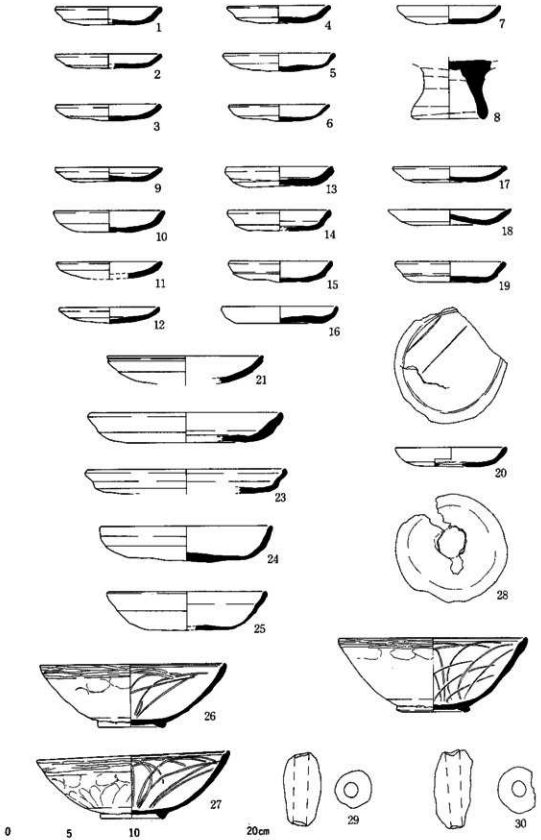
第36図　T19—SD1・SE1出土遺物実測図

器・黒色土器・土錘が出土している（第37図９～30）。９～20は、土師質土器小皿である。９～17・19はいずれも口縁端部を押しナデによって成形するものであるが、９～12はこれが弱いため他のものと比較すると明瞭な面を有していない。13～17・19は底部との境も明瞭であり、段を持っている。口径は7.8cm～９cm、器高は1.2cm～1.7cmの範囲内である。19の底部外面には、粘土接合痕と板目状圧痕が残存している。18は口径9.6cmと若干大きく、口縁端部は尖っている。20は、底部から緩やかに内彎して立ち上がる口縁端部を丸くおさめるものである。底部中央部には、焼成後内面から打ち欠いて開けられた径２cmの穴がある。21～24は、土師質土器の大皿である。21は口径12.2cm、推定器高2.3cmを計り、底部から緩やかに立ち上がった口縁端部外面に１条の沈線を巡らす。22は、平底の底部から明瞭な屈曲部を持って斜外方へ立ち上がる口縁部を有している。口縁端部は、押しナデによる平坦面を有している。口径15cm、器高2.3cmである。23も底部から明瞭な屈曲部を持って口縁部が立ち上がるものであるが、口縁端部を内傾して突出させているためＳ字状を呈している。口径は15.6cm、器高は1.9cmである。24は口径13.4cm、器高2.8cmとやや深目の皿である。口縁部は２段のヨコナデによって成形され、底部外面はややいびつである。25は坏形様のもので、口径12.4cm、器高３cmを計る。

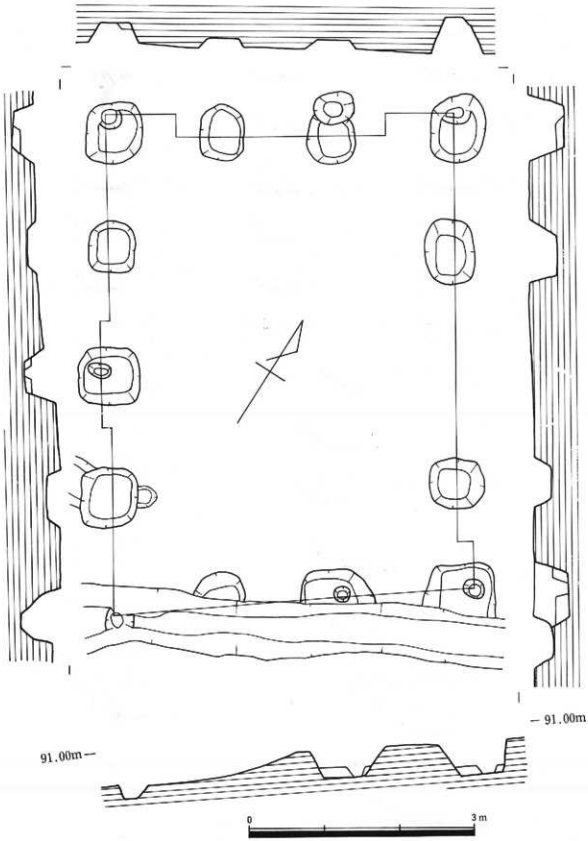
26～28は、黒色土器である。26は、口径15cm、高台径５cm、器高５cmを計る。外面は口縁部に丁寧な横方向のヘラミガキが施され、下半部は指頭圧痕とナデにより平滑に仕上げられている。内面は口縁端部に１条の沈線が巡り、全面に大まかなラセン状暗文が施されている。27は、口径15.4cm、高台径５cm、器高５cmを計り、形態・調整方法は26とほとんど同じであるが、外面下半において底部から口縁部にかけて放射状に指頭圧痕が巡っていることが観察される。28は、口径14.6cm、高台径５cm、器高5.7cmとやや深目である。底部から坏部が直線的に立ち上がり、口縁部の器壁が最も厚くなる。外面は、口縁部に横方向のヘラミガキが施され、下半は平滑に仕上げられている。内面は、口縁端部にやや太目の沈線が１条あり、全面に大まかなラセン状暗文が施されている。高台は、ハの字状に貼り付けられた、断面台形のものである。

29・30は、土師質の土錘である。最大長・最大径は各々5.8cm・2.8cm、6.3cm・3.6cmであり、色調は黄茶灰色を呈する。磨滅が著しいため調整・使用痕等は不明であるが、いずれも端部を欠損している。

ＳＤ６　トレンチの北端部において検出された溝であり、幅約2.5m分が確認された。深さは最深部で約1.2mを計り、推定幅は約５mになると考えられる。北東壁面における土層堆積状況の観察から、この溝は埋没後、再度掘削が行なわれていたことがうかがわれる。当初に掘削された溝の埋土は、上下２層に大別される。上層は暗茶褐色系土で、下層は黒色粘土類である。黒色粘土は淡緑灰色砂土と縞状の互層を成しており、流水状態にあったことを示している。次に掘削された溝は当初の溝より約60cm西側に寄っている。茶褐色系砂質土・黄茶色系砂質土を埋土としており、当初のものとは全く異質である。当トレンチで検出された６条の溝の埋土を比較すると、黒色粘土・黒褐色系土を埋土とするものと暗褐色系土・茶褐色系砂質土を埋土とするものに大別される。前者には１次・２次のＳＤ２・１次のＳＤ６が相当し、後者にはＳＤ１・３次掘削のＳＤ



第37図　T19—SD2・SD3出土遺物実測図



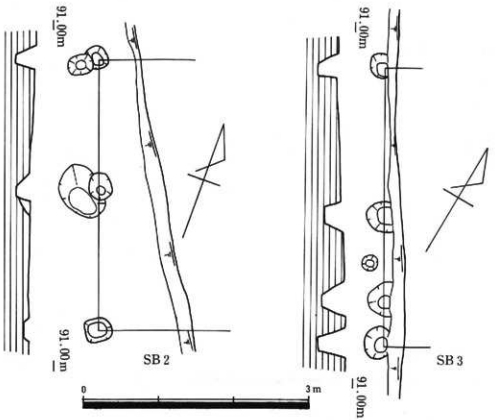
第38図　T19-SB1　平面図・断面図

2・SD3・SD4・SD5・2次掘削のSD6が含まれる。

SB1　当初南東部分のみ検出していたが、その規模を確認するため北側にトレンチを拡張した。3間×4間の規模を有し、N−34°−Wを桁行方位としている。柱穴は一辺約80cmの平面隅丸方形のもので、柱根は径約25cmを計る。柱穴間は、北辺東西が1.65m−1.40m−1.60m、東辺南北が1.40m−3.00m−1.90m、南辺東西が1.75m−1.65m−1.90m、西辺南北が1.65m−1.65m−1.65m−1.75mを計る。東辺中央部には柱穴が認められず、門の存在等入口に当たると想定される。柱穴内埋土はT18−SB1・2と同様の黒褐色土であり、須恵器坏身の細片が2点出土しているが、図示し得ない。

SB2　径約35cmの円形柱穴で構成される、西辺2間×の掘立柱建物である。N−71°−Eを主軸方位とし、柱穴間は、1.85m−1.70mである。暗茶褐色土を埋土としている。SB2の西側に位置するSA1はこれに伴うものではない。

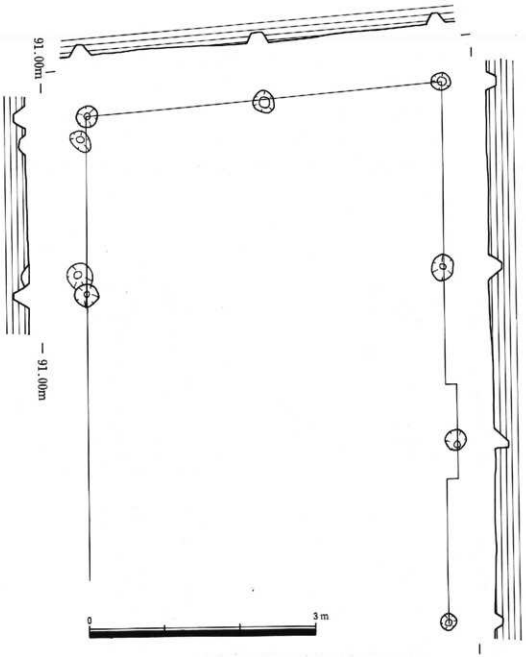
SB3　トレンチ東壁に接して検出された西辺2間×の掘立柱建物であり、SD1に囲まれた部分で確認された唯一の建物である。柱穴は径約45cmの円形もしくは隅丸方形のもので、暗褐色土を埋土としている。柱穴間は、1.75m−1.95mを計る。遺物の出土は認められないが、埋土お



第39図　T19-SB2・SB3　平面図・断面図

よび主軸方位の比較からＳＤ１・３と同時期並存の掘立柱建物であると想定される。

ＳＢ４　ＳＤ３の西側に位置する２間×３間の掘立柱建物であるが、南隅部分は、風倒木痕のため欠損している。径約30cmの円形柱穴によって構成されている。柱穴間は、北辺東西が2.35m—2.40m、東辺南北が2.35m—2.40m—2.45m、西辺が2.40mであり、N—30°—Wを桁行方位としている。柱穴内埋土は、暗褐色土である。



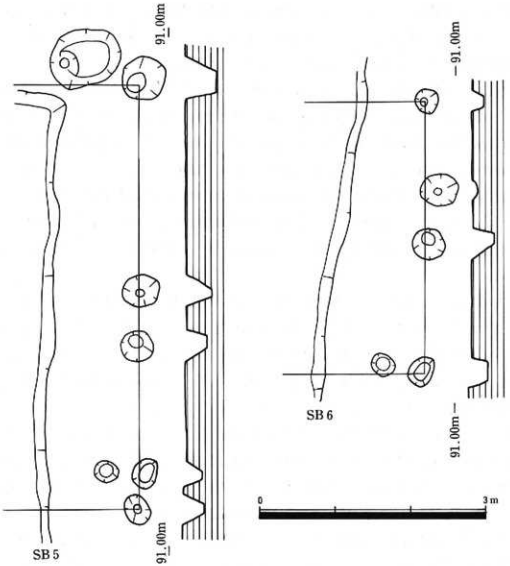
第40図　T19—SB4平面図・断面図

SB5　SB4の南西に位置する、東辺2間×の掘立柱建物である。径約40～55cm、深さ約35cmを計る円形柱穴によって構成されており、柱穴間は2.90m—2.75mである。N—56°—Eを主軸方位とし、暗褐色土を埋土している。

SB6　SB5とほぼ重複する、東辺2間×の掘立柱建物である。径約40cmの円形柱穴によって構成され、N—50°—Eを主軸方位としている。柱穴間は1.80m—1.80mを計り、暗褐色土を埋土とする。

ここで、T19で検出された主要遺構について整理しておく。

SB1は、他とは異なる黒褐色土を埋土とする隅丸方形の柱穴によって構成される3間×4間の掘立柱建物であり、埋土・出土須恵器からT18—SB1・2とほぼ同時期の9世紀代のものであると考えられるが、N—34°—Wを主軸方位としている。1・2次SD2、1次SD6も黒褐色系土・黒褐色粘質土類を埋土としているが、出土遺物がないため直ちに対比することはできない。



第41図　T19-SB5・6　平面図・断面図

しかしながら、後述する遺構よりは先行するものであろう。

次に形成される遺構は、ＳＤ１・２・３出土遺物に代表される時期のものである。土師質土器皿類・黒色土器の形態から、これらは概ね鎌倉時代前半期の土器類である。並列してＮ―33°―Ｗに延びるＳＤ１・２・３の内、東側のＳＤ１はＮ―58°―Ｅに屈曲している。このＳＤ１の内側には、ＳＡ２・ＳＢ３・ＳＥ１・ＳＫ１が存在し、各々の主軸方位はＳＤ１とほぼ同軸である。また、ＳＤ３の西側にはＳＡ３・４・５・ＳＢ４・５・６が存在し、これらもＮ―30°～40°―Ｗを主軸方位としている。当時期の遺構内埋土は、暗褐色系土である。

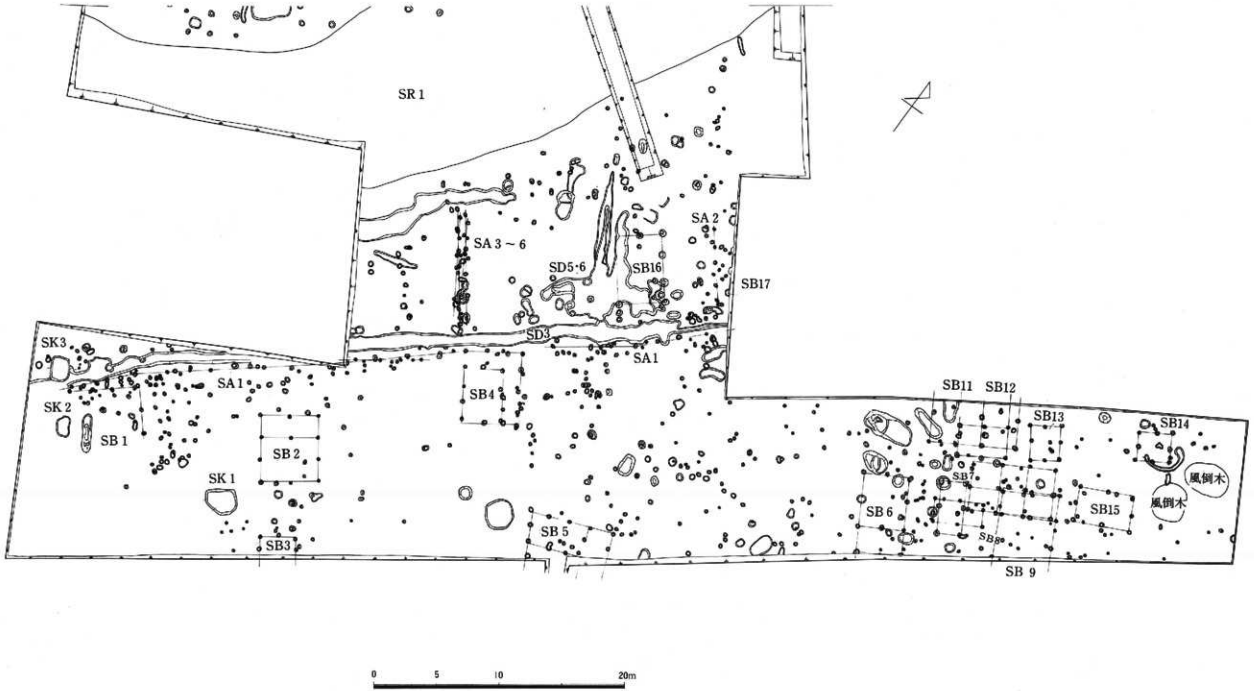
②Ｔ20

約3700㎡のトレンチであり、Ｔ15の北側、Ｔ18・19の中間に位置する。トレンチの南半および北半西側は黄茶色系砂質土を遺構形成面とするが、北半東側は黄茶色系砂利層を遺構形成面とする。主要遺構は、方形周溝墓１基、掘立柱建物41棟、土壙、溝、自然流路１条等である。

ＳＸ１（方形周溝墓）　トレンチ北端で検出された方形周溝墓であり、当初西側¼のみが検出されたが、その全容を把握することを目的として東側にトレンチを拡張した。北辺11m、東辺11m、西辺12mを計り、南辺中央部が開口し、「ロ」形の平面形を呈する。南辺の東端および南東隅部分はＳＫ22、ＳＤ１に切り込まれているため明瞭ではないが、陸橋部は幅約5.5mになると推定される。周溝の幅・深さは、南西隅が80cm・40cm、西辺が120cm・53cm、北西隅が112cm・20cm、北辺が137cm・78cm、北東隅が118cm・47cm、東辺が126cm・50cmを計る。北西隅および南東隅から南辺東端にかけてが浅くなるあるいは幅が細小している。周溝内埋土は、２層～７層に分けられる。南辺・西辺・北西隅部分では、最下層が遺構面形成土である黄茶色粘質砂土と黒褐色粘土の混合土である。特に西辺においては、周溝東側つまり周溝内側にこの埋土が顕著に見られることから、盛土が流入したものと想定される。南辺端においても、内側に若干ではあるが同様の状況が認められる。

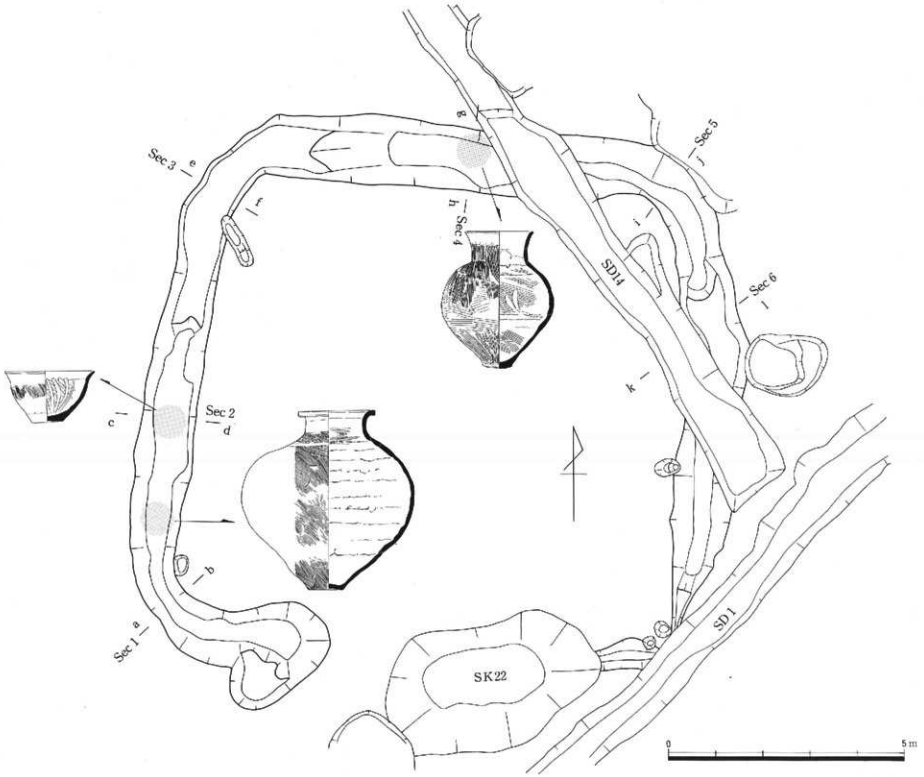
周溝内からは、広口壺形土器・長頸壺形土器・鉢形土器が１点づつ出土している（第46図１～３）。１の広口壺形土器は、西辺南側¼に位置し最下層中から出土した。３の鉢形土器は、同じく西辺の中央部に位置し、盛土の流入と想定される最下層の直上に堆積している黒褐色土層中から出土している。２の長頸壺形土器は、北辺中央部の底面から約40cm上位に埋没しており、３の鉢形土器が出土した土層に対応する黒褐色土層中である。

１の広口壺形土器は、口径12.2cm、器高28cm、胴部最大径27.5cm、底部径5.4cmを計る。直立する頸部からほぼ水平に外彎してひろがる口縁部の端部は、若干下方へ肥厚・垂下し、外面に垂直な平坦面を有している。口縁部から頸部にかけては、内外面共にヨコナデにより平滑に仕上げられている。胴部は肩部から大きく広がり、最大径が中位部よりやや上位に位置する。胴部下半は急速にすぼまり、底部は若干あげ底になっている。胴部内面はナデによって成形されているが、粘土紐接合痕が顕著に残存している。外面は、全面が細い斜方向のハケメで調整されている。胴部外面のハケメは約¼づつ方向が若干異なり、各々の境目部分はナデによりハケメがとぎれてい



第42図　T20　全体平面図(1)

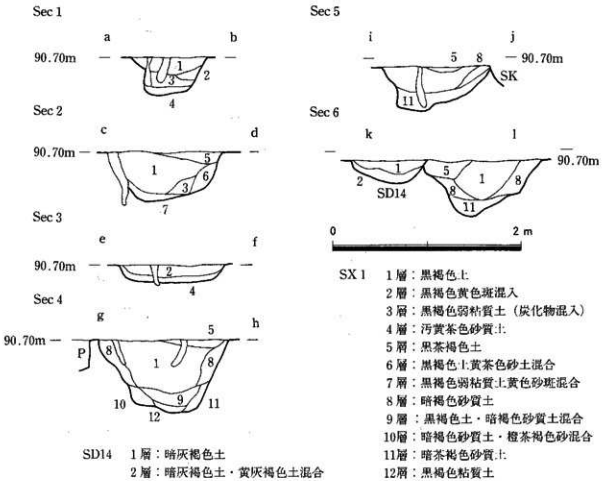
第43図　T20　全体平面図(2)



第44図　T20-SX 1　平面図

る。この状況と内面の粘土紐接合痕の観察から、この壺形土器の胴部が3分割によって成形されたことは明らかである。特に鉢形土器様の底部を含む第1段階と第2段階との間には、明瞭な屈曲が認められる。粘土紐接合痕から想定すると、1単位の粘土紐は幅約2.5cmである。胴部最大径部分から下方にかけての外面には、ススの付着が見られる。

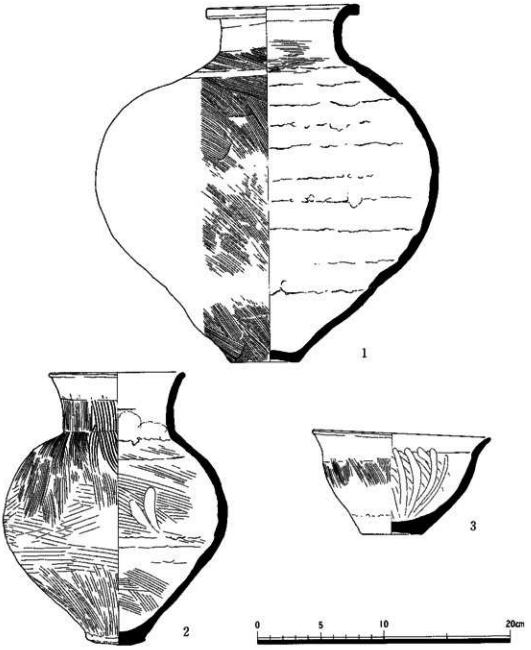
2の長頸壺形土器は、口径10.8cm、器高21.6cm、胴部最大径17.8cmを計る。胴部から外反してひろがる頸部から口縁部は、器高の約¼を占める。口縁端部はやや外方へ肥厚気味であるが、ヨコナデによって丸くおさめられている。胴部は大きく張った肩部から緩やかにひろがり、最大径がほぼ中央に位置する。全体として球形に近い卵形を呈している。胴部外面の調整は、縦方向の細いハケメを最終のものとするが、中位部においては、縦方向のハケメ工具とは異なる工具による横方向の粗いハケメが施されている。胴部内面には、斜方向のハケメと指頭によるナデが見られる。中央部は、横方向のナデのみである。底部は若干突出し丸みを帯びているため、自立し得るが極めて不安定である。内外面の調整の観察からこの壺形土器は、胴部下半・胴部上半・頸部～口縁部の3段階によって成形されている。また、胴部外面中央部の約4cm×4cmの範囲を、ナデによってハケメを丁寧に消して無文としている。これに対応する反対側では、最終の縦方向のハケメが前者に比して粗雑にかつ全面に施されており、表・裏の意識が製作時に存在していたことが想定される。



第45図　T20 SX 1　土層断面図

3の鉢形土器は、口径14cm、器高8cm、底部径4.8cmを計る。若干上げ底である底部から内彎して坏部が立ち上がり、口縁部はヨコナデによって若干外反して短くのび、口縁端部は単純におさめている。外面は、下半がナデにより極めて平滑に仕上げられ、上半に細い縦方向のハケメが施されている。内面は、底部から口縁部にかけて放射状の丁寧なナデアゲにより平滑に仕上げられている。外面中央部には、ススの付着が認められる。

1～3はいずれもほぼ完形であり、その出土状況から盛土上面から周溝内に転落したものと考えられる。したがってSX1は、これらの土器から弥生時代後期の所産と言える。

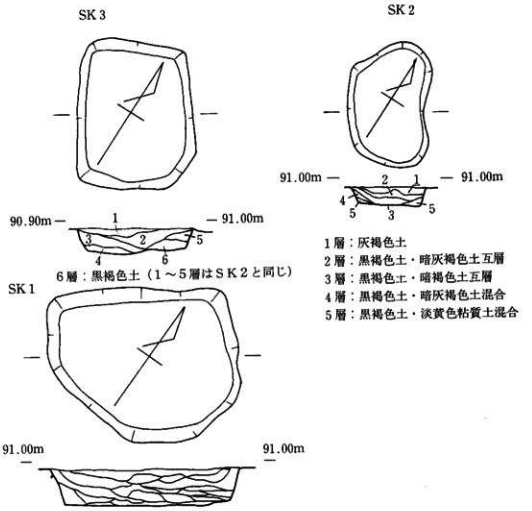


第46図　T20-SX1　出土遺物実測図

ＳＫ１　2.5m×2.1mの不定形の土壙である。深さは約50cmを計り、底面はほぼ平坦である。埋土は、灰褐色系土・暗褐色系土・黄色系砂質土等からなり、19層に分層される。これらの大半がブロック状を呈して堆積しており、遺物の出土は認められない。ＳＢ１～３に囲まれた部分に位置しており、これらに伴う廃棄土壙と考えられる。

ＳＫ２　長径約1.6m×短径約１mのややいびつな楕円形を呈する土壙である。深さは約25cmを計り、底面は平坦である。埋土は６層に分かれ、第２・３層は黒褐色土と暗褐色土・暗灰褐色土が縞状の互層をなして堆積している。

ＳＫ３　長辺約1.9m×短辺約1.5mの隅丸長方形の土壙であり、ＳＫ２の北西に近接して位置している。深さは約30cmを計り、底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色系土を主体として、４層に分層される。当土壙からは、土師質土器小皿が１点出土している（第47図１）。口径7.6cm、器高1.3cmを計る。底部の器壁が厚く、口縁端部に弱いヨコナデが加えられている。



第47図T20-SK１・２・３　平面図・断面図

ＳＫ17　長辺約1.9m、短辺約1.5mを計り、いびつな隅丸長方形を呈する土壙である。底面は中央部が２段掘りになっており、最深部で約35cmを計る。埋土は３層からなり、上層は黒褐色土で覆われている。土師質土器・黒色土器の小片が出土している。

ＳＫ18　長径約1.9m×短径約1.2mの楕円形土壙であり、底面は浅い皿状を呈している。深さは約25cmを計り、埋土は黒褐色系土の単一層である。

ＳＫ19　長径約1.5m×短径約0.7mの楕円形を呈する土壙である。北側部分が２段掘りとなっているが、これは黒褐色粘質土を埋土とする別の土壙が切り込んでいるものである。底面はいずれも皿状を呈し、土師質土器の小片が出土している。

ＳＫ20　ＳＫ18・19に切り込まれている楕円形の土壙である。底面は浅い皿状を呈し、暗褐色土と黒褐色砂質土の混合土を埋土としている。

ＳＫ23　長辺約1.7m、短辺約1.3mを計る隅丸長方形の土壙である。暗灰褐色系土を埋土とし、深さは１m以上であり、井戸である可能性も考えられる。埋土内からは、黒色土器と土師質土器が出土している（第48図１～３）。１は黒色土器であり、口径15.2cmを計る。高台部を欠損しているが、推定器高５cmとなる。口縁部内外面はヨコナデ、外面は指頭圧痕によって平滑に仕上げられている。口縁端部内面には１条の沈線が巡り、内面にはラセン状暗文が施されている。２・３は土師質土器の小皿である。２は口径９cm、器高1.7cmを計る。底部は若干上げ底となり、口縁部は明瞭な屈曲を持って立ち上がる。口縁端部は、押しナデによって成形されている。３は径8.6cm、器高1.5cmである。２と同様に口縁端部を押しナデによって成形しているが、底部から緩やかに口縁部に移行している。

ＳＫ24　ＳＫ23に切り込まれた、長辺約２m×短辺約1.4mのややいびつな長方形土壙である。底面には、若干軸を異にする長辺約1.9m×短辺約0.9mの長方形の掘り込みがある。埋土は大まかには３層に分けられ、上層から茶灰褐色系土・暗灰褐色系土・暗茶褐色土である。土師質土器の小片が出土している。

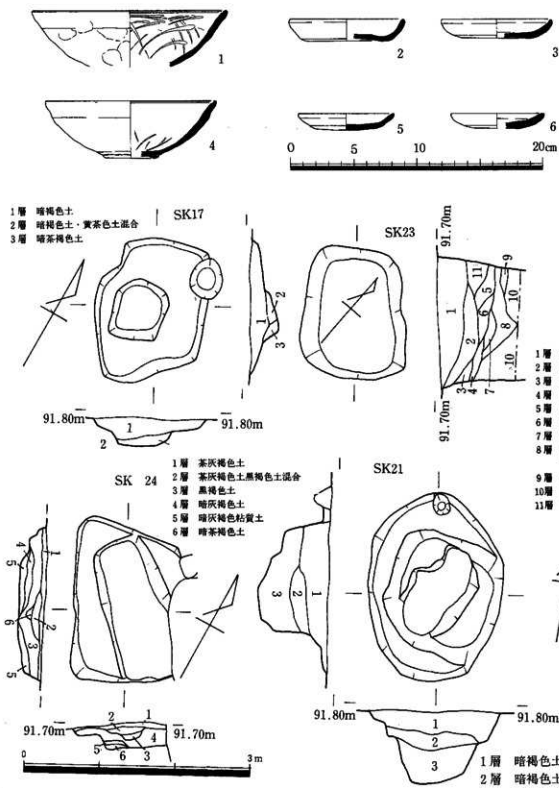
ＳＫ21　長径約2.5m、短径約1.7mを計る、上面の平面形が楕円形の土壙である。中央部が深く掘り込まれており、約95cmを計る。埋土は黄色砂質土の混入の差異により３層に分層されるが、いずれも暗褐色土を主体としており、比較的短期間に埋積したと想定される。

ＳＫ22　ＳＸ１の南辺端を切り込んでいる、長径約4.6m×短径約2.6mの楕円形土壙である。埋土は、ＳＸ１の主要埋土と同じ黒褐色土の単一層であり、一時期に埋没したものと考えられる。埋土内からは、受口状口縁甕形土器が出土している。小片のため図示し得ないが、口縁顎部には櫛状工具による刺突文が施されている。また、肩部には櫛状工具による直線文・刺突文が認められる。ＳＸ１の周辺に存在する土壙群の中で、明らかにＳＸ１と同時期である弥生時代後期に属するものは当土壙のみである。

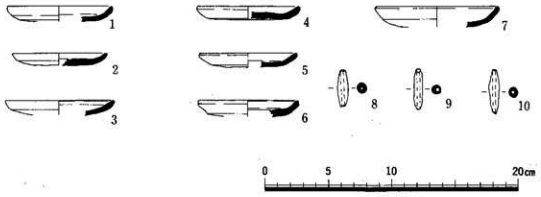
ＳＫ26　直径約1.2m、深さ約30cmの円形土壙である。暗褐色土を埋土とし、黒色土器・土師質土器が出土した（第48図４～６）。４は黒色土器であり、口径13.4cm、器高4.6cm、高台径４cmを計る。磨滅が著しいため調整は不明瞭であるが、口縁部の器壁が最も厚く、ヨコナデによる屈曲

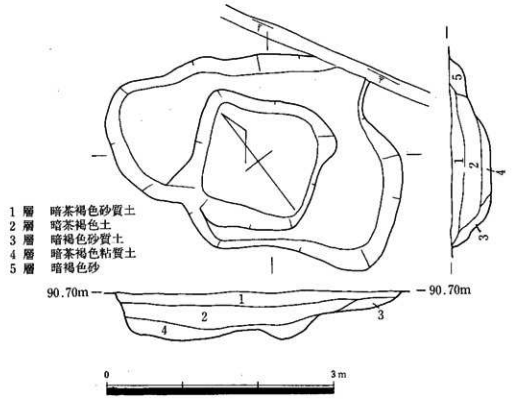
が見られる。4・5は土師質土器の小皿であり、口径・器高は7.4cm・1.3cm、7.4cm・1.2cmであり、ほぼ同規格である。5の口縁端部には弱い押しナデが見られるが、6は単純におさめている。

SK29　約4m×1.7mの不定形な土壙である。深さは約50cmを計り、埋土は5層に分層されるが、主体は暗茶褐色土である。当土壙からは、土師質土器小皿・土錘が出土している（第49図1



第48図T20-SK17・21・23・24　平面図・断面図・出土遺物実測図





第49図　T20-SK29　平面図・断面図・出土遺物実測図

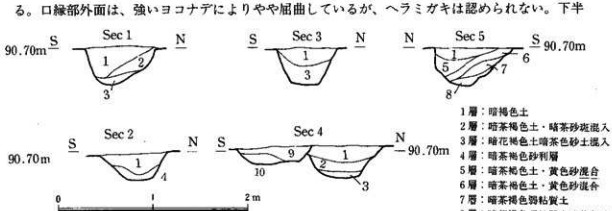
～10)。1～3は、底部から緩やかに内彎して立ち上がる短い口縁端部を単純におさめるものである。口径・器高は各々8cm・1.2cm、7.4cm・1cm、8.6cm・1.2cmである。4～6は、口縁部の立ち上がり方は1～3と同様であるが、端部に押しナデを加えるものである。口径・器高は各々8cm・1.1cm、7.6cm・1.1cm、7.8cm・1.3cmを計り、法量は1～3と近似している。7は、口径9.6cm、器高1.7cmを計り、口縁端部に押しナデを加え、明瞭な平坦面を有している。8～10は、土師質の小型細形の土錘である。

SD1　トレンチの北側ほぼ½の部分に位置し、N－50°－Eに延びる溝である。幅は70～80cm、深さは30～40cmを計り、断面はU字形を呈する。SD1は、ほぼ同位置に掘削された古・新の2条の溝である。新しい溝は、古い溝より東側において若干北に彎曲している。埋土は両者共に近似しており、暗褐色系土を主体としている。いずれにも、流水・湧水の状況は認められない。

新溝が彎曲をし始め古溝とずれを生じる部分において土器が集中して検出されたのを始め、埋土内からは土師質土器・黒色土器・瓦器・灰釉・緑釉が出土している（第51図）。

1～12が、一括で検出された土器群である。1～3は、土師質土器の大皿である。1は、口径13.8cm、器高2.6cmを計る。底部から緩やかに内彎して立ち上がる口縁部は、2段のヨコナデによって成形され、端部は丸くおさめられている。2は、口径13.4cmを計り、推定器高は2.5cmとなる。口縁部は、底部から明瞭な屈曲を持って外方に立ち上がる。強いヨコナデによる段があり、端部は押しナデによる平坦面を有している。3は、口径15cm、器高2.3cmを計り、1・2より若干大きいものである。成形手法は2と近似しているが、押しナデによって形成された口縁端部の平坦面には、1条の浅い凹線が巡っている。

4～11は、黒色土器である。4・5は、坏部が直線的に外方に開き、断面台形の高台部を有するものである。口径・器高・高台径は各々14.6cm・5cm・4.4cm、15.2cm・5cm・4.2cmであり、成形・調整手法は近似している。口縁部外面には横方向へのヘラミガキが施され、これより以下は指頭圧痕によって平滑に仕上げられている。この指頭圧痕は、円周に沿って反時計回転で施されている。内面は口縁端部に1条の沈線が巡り、ラセン状暗文が施される。見込み部分には、爪による円形の圧痕が残存している。6は、高台部の断面は台形であるが、坏部が内彎して立ち上がるものである。口径15cm、器高4.7cm、高台径5cmを計り、4・5と比較すると若干扁平である。口縁部外面は、強いヨコナデによりやや屈曲しているが、ヘラミガキは認められない。下半



第50図　T20-SD1断面図

は指頭圧痕が施され、高台接合部分の始末は粗雑である。内面は、口縁端部に1条の沈線が巡り、全面にラセン状暗文が施されている。高台は4・5よりは小さく、やや丸みを帯びている。7・8は、坏部の形態は6と同様であるが、断面三角形の高台部を有するものである。7は口径14cm、器高4.7cm、高台径4.6cmを計る。口縁端部内面の沈線は細く鋭く、外面のヘラミガキは認められない。8は口径14.6cm、器高4.5cm、高台径4.6cmを計る。口縁部外面には横方向のヘラミガキが認められ、下半の指頭圧痕は底部から口縁部に向けて反時計回転で施されている。9・10は、7・8と比較すると断面三角形の高台部が小さいものである。口径・器高・高台径は各々15.6cm・4.5cm・4.4cm、13.6cm・4.2cm・5.4cmである。9は磨滅が著しいため調整は不明瞭であるが、全体的に器壁が薄く、高台部はやや丸みを帯びた二等辺三角形を呈する。10は、口縁部外面はヨコナデ、下半は指頭圧痕により平滑に仕上げられている。内面は、口縁端部に巡る1条の沈線があり、ラセン状暗文が施され、沈線の下方に数条の横方向のヘラミガキが加えられている。11は、底部が突出しているものである。口径14cm、器高5cm、高台径4.6cmを計り、坏部が半球状を呈している。高台部はいびつであり、見込み部分に爪による円形圧痕が認められる。

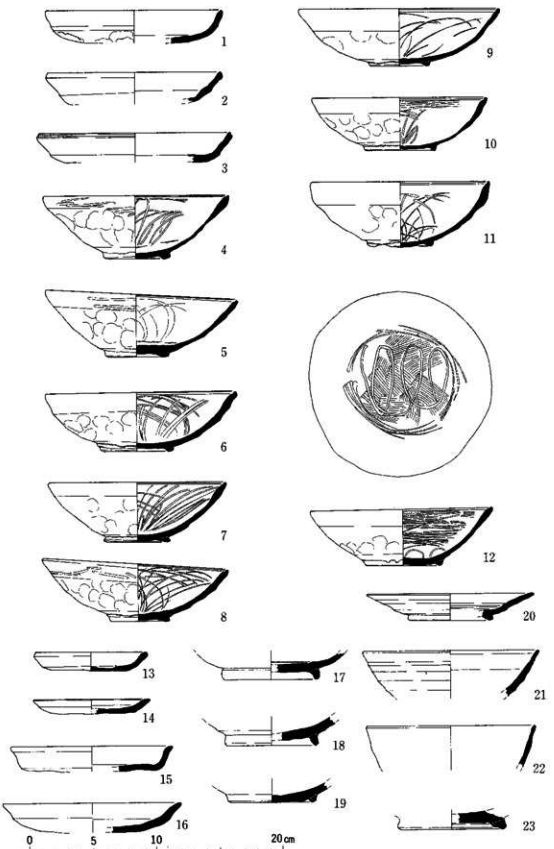
12は、瓦器の椀である。口径14.3cm、器高4.5cm、高台径5.8cmを計る。坏部は底部から直線的に外方に開き、口縁端部内面には浅い沈線が巡っている。口縁部外面はヨコナデ、下半は指頭圧痕が施され、やや丸みを帯びた断面三角形の高台を有している。内面は、全体をハケで調整した後に、見込み部分はラセン状暗文、それ以外には2分割して横方向ヘラミガキが密に施されている。

13～23は、その他の地点で出土したものである。13～16は、土師質土器の皿である。13は口縁端部に押しナデを加えるもので、口径8.8cm、器高1.5cmを計る。14は口縁端部を外方へ突出気味におさめるもので、口径9.2cm、器高1.2cmである。15は、口径12.6cmを計る。底部から直立気味に立ち上がる口縁端部は、外方に突出させておさめている。16は口径14cm、器高2.3cmを計り、底部から緩やかに内彎して広がる口縁端部を外方に突出させている。

17～21は、灰釉類である。17～19は碗の高台部であり、径は各々7cm・7cm・6.2cmである。17は三日月形高台を有し、内面見込み部分に1条の沈線が巡っている。18は、高台が鋭角的である。19は、断面台形の高台が底部平坦面より上方に着いており、高台本来の機能は果たしていない。20は段皿であり、口径12.8cm、器高2.1cmを計る。高台部は断面台形であり、釉は漬け掛けである。21は碗の口縁部であり、口径13.6cmを計る。口縁端部は、わずかながら平坦面を有している。

22・23は、緑釉の碗である。22は口縁部の破片であり、推定口径は13cmである。口縁端部にはわずかながら平坦面があり、釉色は淡緑色である。23は高台部であり、高台内面に段を有しており、近江産のものである。

SD3 トレンチ南側約½部分に位置し、SD1にほぼ平行するN－48°－Eに延びる溝である。幅は約1mであり、トレンチ東端では約40cmに縮小している。深さは約20cmで、暗褐色土を埋土としている。SD5・6とほぼ直角に交わっている部分周辺では、底面に鉄分が著しく沈着・凝固している。



第51図　T20-SD 1　出土遺物実測図

埋土からは、土師質土器・黒色土器・灰釉が出土している（第52図1～15）。

1～5は、土師質土器の皿である。1～4は小皿であり、口径・器高は各々9cm・1.5cm、7.6cm・1.3cm、8cm・1.2cm、8.6cm・1.5cmである。1・3・4は口縁端部を押しナデによって成形し、2は単純におさめている。いずれも底部から緩やかに口縁部が立ち上がっており、4は若干上げ底になっている。5は、口径13.2cm、器高2.5cmを計る大皿である。平坦な底部から若干内彎して立ち上がる口縁部は2段ナデによって成形され、各段の最下部は凹線状の明瞭な段を有している。6は、外面に回転糸切り痕を残存するロクロ土師器の底部である。底部径は3.6cmを計り、胎土は精良で暗茶灰色を呈する。

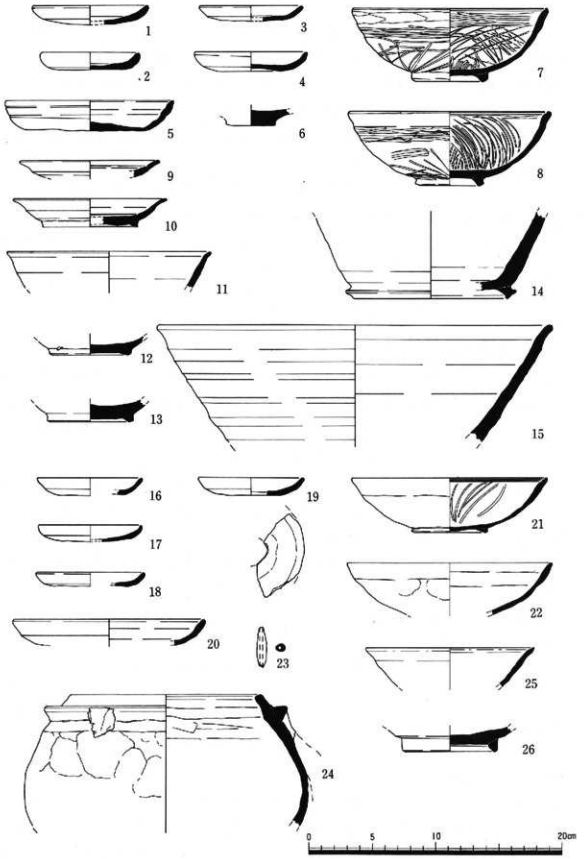
7・8は、黒色土器である。7は、口径15.2cm、器高5.7cm、高台径5cmを計り、坏部は大きく内彎して立ち上がる。高台は丸みを帯びた断面台形のもので、しっかりしている。口縁部外面は、ヘラケズリに近い幅広のヘラミガキが施されている。高台部接合部分から口縁部にかけては放射状のヘラミガキが施され、口縁部の横方向のヘラミガキとの間には、数条の横方向のヘラミガキが施されている。口縁部の器壁が厚くなり、端部内面には1条の沈線が巡る。内面の暗文は他のラセン状暗文とは異なり、3つの要素で構成されている。見込み部分は1方向のもの、沈線の下方は数条の横方向のもの、両者の間は2～3分割された円弧状のものである。いずれも緻密で、丁寧に施されている。8は、口径15.6cm、器高5.8cm、高台径4.4cmを計り、法量・形態共に7と近似しているが、内外面の調整手法は異なっている。口縁部は強いヨコナデによって若干段を持ち、その下方に横方向のヘラミガキが丁寧に施されている。高台部接合部分から口縁部に向けての放射状ヘラミガキは、7とは逆方向である。口縁端部の沈線は、浅くて幅が広いため段の様になっている。8も内面はラセン状暗文ではなく、7と類似している。見込み部分は1方向のもので、その他は2方向の円弧状のものが密に施されている。

9・11～15は、灰釉類である。9は、口径10.6cmを計る段皿である。11は碗の口縁部破片であり、推定口径16cmである。口縁端部を外方へ突出させておさめている。12・13は高台部の破片であり、径は共に6cmである。12は断面が扁平な三角形、13は台形を呈している。14は、長頸壺形土器の高台部を含む胴部下半である。胴部は直線的に外方にひろがり、高台は断面T字形を呈する。15は、推定口径30.6cmを計るこね鉢である。口縁端部は丸くおさめ、内面は使用により磨滅している。

10は、緑釉の段皿である。口径12cm、器高2.2cmを計る。口縁部は大きく外彎し、高台部内面には段を有している。焼成は堅固で、釉色は暗緑色である。

SD14　SX1を切り込んでN－35°－Wに延びる溝であり、幅は約1m、深さ約20cmを計る。埋土は暗褐色土であり、土師質土器・黒色土器・白磁・灰釉が出土している（第52図16～26）。

16～19は、土師質土器の小皿である。いずれも底部から緩やかに内彎して口縁部が立ち上がるもので、18の口縁端部には弱い押しナデが加えられている。口径・器高は各々8.2cm・1.3cm、8cm・1.3cm、8.4cm・1.1cm、8.2cm・1.4cmである。19の底面には、焼成以前に穿孔された直径約2.4cmの穴がある。20は、口径15cmを計る大皿である。口縁端部は押しナデによって成形され、平坦



第52図　T20-SD 3・SD 4　出土遺物実測図

面を有している。

21・22は、黒色土器である。21は口径15.2cm、器高4.3cm、高台径5.6cmを計り、扁平な断面三角形の高台を持っている。外面の調整は磨滅のため不明であるが、内面にはラセン状暗文が認められ、口縁端部には2条の沈線が巡っている。22は口径16cmを計り、口縁端部を単純におさめ、内面に沈線を持たないものである。磨滅が著しく、内外面の調整は不明である。

23は、土師質の小型細形の土錘である。残存長3.3cm、最大径0.7cmを計り、断面は卵形を呈する。色調は、橙褐色である。

24は、瓦質の三足羽釜である。口径は15cmを計り、内傾した口縁部から球形に胴部が続いている。鍔は断面三角形を呈するもので、下面に接して脚が貼り付けられている。胴部外面は大まかな指頭圧痕で調整され、全面にススが厚く付着している。内面は、全面がナデによって平滑に仕上げられ、口縁部は強いヨコナデのため窪んでいる。

25は、口禿の白磁碗である。口径は13.2cmを計り、口縁端部は若干くせを持って尖らせ気味におさめている。

26は、灰釉碗の高台部である。径は7cmで、直立する高台の内面は内傾している。

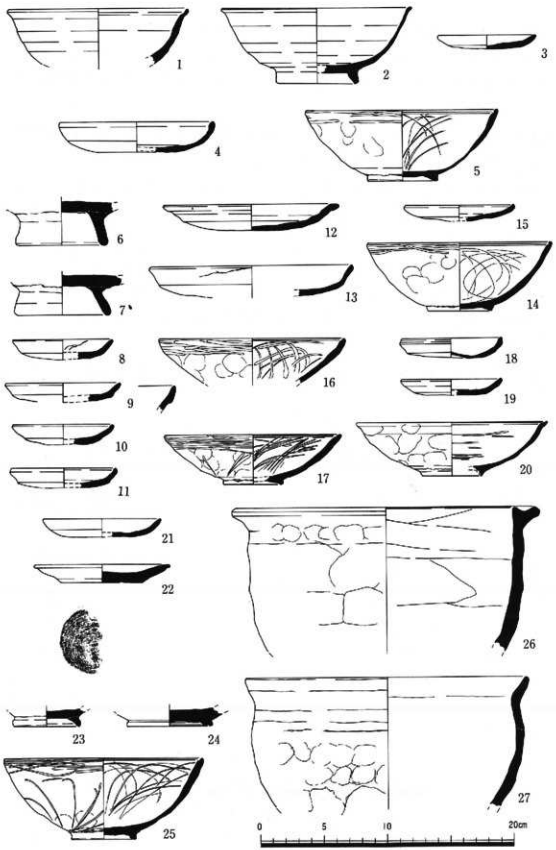
SD7 N−21°−Wに延びる、延長約3.8m、幅約35cmの溝である。深さ約20cmで、底面は浅い皿状を呈している。埋土は暗褐色土であり、緑釉の碗が出土している(第53図1)。口径は14cmを計り、坏部は内彎してひろがる。口縁端部は更に外方にひろがり、内面では緩やかな段を形成している。

SD8 SB19の東辺に側して位置し、N−28°−Wに延びる溝である。延長約8m、幅約40cmを計り、暗褐色土を埋土とする。深さ約5cmで、底面は浅い皿状を呈している。当溝からは、灰釉碗が出土している(第53図2)。口径15cm、器高5.9cm、高台径6cmを計る。大きく内彎して坏部が立ち上がり、口縁端部は外方に突出している。高台部はやや開き気味であるが、ほぼ直立する断面長台形のものである。口縁部周辺の釉は、漬け掛けによるものである。

SD9 延長約9.4m、幅約40cm、深さ約10cmを計る溝であり、SD1の南西側にほぼ並列している。埋土は、暗茶褐色土である。

SD10 SD1の南西に位置する、延長約3.3m、幅約40cm、深さ約20cmの溝である。暗褐色土を埋土とし、土師質土器小皿が出土している(第53図3)。口径7.6cm、器高1.1cmを計り、口縁端部は単純におさめている。

SD11 SX1の内側に位置する、延長約2.3m、幅約40cm、深さ約20cmの溝である。方向は東側のSD14とほぼ同じであり、暗茶褐色土を埋土としている。当溝からは、土師質土器皿・黒色土器が出土している(第53図4・5)。4は口径12cm、器高2.4cmを計る大皿である。底部から内彎して立ち上がる口縁部の端部外面には弱いヨコナデがあり、内面は若干肥厚している。5は口径15cm、器高5.6cm、高台径5cmを計る黒色土器である。外面は、口縁部に横方向のヘラミガキが施され、下方は指頭圧痕により平滑に仕上げられている。内面は、口縁端部に1条の沈線が巡り、ラセン状暗文が施されている。器壁は、底部と口縁部が厚くなっている。高台は、断面三角形の



第53図　T20-SD 7・8・10、ピット等出土遺物実測図

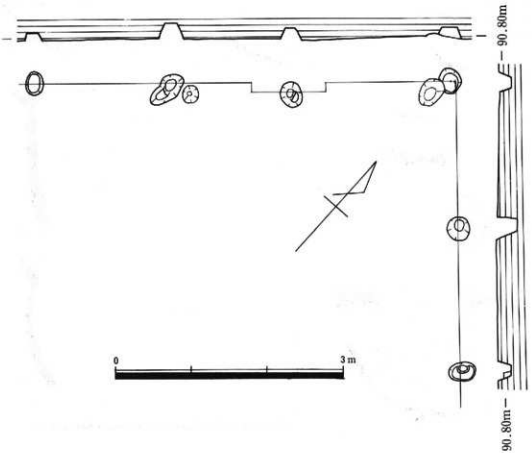
ものである。

SB1　トレンチ南端で検出された掘立柱建物であり、南辺・西辺は撹乱によって欠損している。北辺3間×東辺2間が残存しており、柱穴間は北辺東西が2.20m—1.55m—1.85m、東辺南北が1.90m—1.90mを計る。N—48°—Eを桁行方位とし、黒褐色土を埋土とする径約25cmの円形柱穴によって構成されている。

SB2　SB1の北西に位置する2間×3間の掘立柱建物であり、N—38°—Wを桁行方位としている。径約25cm、深さ約20cmを計る円形の柱穴によって構成され、黒褐色土を埋土とする。柱穴間は北辺東西が2.25m—2.40m、東辺南北が1.75m—1.70m—1.75m、南辺東西が2.25m—1.40m、西辺南北が1.70m—1.80m—1.75mである。棟柱通りの北辺から1間南には東柱があり、柱穴の平面形・規模は同じである。

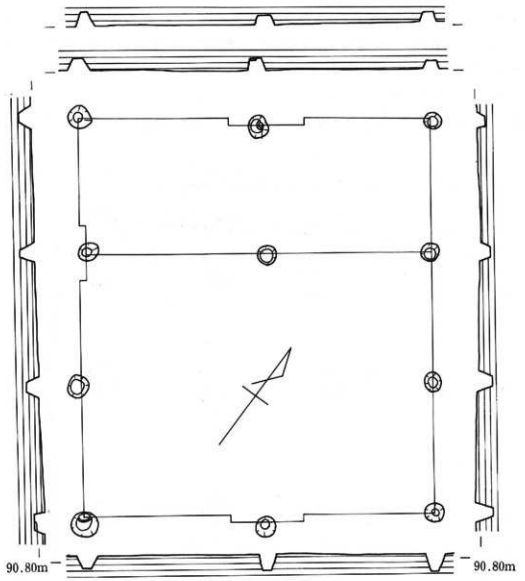
SB3　SB2の南東に位置する、2間×の掘立柱建物である。南辺東西の柱穴間は、1.40m—1.48mであり、径約30cmの円形の柱穴である。N—36°—Wを主軸方位とし、埋土は暗褐色土である。棟柱は、若干北にずれている。SB2・3の西側にはSK1が存在し、SB4・5との間は柱穴が数箇認められるのみである。

SB4　梁間3間×桁行4間の掘立柱建物である。南辺1間と東辺1間に東柱が通り、径約



第54図　T20-SB1　平面図・断面図

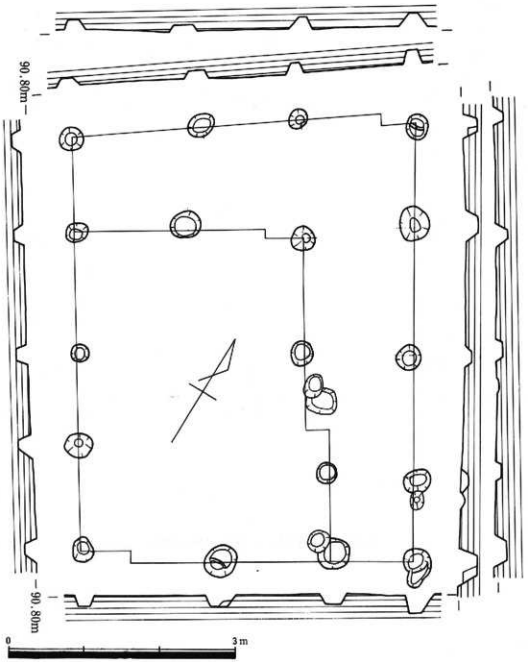
SB2



第55図　T20-SB2　平面図・断面図

25～35cmの円形の柱穴によって構成されている。柱穴間は、北辺東西が1.50m—1.30m—1.75m、東辺南北が1.10m—1.60m—1.75m—1.35m、南辺東西が1.35m—1.55m—1.75m、西辺南北が1.45m—1.20m—1.60m—1.25mを計り、N—33°—Wを桁行方位としている。正長方形ではなく、東辺が約30cm長くなっている。柱穴は、四隅が約25cmで他のものと比較すると深くなっている。埋土は、いずれも暗褐色土である。

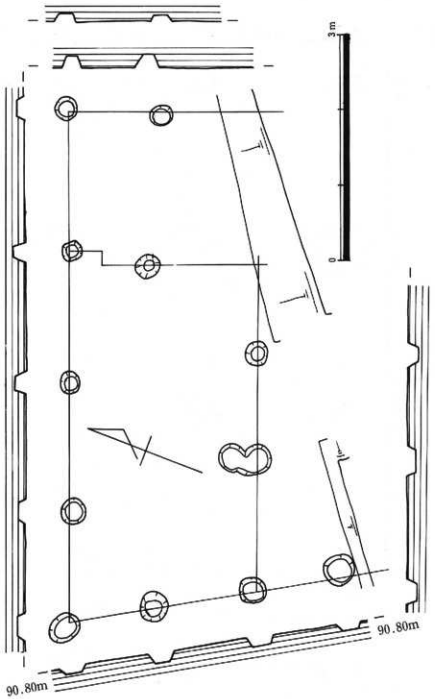
SB5　SB4の南東に位置する、梁間3間以上×桁行4間の掘立柱建物である。N—69°—E



第56図　T20-SB4　平面図・断面図

を桁行方位とし、柱穴間は北辺東西が1.85m—1.75m—1.70m—1.45m、東辺が1.25m、西辺南北が1.15m—1.35m—1.15mを計る。西辺が内側に入り込んでいるため、平面形はいびつになっている。柱穴は径約30cmの円形のものであり、黒褐色土を埋土としている。トレンチの南側に拡がっているが、3間×4間の規模であると推定される。

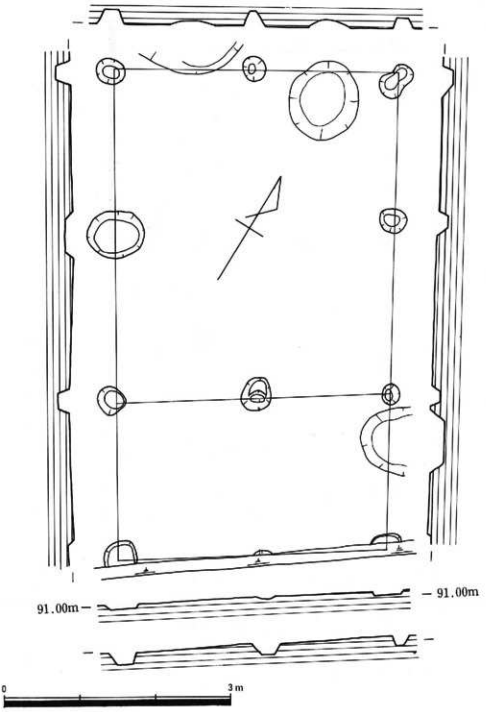
SB5　N—33°—Wを桁行方位とする、2間×3間の掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西が



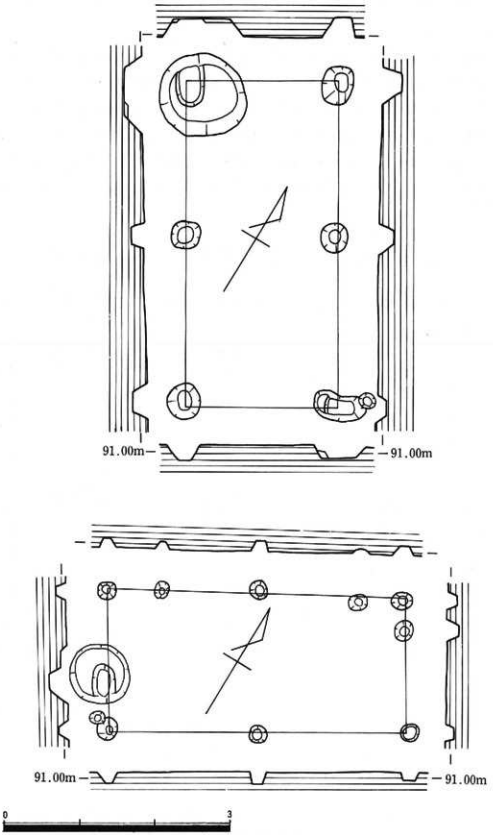
第57図　T20-SB5　平面図・断面図

1.95m—1.85m、東辺南北が2.10m—2.30m—1.95m、南辺東西が1.65m—1.90m、西辺南北が2.10m—2.20mである。棟柱通りの南辺から1間北には、束柱が認められる。柱穴は南辺が一辺約40cmの隅丸方形であるが、他は径約25～60cmの円形のものであり、暗褐色土を埋土とする。

SB7　SB6の東側に位置する1間×2間の掘立柱建物である。N—31°—Wを桁行方位とするもので、柱穴間は北辺2.00m、東辺南北2.25m—2.05m、南辺2.00m、西辺南北2.25m—2.05



第58図　T20-SB6　平面図・断面図

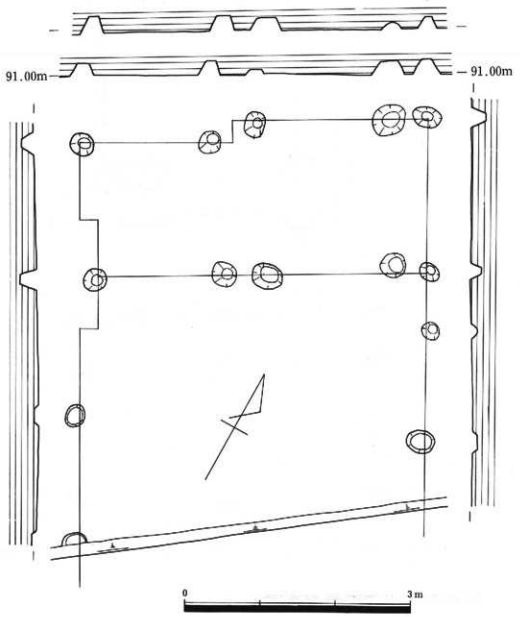


第59図　T20-SB７・SB８　平面図・断面図

mである。柱穴は北西隅が径約１mと大きく、他は径約40cmの円形である。埋土は黄色斑混りの暗褐色土である。

SB8　ＳＢ７に重複し、N—59°—Eを桁行方位とする１間×２間の掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西が1.95m—2.00m、東辺が1.80m、南辺東西が2.00m—1.95m、西辺が1.90mを計りＳＢ７とほぼ同規模である。径約20cmの円形の柱穴で構成され、暗褐色土を埋土とする。

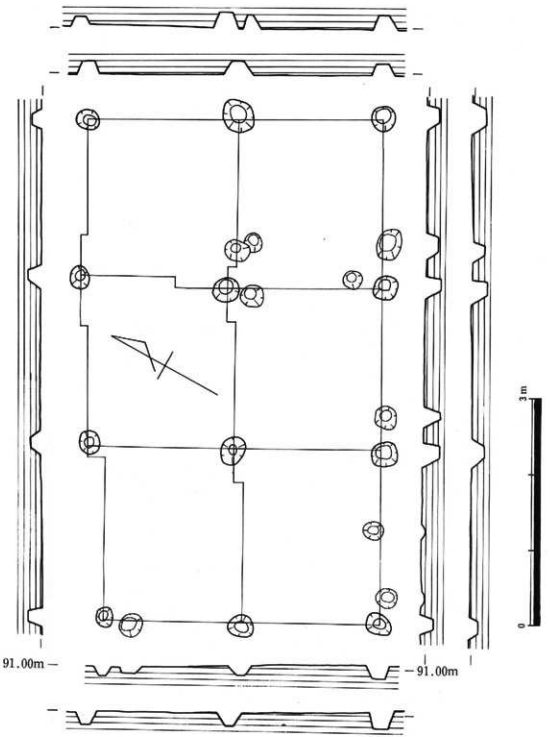
SB9　ＳＢ７・８の東側に位置する、２間×３間以上の掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西が2.25m—2.30m、東辺南北が2.25m—2.20m、西辺南北が1.70m—1.80m—1.75mであり、西辺が若干短い。N—29°—Wを桁行方位とし、北辺から１間南に東柱が認められる。埋土は、暗



第60図　T20-SB９　平面図・断面図

褐色土である。

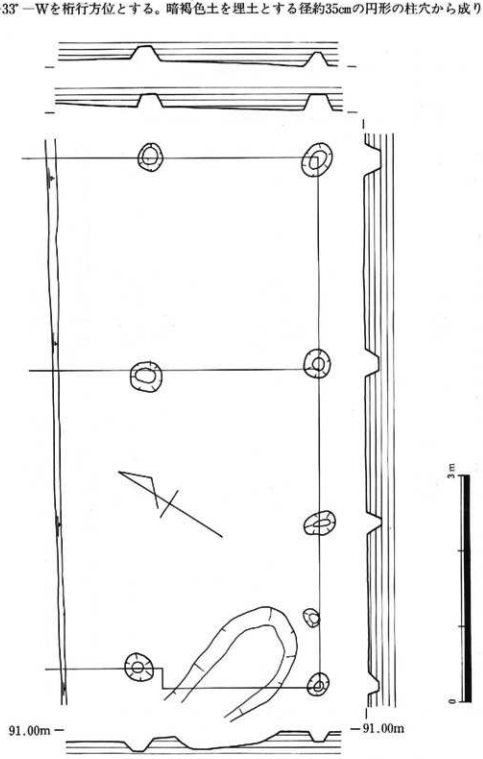
SB10　ＳＢ９と重複する、２間×３間の総柱の掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西2.10m—2.20m—2.30m、東辺南北1.95m—2.00m、南辺東西2.20m—2.20m—2.30m、西辺南北1.95m—1.80mを計り、N—61°—Eを桁行方位とする。柱穴は径約35cmのもので、黄色斑混りの暗褐色土を埋土とする。



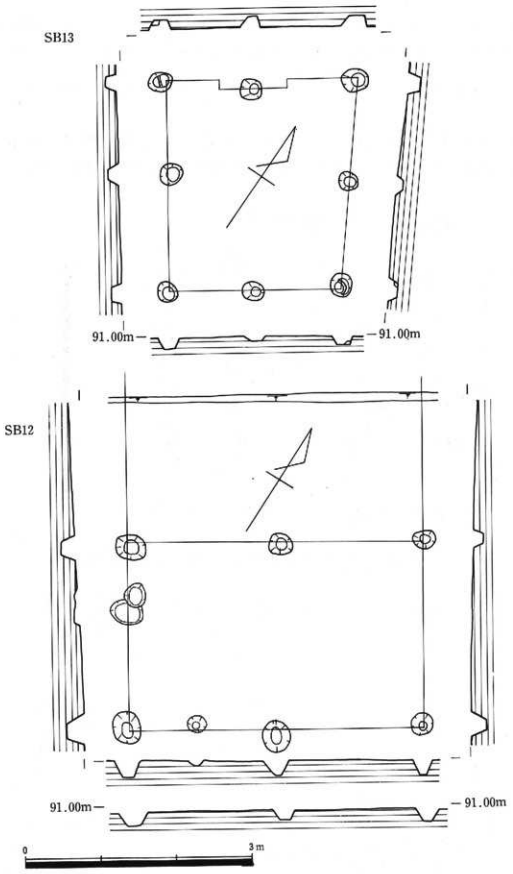
第61図　T20-SB10　平面図・断面図

ＳＢ11　Ｎ－32°－Ｗを桁行方位とする、３間×２間以上の掘立柱建物である。柱穴間は東辺が2.20m、南辺東西が2.25m－2.10m－2.15m、西辺が2.40mを計り、トレンチの北側に拡がる。東辺から１間西に東柱が通り、暗茶褐色土を埋土とする径約35㎝の柱穴によって構成される。

ＳＢ12　ＳＢ11に重複する、２間×２間以上の掘立柱建物である。南辺から１間北に東柱を有し、Ｎ－33°－Ｗを桁行方位とする。暗褐色土を埋土とする径約35㎝の円形の柱穴から成り、柱穴



第62図　T20-SB11　平面図・断面図

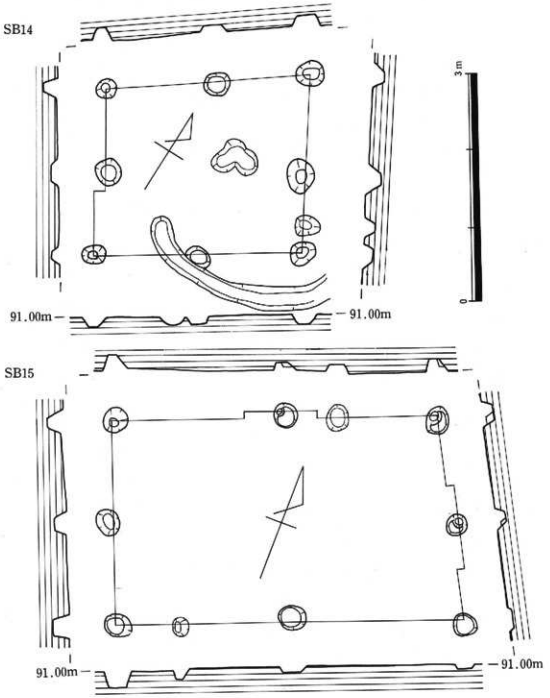


第63図　T20-SB12・SB13　　平面図・断面図

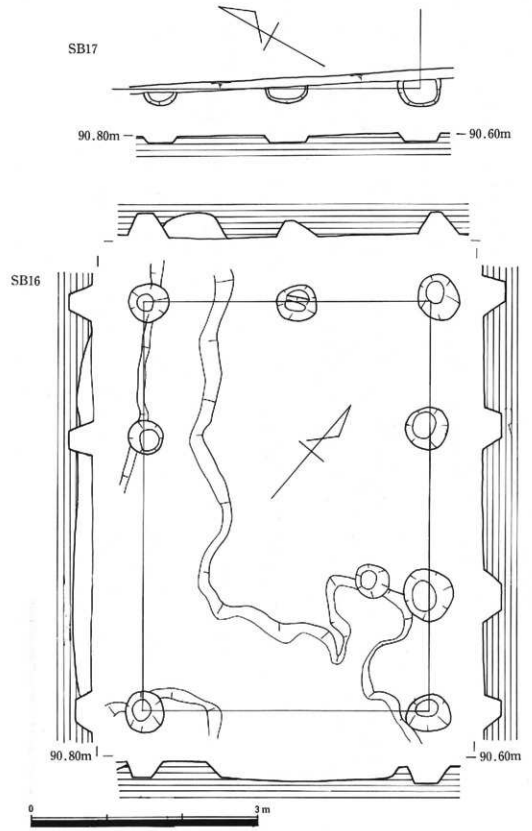
間は東辺2.50m、南辺東西1.95m—1.95m、西辺2.45mを計る。

SB13　SB11・12の東側に位置する、2間×2間の掘立柱建物である。N—35°—Wを桁行方位とし、柱穴間は北辺東西が1.35m—1.15m、東辺南北が1.45m—1.35m、南辺東西が1.10m—1.15m、西辺南北が1.55m—1.20mを計る。柱穴は暗褐色土を埋土とする、径約35cmの円形のものである。

SB14　SB11・12の東側に位置し、N—57°—Eを桁行方位とする2間×2間の掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西が1.25m—1.45m、東辺南北が1.00m—1.35m、南辺東西が1.35m—1.40



第64図　T20-SB14・SB15　平面図・断面図



第65図　T20-SB16・SB17　平面図・断面図

第66図　T20-SA 2 ・SA 3 ・SA 4 ・SA 5 ・SA 6　平面図・断面図

m、西辺南北が1.10m—1.15mを計り、暗茶褐色土を埋土とする。

SB15 SB9・10の東側に位置する、2間×2間の掘立柱建物である。柱穴間は北辺東西が2.25m—1.85m、東辺南北が1.35m—1.45m、南辺東西が2.25m—2.35m、西辺南北が1.35m—1.35mを計り、東西に長い長方形の平面形を呈する。径約30cmの円形の柱穴によって構成され、暗茶褐色土を埋土としている。掘方は、南東隅部分が浅くなっている。桁行方位はN—68°—Eである。

SB16 SD3を挟んでSB4の北側に位置する、2間×3間の掘立柱建物である。N—41°—Wを桁行方位とし、径約55cmの円形の柱穴で構成されている。柱穴間は北辺東西が1.85m—2.00m、東辺南北が1.55m—2.25m—1.80m、南辺が棟柱が不明で3.75m、西辺南北が1間分が不明で3.60m—1.80mである。埋土は、暗褐色土である。

SB17 SA6を挟んでSB16の東側に位置する掘立柱建物であり、西辺2間分のみが検出された。一辺約60cmの隅丸方形の柱穴によって構成され、N—60°—Eを主軸方位としている。柱穴間は1.75m—1.65mを計り、トレンチの東側に拡がっている。暗褐色土を埋土とし、深さは約10cmと浅いものである。

SA1 SD3の南側に断続的に認められる柱穴列である。検出部分における延長は約53mであるが、SB4の北辺部分には認められない。径約30cmの円形の柱穴から成り、間隔は約2.5mである。埋土は、暗褐色土である。SD3の北側には認められず、SB1～15の1群を他群と画することを目的とするSD3に付随する柵列であると想定される。

SA2・3・4・5 SD3の北西側に直交する柱穴列であり、4列が重複している。SA2・3とSA4・5が並列し、前者がN—30°—W、後者がN—38°—Wに延びている。SA2は径約25cmの柱穴から成り、延長6.6m、間隔1.70m—2.40m—2.50mを計る。SA3はSA2より若干大きい径約35cmの柱穴によって構成され、延長6.95m、間隔2.10m—2.50m—2.35mを計る。SA2と3との間隔は55cmであり、暗褐色土を埋土としている。SA4は径約35cmの柱穴によって構成されており、延長8.7m、間隔1.65m—1.70m—1.70m—2.10m—2.05mを計る。SA5も径約35cmの柱穴によって構成され、延長9.25m、間隔1.60m—1.55m—1.60m—1.70m—1.80mを計り、ほぼ等間隔である。SA4とSA5との間隔は、SA2と3との間隔と同じく55cmであり、埋土もほぼ同質である。これらの両側約3mの部分には明瞭な遺構は認められず、道路的空間の存在が想定される。少なくともこれらが掘立柱建物の一辺を構成するものとは考えられないことから、2列1単位の柵列としておく。

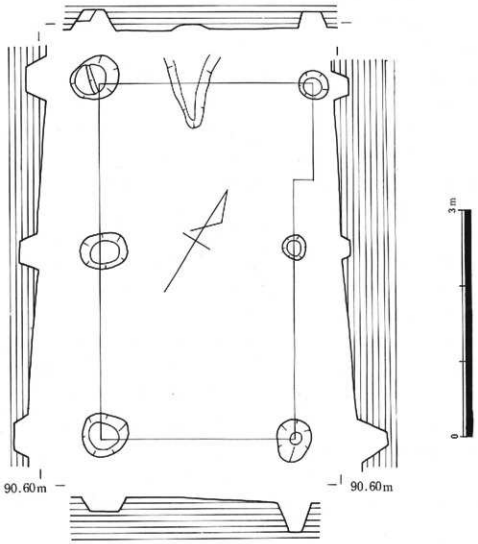
SA6 SB16と17との間に位置する、延長5.7mの柱穴列である。径約30cmの柱穴によって構成され、間隔は1.45m—1.25m—1.85m—1.15mを計る。主軸方位はSB16・17と同じN—40°—Wであり、暗褐色土を埋土としている。北西に延びる可能性もあるが、SB16に付随する柵列であると想定される。

SB18 SR1の北側に位置する、1間×2間の掘立柱建物である。N—32°—Wを桁行方位とし、柱穴間は北辺が2.85m、東辺南北が2.55m—2.15m、南辺が2.60m、西辺南北が2.45m—2.25

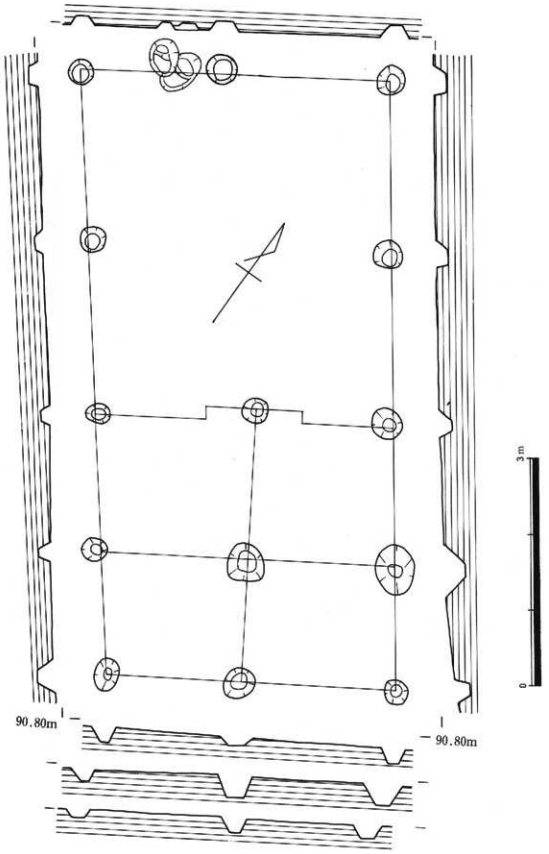
mである。北隅および東辺1間目の柱穴は径約35cmの円形のものであるが、その他は長径約65cmの楕円形のものである。南辺の柱穴はSR1の埋土上面から切り込んでおり、SB18がSR1埋没後に構築されたことを示している。埋土は、黄色斑を含む黒褐色土である。

SB19 SD8の西側に位置する、2間×4間の掘立柱建物である。N—37°—Wを桁行方位とし、径約40～50cmの円形の柱穴によって構成されている。棟柱通りの南辺から北1間と2間には東柱が存在しており、当掘立柱建物が2つの空間によって構成されていたことを示している。柱穴間は北辺東西が2.25m—1.85m、東辺南北が1.55m—1.95m—2.25m—2.30m、南辺東西が2.05m—1.80m、西辺南北が1.75m—1.80m—2.30m—2.25mである。暗褐色土を埋土とし、南東隅の柱穴はSR1の埋土上面から切り込んでいる。尚、東辺に平行するSD8は、SB19に伴う雨落ち溝であると想定される。

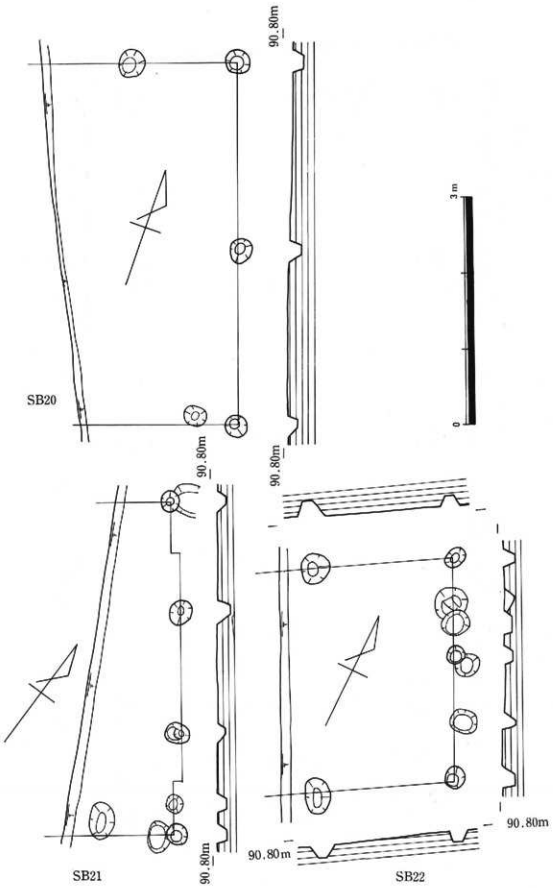
SB20 トレンチの西側に拡がる、東辺2間×の掘立柱建物である。径約35cmの円形の柱穴か



第67図 T20-SB18 平面図・断面図



第68図　T20-SB19　平面図・断面図



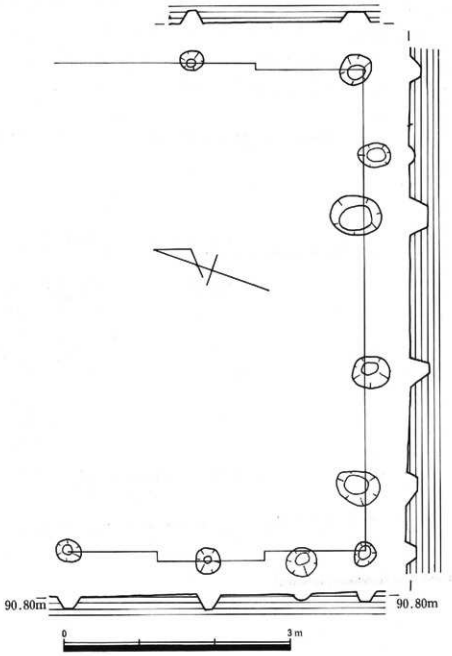
第69図　T20-SB20・SB21・SB22　平面図・断面図

ら成り、柱穴間は2.30m—2.45mである。N—71°—Eを主軸方位とし、埋土は暗褐色土である。

SB21 SB20の南側に位置する、東辺3間×の掘立柱建物である。N—37°—Wを主軸方位とし、柱穴間は1.35m—1.65m—1.45mである。

SB22 SB21に重複し、N—60°—Eを桁行方位とする2間×2間以上の掘立柱建物である。径約30～40cmの柱穴によって構成され、柱穴間は北辺1.85m、東辺南北1.65m—1.30m、南辺1.80mを計る。SB21と共に、トレンチの西側に拡がる。

SB23 北辺が不明瞭であるが、梁間2間以上×桁行3間の掘立柱建物である。柱穴は南辺が径約50cmとやや大きく、他は径約30cmのものである。柱穴間は東辺が2.30m、南辺東西が1.95m



第70図 T20-SB23 平面図・断面図

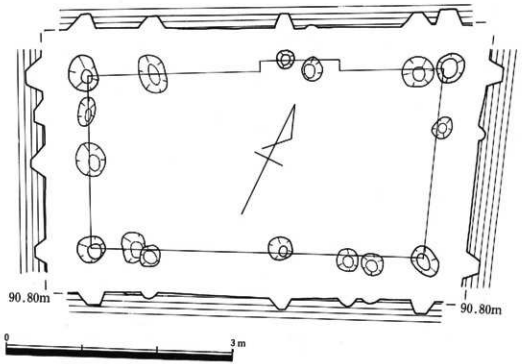
—2.00m—2.45m、西辺南北が2.10m—1.85mを計り、N—70°—Eを桁行方位としている。埋土は、暗褐色土である。

SB24 SB23の北側に位置する、1間×2間の掘立柱建物である。N—66°—Eを桁行方位とし、径約30～40cmの円形の柱穴によって構成される。柱穴間は北辺東西が2.20m—2.60m、東辺が2.60m、南辺東西が1.85m—2.50m、西辺が2.30mであり、東辺が広くなっているため若干いびつである。

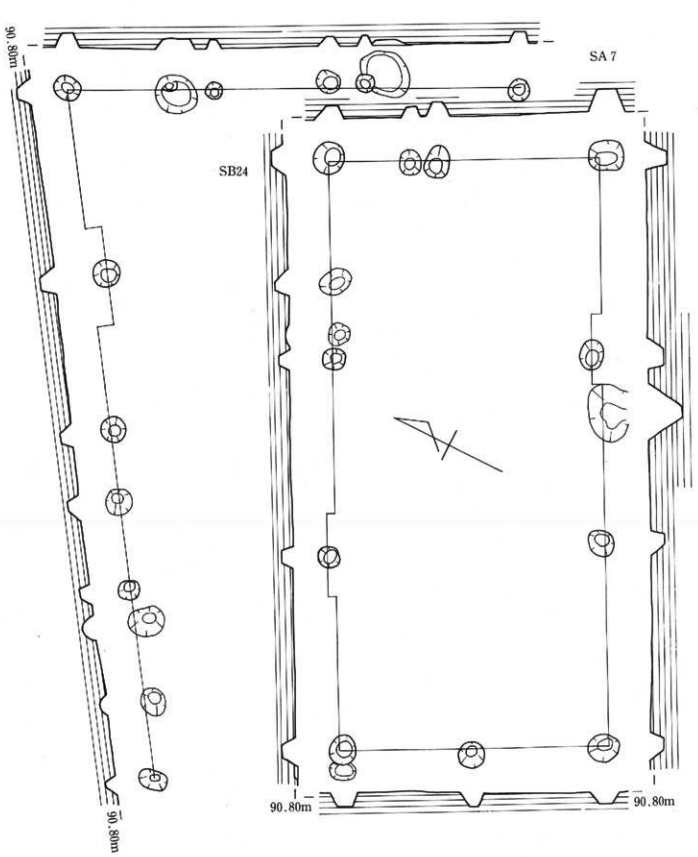
SB25 SB23・24に重複する、2間×3間の掘立柱建物である。径約40cmの柱穴によって構成され、N—63°—Eを桁行方位としている。柱穴間は北辺東西が2.65m—2.65m—2.55m、東辺南北が2.30m—1.40m、南辺東西が2.65m—2.40m—2.75m、西辺南北が1.75m—1.75mであり、桁行の間隔が梁間と比較すると長くなっている。埋土は、暗褐色土である。

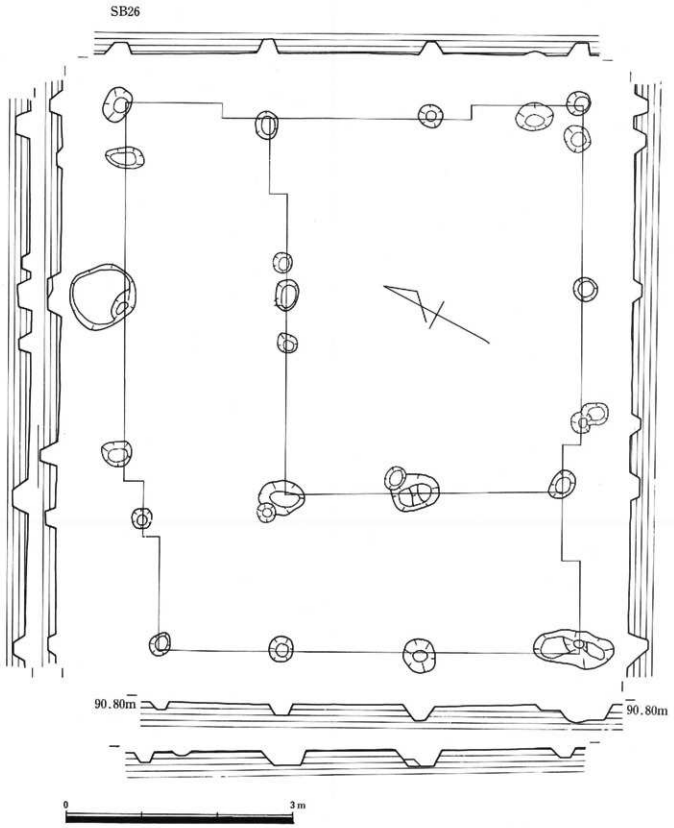
SA7 SB25の北辺と東辺に沿ってL字形に延びる柵列であり、北側はSD1に沿うものである。径約20～30cmの柱穴から成り、間隔は約2mである。SB25に伴い、北辺・東辺を区画する柵列であると想定される。

SB26 SD1より北側に位置する3間×3間の掘立柱建物である。N—62°—Eを桁行方位と

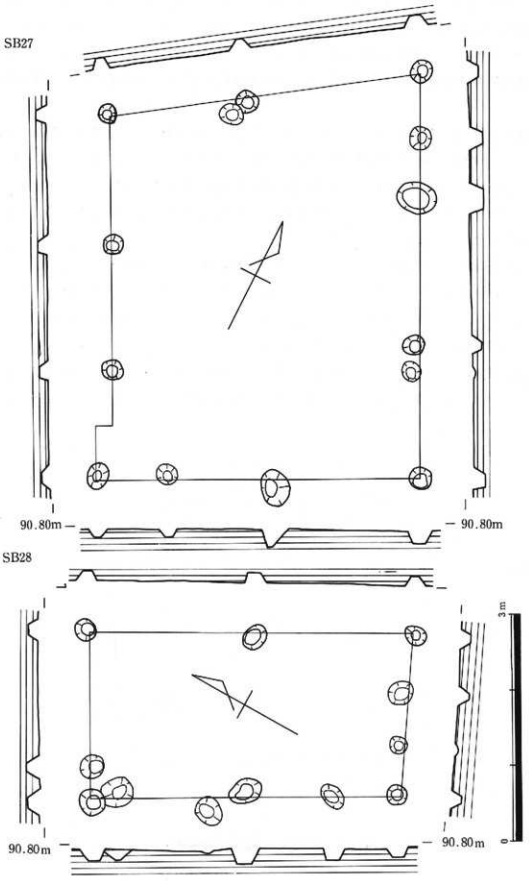


第71図 T20-SB25 平面図・断面図





第72図　T20-SB24・SA 7 ・SB26　平面図・断面図



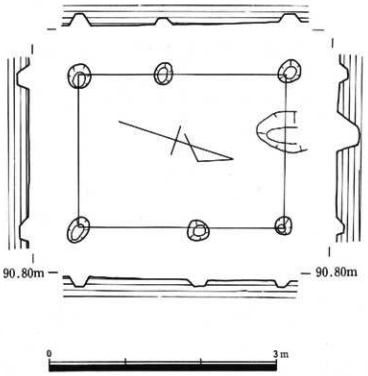
第73図　T20-SB27・SB28　平面図・断面図

し、北辺から南1間と西辺から東1間に東柱が通っている。柱穴間は北辺東西が2.65m—2.90m—1.65m、東辺南北が2.00m—2.15m—1.95m、南辺東西が2.45m—2.55m—2.15m、西辺南北が2.10m—1.85m—1.65mであり、ばらつきが著しい。柱穴の平面形・法量にもばらつきが大きく、柱筋が若干曖昧な点を含めて企画性の低い掘立柱建物であるが、北西隅を除いた三隅は直角である。

SB27　N—27°—Wを桁行方位とする、2間×3間の掘立柱建物である。径約30～50cmの円形の柱穴によって構成され、柱穴間は北辺東西が2.30m—1.85m、東辺南北が1.75m—2.00m—1.65m、南辺東西が2.00m—2.30m、西辺南北が1.45m—1.65m—1.75mを計る。東辺が55cm長くなっているため、北辺が斜交している。黄色斑を含む暗褐色土を埋土とし、深さは約15cmであるが、南辺棟柱は約25cmと若干深くなっている。

SB28　SB27の南側に位置する1間×2間の掘立柱建物である。柱穴間は北辺2.30m、東辺南北2.10m—2.20m、南辺2.15m、西辺南北2.10m—2.00mであり、N—29°—Wを桁行方位としている。柱穴は径約35cmの円形のものであり、暗褐色土を埋土としている。南辺はSD1に沿っており、東辺はSB27の東辺とほぼ柱筋を通している。

SB29　SD3より北側に位置するSB26～41の中で最も東側にある、1間×2間の掘立柱建物である。径約30cmの円形の柱穴によって構成され、桁行方位はN—19°—Wである。柱穴間は北

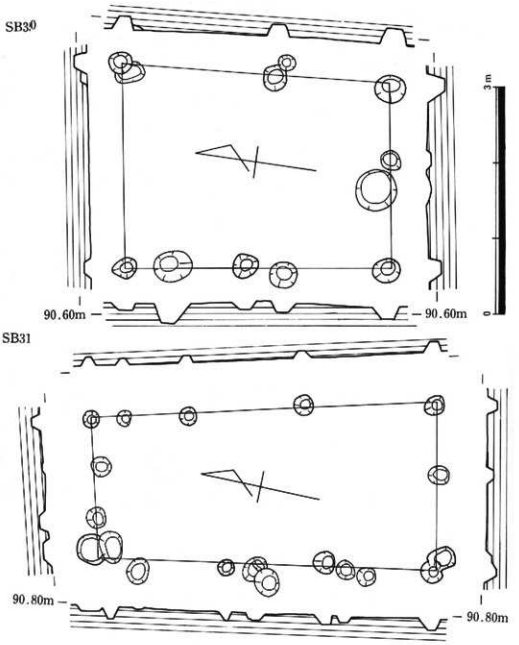


第74図　T20-SB29　平面図・断面図

辺が2.05m、東辺南北が1.60m—1.15m、南辺が2.00m、西辺南北が1.10m—1.70mを計り、暗褐色粗砂を埋土としている。ＳＢ29と東方の土壙群との間には柱穴が散在しているが明瞭な建物等は認められず、遺構面形成土も黄茶色砂利層に変質している。

ＳＢ30　ＳＢ28の東側に位置する、１間×２間の掘立柱建物である。柱穴は径約30cmの円形のものであり、N—9°—Wを桁行方位としている。柱穴間は北辺が2.75m、東辺南北が1.50m—2.10m、南辺が2.45m、西辺南北が1.95m—1.60mを計り、梁間にあたる北辺が広がっている。

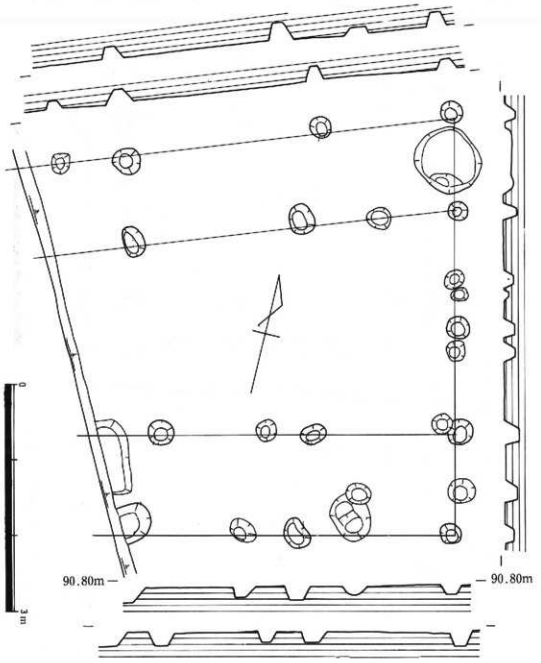
ＳＢ31　N—10°—Wを桁行方位とする、１間×３間の掘立柱建物である。径約25cmの円形の柱



第75図　T20-SB30・SB31　平面図・断面図

穴から成り、暗褐色砂質土を埋土としている。柱穴間は北辺が1.75m、東辺南北が1.75m—1.55m—1.30m、南辺が2.25m、西辺南北が1.45m—1.35m—1.80mであり、梁間である南辺が北辺よりも50cm長くなっている。

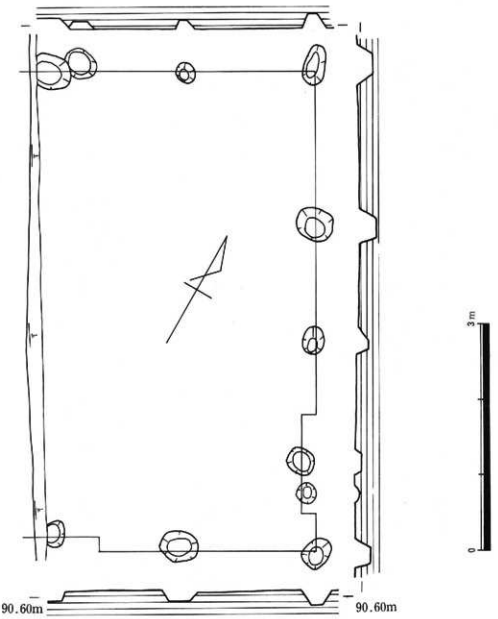
SB32 N—76°—Eを桁行方位とする、梁間4間×桁行3間以上の掘立柱建物であり、トレンチの西側に拡がっている。径約35cmの円形の柱穴によって構成されており、暗褐色土を埋土としている。桁行の南北各1間には東柱が通っており、平面は3分割されている。柱穴間は北辺東西



第76図　T20-SB32　平面図・断面図

が1.75m—2.65m、東辺南北が1.30m—1.40m—1.60m—1.25m、南辺東西が2.10m—2.25mを計り、ばらつきが大きい。東柱の間隔も北辺東西が2.00m—2.25m、南辺東西が1.90m—2.25mと一様ではなく、南北には柱筋が通っていない。また、東辺と南辺は直角を成しているが北辺と東辺は84°であるために、平面形は正長方形を呈していない。尚、SB32の様な柱配置による掘立柱建物は、今回の調査区内においては他に認められなかった。

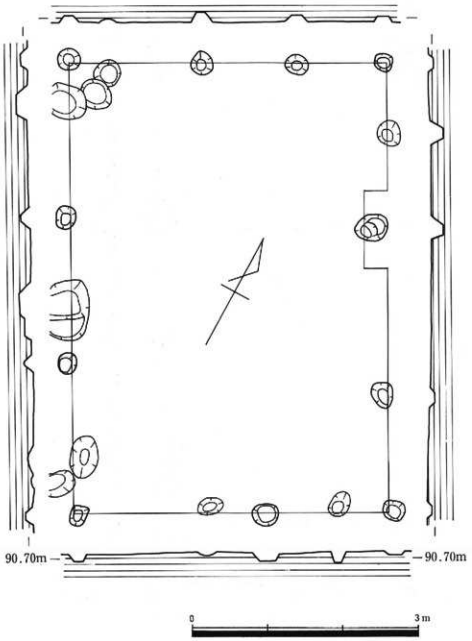
SB33 SB32の北側に位置し、N—30°—Wを桁行方位とする2間以上×4間の掘立柱建物で



第77図 T20-SB33 平面図・断面図

ある。柱穴は径約25～35cmの円形もしくは楕円形のものであり、トレンチの西側に拡がっている。柱穴間は北辺東西が1.75m—1.75m、東辺南北が1.25m—1.55m—1.55m—2.05m、南辺東西が1.80m—1.70mを計る。東辺南1間が他と比較すると短く、若干内側に入り込んでいる。

SB34 SB33と重複する掘立柱建物であり、梁間の北辺3間・南辺2間×桁行3間である。径約25～30cmを計る若干小型の円形の柱穴によって構成されており、南西隅の南北1間は浅くなっている。柱穴間は北辺東西が1.15m—1.30m—1.75m、東辺南北が1.55m—2.15m—2.25m、南辺東西が1.60m—2.55m、西辺南北が2.00m—1.95m—2.05mを計り、桁行方位はN—29°—Wである。東辺の北側1間は掘り方が深く、若干内側に入り込んでいる。

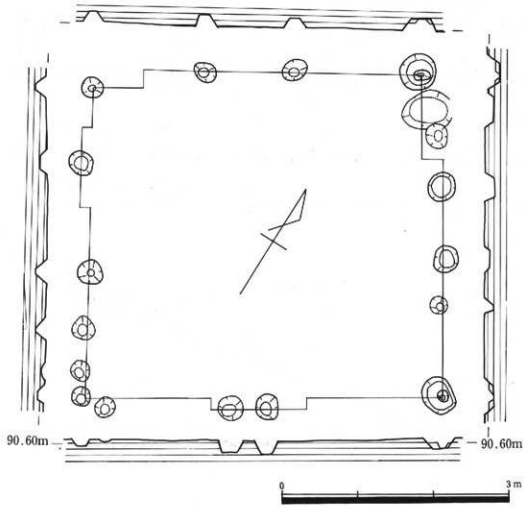


第78図　T20-SB34　平面図・断面図

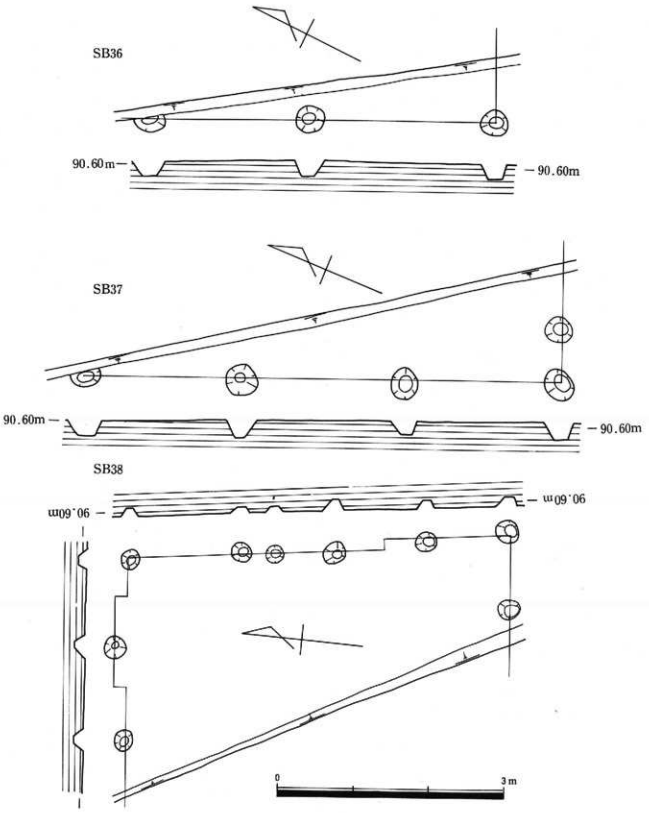
SB35　SB34の北側に位置し、若干重複する掘立柱建物である。SB34と同様の梁間北辺3間・南辺2間×桁行3間であり、N－32°－Wを桁行方位としている。東辺は径約40cm、他辺は径約25cmの円形の柱穴によって構成され、南辺の棟柱は深くなっている。柱穴間は北辺東西が1.70m－1.20m－1.45m、東辺南北が1.25m－1.55m－1.45m、南辺東西が2.35m－2.40m、西辺南北が1.65m－1.50m－1.00mである。SB34と同様の柱配置を呈しているが、SB34が南北を長辺とする長方形であるのに対して、SB35は若干東西の桁行が長いがほぼ正方形の平面形を呈している。

SB36　SB35の東側に位置する、西辺2間以上×の掘立柱建物である。N－65°－Eを主軸方位とし、トレンチの西側に拡がっている。径約35cm、深さ約25cmの円形の柱穴によって構成されており、間隔は2.45m－2.15mである。

SB37　SB36と同位置にある、西辺3間以上×の掘立柱建物である。N－23°－Wを桁行方位とし、SB36と同形状・規模の柱穴によって構成されている。柱穴間は2.05m－2.20m－2.05mである。



第79図　T20-SB35　平面図・断面図

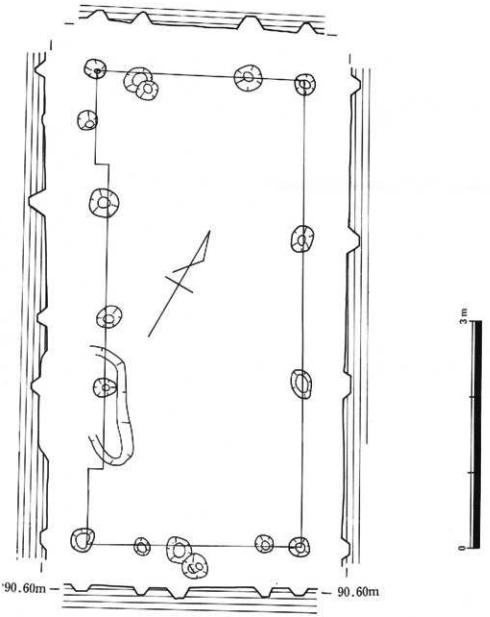


第80図　T20-SB36・SB37・SB38　平面図・断面図

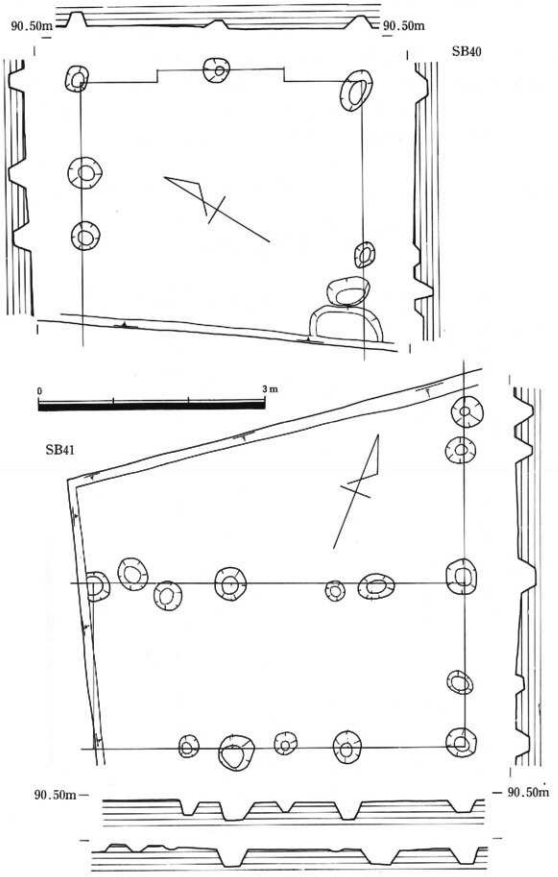
SB38　SB33・34に重複する、3間以上×4間の掘立柱建物である。径約30cmの円形の柱穴から成り、N－5°－Wを桁行方位としている。柱穴間は北辺東西1.15m－1.30m、東辺南北1.10m－1.20m－1.25m－1.50m、南辺1.00mを計り、他のものと比較すると短いものである。

SB39　SB36・37の西側に位置する、1間×3間の掘立柱建物である。径約25～40cmの円形の柱穴によって構成され、N－30°－Wを桁行方位とする。柱穴間は北辺が2.75m、東辺南北が2.15m－1.90m－2.05m、南辺が2.90m、西辺南北が2.05m－2.45m－1.75mであり、南辺が若干拡がっている。

SB40　トレンチの北端に位置する2間×2間以上の掘立柱建物であり、西側に拡がる。径約



第81図　T20-SB39　平面図・断面図



第82図　T20-SB40・SB41　平面図・断面図

35cmの円形の柱穴から成り、N－58°－Eを桁行方位とする。柱穴間は北辺2.05m、東辺南北1.85m－1.90m、南辺2.30mを計る。

SB41　SB40に重複してトレンチの北側に拡がる、3間以上×3間以上の掘立柱建物である。径約45～50cmを計る若干大型の円形の柱穴によって構成され、N－22°－Wを主軸方位としている。南辺の北1間には東柱が通り、柱穴間は東辺南北が2.25m－2.20m、南辺東西が1.55m－1.55mである。

SB41の南辺を構成するP1128とP1132からは、土師質土器が出土している（第53図6・13）。6は脚台付きの皿の脚部であり、径6.6cmを計る。脚部端は丸くおさめ、ヨコナデによって丁寧に成形されている。13は口径15.8cm、器高2.9cmを計る大皿である。底部から明瞭な屈曲を有して立ち上がる口縁部はやや外彎し、端部は押しナデによる平坦面を持っている。

掘立柱建物を構成する柱穴からは土師質土器・黒色土器等の小片が出土しているが、図示し得るものはない。それ以外の柱穴および遺構形成面直上から出土した遺物は、第53図に図示した。

12は、P866から出土した土師質土器の大皿である。口径・器高は13.6cm・2.1cmである。口縁部は底部から緩やかに方ち上り、口縁端部を水平に外方へ突出させている。14は口径4.6cm、器高1.3cmを計る土師質土器小皿であり、P1337から出土している。口縁端部は押しナデによって成形され、底部が若干突出している。14は、P266から出土した黒色土器である。口径・器高・高台径は14.4cm・5.4cm・5cmを計り、断面三角形の高台を有している。外面は口縁部に横方向のヘラミガキが施され、以下は指頭圧痕によって平滑に仕上げられている。口縁端部のヘラミガキは上端にも及び、平坦面を有している。内面にはラセン状暗文が施され、端部に1条の沈線が巡っている。7は脚付き台皿の脚部であり、P1144から出土している。径7.4cmを計り、脚部端を丸くおさめる。6と近似とした形態であるが、7はよりハの字状に付いている。

8～11・15・16・20は、P1325から出土している。8～11は土師質土器の小皿であり、口径・器高は各々7.8cm・1.5cm、9cm・1.5cm、7.8cm・1.5cm、8cm・1.5cmである。いずれも口縁端部に押しナデを有するものであるが、10・11はこれが強いため端部が内傾している。15・16は黒色土器である。15は口径14.4cmを計り、口縁端部が若干屈曲している。指頭圧痕によって平滑に仕上げられた外面の口縁部には、横方向のヘラミガキが丁寧に施されている。内面にはラセン状暗文が施され、端部には細い沈線が1条巡っている。16は口径14cm、器高3.9cm、高台径4.4cmを計り、他と比較すると扁平である。外面は口縁部に横方向のヘラミガキが密に施され、高台部から口縁部にかけての放射状ヘラミガキが若干認められる。内面には口縁端部に1条の沈線が巡り、暗文は3分割された円弧状のものによって構成されている。高台は、断面三角形であるが扁平である。20は白磁であり、扁平な玉縁状口縁である。17～19は、P1341から出土している。17・18は土師質土器小皿であり、口径・器高は各々8cm・1.6cm、7.8cm・1.3cmである。共に口縁端部に押しナデを加えるものであり、17は凹線状の沈線が1条巡っている。19は口径15cm、器高4.2cm、高台径4.4cmを計る瓦器椀である。磨滅が著しいため調整は不明瞭な点が多いが、外面は指頭圧痕、内面には横方向のヘラミガキが認められる。口縁端部は外方に突出し、内面に浅い沈線が1

条巡っている。高台は、断面三角形である。

21～27は、遺構形成面直上から出土したものである。21は口径5.2cm、器高1.5cmを計る土師質土器小皿であり、口縁端部は単純におさめる。22は底部外面に回転糸切り痕を持つ、ロクロ土師器の皿である。口径10.5cm、器高1.5cmを計り、底部の器壁が厚い。口縁端部は外方へ突出し、外面には沈線様の明瞭な屈曲が見られる。胎土は精良であり、色調は暗茶褐色を呈し、他の土師質土器との判別は明瞭である。23・24は緑釉の高台部破片である。23は断面が三日月形を呈し、24は段を有している。釉色は、いずれも濃緑色である。25は口径15.4cm、器高6.4cm、高台径5cmを計る黒色土器である。外面は口縁部に横方向のヘラミガキ、高台部から口縁部にかけては放射状のヘラミガキが施され、高台部接合部分にも整形を兼ねた横方向のヘラミガキが加えられている。内面にはラセン状暗文が施され、口縁端部には1条の沈線が巡る。底部と口縁部の器壁が厚く、高台は内傾する断面台形のものである。26は、土師質の鍋である。直立する口縁部から胴部がそのまま伸び、口縁端部に外方へ突出する鍔を有している。胴部外面は板状工具によって大まかに成形され、鍔の下方には指頭圧痕が加えられている。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は横方向のケズリである。胎土には金雲母が多量に含まれ、色調も暗褐色を呈していることから、在地産ではない。27は、土師質の鍋である。口径22cmを計り、口縁部は単純くの字状である。胴部外面は指頭圧痕、口縁部内外面はヨコナデによる。胴部内面は板状工具によるナデによって平滑に仕上げられ、頸部周辺にはススの付着が認められる。

ここで、T20で検出された主要遺構について若干の整理をしておくこととする。

方形周溝墓であるSX1は弥生時代後期の所産であり、今回の調査で検出された遺構の中で最も古い段階のものである。SX1の南端を切り込んでいるSK22も弥生時代後期の遺構である。

T20においては、T17～19で検出された8世紀～9世紀代の遺構は確認されなかった。しかしながら、2・3の柱穴から11世紀代のての字状口縁の土師質土器小皿が出土していることから、周辺の未発掘調査部分に当該期の遺構が存在していると想定される。

T20において検出された掘立柱建物等の主要遺構のほとんどは、鎌倉時代に属するものである。トレンチのほぼ中央部を東西に流れる自然流路は当期には既に完全に埋没し、生活面の1部として利用されていたと想定される。SD1・3によって分けられる3区画分の住居域を検出したことになり、各々掘立柱建物・棚列・土壙によって構成されている。掘立柱建物は主軸方位の変化から3～4段階程度の時期幅と変遷が想定されるが、これは第4章に譲ることとし、ここでは2間×3間を基本形として、1辺あるいは2辺に東柱を有して内部空間を区画する3間×4間程度の掘立柱建物と、1間×2間・1間×3間・2間×2間の掘立柱建物が1単位となる傾向が認められることを指摘するにとどめる。

第4章　ま　と　め

今回調査を実施した約8780㎡からは、弥生時代から室町時代に至る多様な遺構が検出された。本章では、まず遺物の年代観を検討し、これに基づいて各遺構の性格とそれらの変遷を辿り、高

木遺跡の全体像を復原するための1歩としたい。

1．遺物

まず、方形周構墓であるT20－ＳＸ1出土の土器について検討を加える。広口壺形土器と長頸壺形土器に共通する形態的特徴として、肩部が大きく張り、胴部最大径が上位1/3部分に位置することがあげられる。これに関連して、胴部最大径以下が急激にすぼまることから、球胴化傾向以前の形態であることがうかがわれる。広口壺形土器と鉢形土器に共通する形態的特徴としては、底部が突出せず、むしろあげ底気味であることがあげられる。これらに加えて、広口壺形土器の口縁部が直立気味で短く外反し、端部を若干垂下させる点から、弥生時代後期の中でも前半期以前の土器であると考えられる。このことは、ＳＸ1の南端を切り込むＳＫ22出土の受口状口縁甕形土器の形態・文様および施文部位を見ると、弥生時代後期中頃であることからも傍証されよう。

次の段階の土器群としては、T17包含層出土の一群とT18－ＳＸ4・5出土のものがあげられる。T17包含層出土の土師器皿・椀類は、1段の斜方射状暗文と見込みのラセン状暗文から、平城Ⅱ～Ⅲに相当する。須恵器坏身・坏蓋類には若干の時期巾があるものの、概ね土師器類と同じ時期のものである。長胴甕・鉢は小片であるため対比が困難であるが、近江における出土例から、概ね8世紀代であると言える。以上のことから、T17包含層出土の一群は、時期巾はあるものの概ね8世紀前半を中心とする土器群によって構成されていると言えよう。また、T18－ＳＸ4・5出土の長胴甕もT17出土のものと大きく時間をへだてるものとは考えられず、やはり8世紀代の所産である。

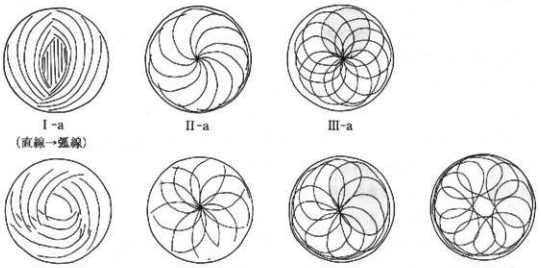
須恵器坏身のみ、もしくはこれに若干の土師器類を伴出した遺構としては、T4－ＳＤ1・T5－ＳＤ1・T18－ＳＢ1・T19－ＳＢ1があり、いずれも近似した形態を呈している。T18－ＳＢ1出土のものは、底部は回転ヘラ切りの平底であり、底部からの立ち上がり部分の屈曲は丸味を帯び、口縁部は直線的にのび、端部を丸めておさめている。これに対し、T5－ＳＤ1出土の墨書を有する須恵器坏身は、回転ヘラ切りの底部から明瞭な稜を有して立ち上がり、口縁端部を若干外反させている。この両者を比較すると、前者の方が古い様相を呈しているが、いずれも概ね9世紀前半に相当しよう。小片ではあるが、近似した形態の須恵器を出土したT4－ＳＤ1・T19－ＳＢ1もほぼ同時期の遺構であると言えよう。

次の段階のものは、近江型黒色土器を伴う一群であり、11世紀後半～13世紀の時期巾を持っている。ここでは、比較的まとまって出土している資料について見ていくこととする。

まず、古い様相を呈する黒色土器椀を伴うT20－ＳＤ3とT13－ＳＤ8について対比してみる。いずれも器壁が厚くて器高の深いものであり、内外面の調整にヘラミガキ手法が多用される段階のものであり、他との判別は明瞭である。両者を比較すると、T13－ＳＤ3の高台が若干細小していること、外面のヘラミガキが省略傾向にあること、内面の暗文はラセン状暗文のみで構成されることが相異的としてあげられ、T20－ＳＤ3よりは新しい傾向にある。伴出する土師質土器を見ると、T20－ＳＤ3の小皿類は新しい様相を呈しているが、大皿・緑釉類はほぼ同時期と考えられ、概ねT20－ＳＤ3が11世紀後半、T13－ＳＤ8が11世紀末～12世紀初頭である。

次にT20－ＳＤ１・T19－ＳＤ３・T19－ＳＤ１を見てみると、前段階のものと比較すると黒色土器椀の高台が断面三角形を呈して扁平・縮小化し、器高もやや浅くなっている。高台から口縁部にかけての放射状ヘラミガキは認められず、内面のラセン状暗文も若干粗雑化している。T20－ＳＤ１では、黒色土器椀においても比較的しっかりした断面台形の高台のものから、小さな断面三角形のものまであり時間巾があるが、土師質土器大皿・緑釉から上限は11世紀後半に置くことができよう。これとT19－ＳＤ３を比較すると、調整手法にはほとんど差異は認められないが、器壁が薄くなり坏部の立ち上がりが直線的にのびる傾向にある。また、土師質土器は高台形様のものがある等より新しい要素が認められる。T19－ＳＤ１の黒色土器は、前二者が法量的に前段階のものと変化がないのに対し、口径の縮小・高台の倭小化傾向がより顕著である。ただし、土師器皿類、特に大皿に古い形態のものが存在することから、かなりの時期巾を見込む必要がある。いずれも、かなりの時期巾を持ちかつ重複する時期のものであり、土師質土器小皿については基本的成形手法・形態に変化は少ない。したがってここでは黒色土器椀の形態変化によって考えざるを得ないが、各々中心時期をT20－ＳＤ１は12世紀中頃、T19－ＳＤ３は12世紀後半～13世紀前半、T19－ＳＤ１は13世紀後半に置くことができよう。

ここで、黒色土器の内面に施される暗文については若干触れておく。これらの暗文は、ラセン状暗文として総称されるのが通有であるが、高木遺跡においては文様構成・施文手法の差異によって３類に大分される。Ⅰ類は、直線と弧状暗文の組合せによるものであり、更にａ・ｂの２類に細分される。ａ類は、見込み部分に１方向の直線暗文を施した後に、相対する２方向の弧状暗



第83図　黒色土器椀内面暗文模式図

文によって口縁端部までを埋めるものであり、口縁部に更に横方向の直線暗文を加えるものも認められる。b類は、3方向の弧状暗文が巴状を呈するものである。Ⅰ－a類は、11世紀後半にはその存在が認められ、横方向の暗文で口縁部までを埋める瓦器の暗文と相通じる点が残存しているものであるが、b類と共に13世紀代にも若干ながら残る様である。Ⅱ類は、弧状暗文を見込み中央部を中心として放射状に連続して施すものであり、1方向の弧状暗文によるものをa類、相対する2方向の弧状暗文によるものをb類として細分される。いずれも、口縁端部に沿って暗文を終了させているため、横方向の直線暗文と近似する効果が生じているものが含まれる。Ⅱ類は、12世紀以降通有に認められるが、厳密な意味でのラセン状は呈していないものである。Ⅲ類は、円弧文を見込み部分を中心として放射状に連続して施すものであり、いわゆるラセン状暗文である。これらは、円弧状暗文の形状等によって更にa・b・cの3類に細分される。a類を基本形とすると、b類は約1/4に占める横長の楕円形状暗文を連続させるもの、c類は見込み中央部に空白部を残すものとなる。Ⅲ－a類は12世紀に認められ、13世紀代においてはa・b・cの3類が通有に認められる。高木遺跡での出土例はないが、Ⅲ類およびⅡ類は、黒色土器終末期である14世紀後半においても認められる手法である。Ⅰ類からⅡ・Ⅲ類への変化は、近江型暗文手法の明瞭化であると同時に簡略化への段階であるが、12～14世紀におけるこれら暗文の分類は時期差を大きく反影する要素ではない。しかしながら、ラセン系と非ラセン系の2種の暗文手法が識別され得ることは明瞭であり、地域差もしくは工人集団の差異を反影すると想定される。

出土量は極めて少ないが、T1－SK2、T2－SD1出土の古瀬戸・土師質土器は、概ね16世紀代に比定される。

以上の様に、遺物からは大まかに5時期に大別される。Ⅰ期：弥生時代後期前半、Ⅱ期：8世紀、Ⅲ期：9世紀、Ⅳ期：11世紀後半～13世紀、Ⅴ期：16世紀であり、Ⅳ期は更にa：11世紀後半、b：12世紀、c：13世紀に細別されるが、いずれもかなり時期巾を有している。

2．遺構

ここでは、遺物の年代観から得たⅤ期分類に従って各遺構を整理して行き、周辺遺跡との比較を加えつつ高木遺跡の変遷をたどってみたい。

Ⅰ期　当期に相当する遺構は、T20－SX1の方形周溝墓とT20－SK22のみである。SX1の西・南方では方形周溝墓は検出されておらず、群を構成するものであれば、北東部分に拡がると想定されるが、これに対応する住居域は現在のところ確認されていない。周辺には、弥生時代中期以降の土壙墓群、弥生時代後期の前方後方形周溝墓によって構成される浅小井遺跡が北西約1kmに位置している。また、北東約500mに安土町香庄遺跡、南約1kmに安土町小中遺跡が存在しているが、香庄遺跡・小中遺跡のものについては、同町慈恩寺遺跡内において当該時期の集落が確認されている。

Ⅱ期：明瞭な遺構は確認され得なかったが、T18－SX4・5、T17包含層がこれにあたる。T18－SX4・5は竪穴住居の残骸である可能性が高く、沼沢池であるT17近辺においても、試掘調査によって竪穴住居と想定される遺構が確認されている。また、高木遺跡の南約500mに位

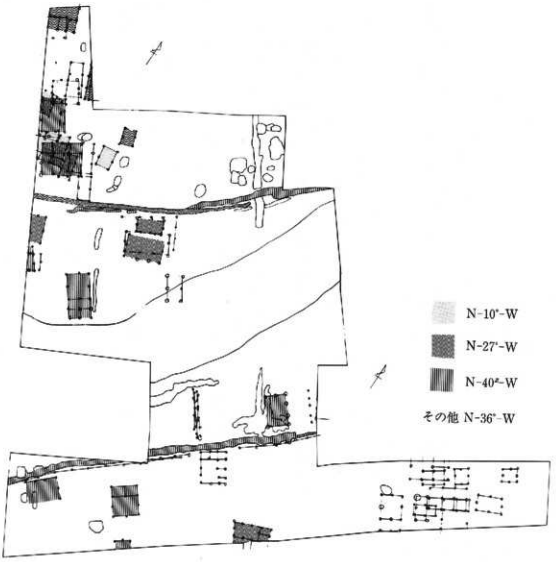
置する後川遺跡においても８世紀初頭のカマドを有する竪穴住居が検出されており、Ｔ18の沼沢池を挟んで約500ｍの範囲内において竪穴住居によって機成される当該期の集落が形成されていたと言える。高木遺跡から約1.5㎞西側の現市街地においては７世紀後半には掘立柱建物で構成される集落に転換しており、今後当地域周辺における竪穴住居の消長は注目される。

Ⅲ期：一連のものと考えられるＴ４－ＳＤ１・Ｔ５－ＳＤ１とＴ18－ＳＢ１・２、Ｔ19－ＳＢ１が当期にあたり、Ⅱ期に引き続き集落が営まれている。遺構の在り方は依然として散慢である。Ｔ18においては、２間×３間の掘立柱建物（ＳＢ１・２）がＬ字形に配置されているが、Ｔ19－ＳＢ１とは主軸方位を異にしており、時期差と考えられる。Ｔ19－ＳＢ１とＴ４－ＳＤ１・Ｔ５－ＳＤ１の主軸方位が、蒲生郡統一条里とほぼ一致することは留意される。Ｔ５－ＳＤ１出土の須恵器に記された「北院」の「院」に対応する遺跡がどこに位置するか、また、「北院」にあたる遺構が何かは今回の調査では不明であるが、官衙もしくはそれらに準ずる性格を有する遺跡と関連するものが当地に営まれていたことがうかがわれる。

Ⅳ期：今回調査の大半が当期に含まれ、主軸方位によって掘立柱建物・溝を整理していくと、Ｎ－10°前後―Ｗ、Ｎ－27°前後―Ｗ、Ｎ－35°前後―Ｗ、Ｎ－40°前後―Ｗに大別される。Ｎ－10°前後―Ｗの一群は、Ｔ20の北西端部においてのみ確認され、ＳＢ30～33・38の４棟以上によって構成される。Ｎ－27°前後―Ｗは、Ｔ20においてＳＢ５・ＳＢ20・23・25、ＳＢ36・41の３単位が散在している。ＳＢ23・25の様に２間×３間程度と１間×２間の建物がセットとなると想定される。Ｎ－35°前後―Ｗは、Ｔ18・19・20の全域において存在している。Ｔ20では重複が著しく、更にＮ－34°―Ｗ、Ｎ－36°―Ｗに細分される。散在してはいるものの、北西端と、東端に集中する傾向にあり、ＳＢ６～15の一群がより整然とした配置を呈している。Ｎ－40°前後―ＷはＴ20のＳＢ１～３、ＳＢ16、ＳＢ19・21の３単位のみが確認されており、比較的まとまっている。これら掘立柱建物を構成する柱穴内からの遺物が小片であり、時期決定が困難であるため、方向を同じくする溝との整合関係から変遷を推定することとする。Ｎ－10°前後―Ｗについては不明であるが、Ｎ°―27°前後―ＷとＴ20－ＳＤ１（新）、Ｎ－35°前後―ＷとＴ20－ＳＤ１（古）・ＳＤ３と組み合わされる。したがって、Ｎ－40°前後―Ｗ・11世紀後半→Ｎ－27°前後―Ｗ・12世紀→Ｎ－35°前後―Ｗ・12世紀後半～13世紀となり、主軸方位を振幅させながら変遷していると推定され、12世紀後半以降拡散している状況がうかがわれる。

Ⅴ期：調査区西端にあたるＴ１－ＳＤ１とＴ２－ＳＤに区画された部分と、周辺の石列状遺構が当該期の明瞭な遺構である。礎石建物や石垣状列石遺構の存在等から、いわゆる居館跡であると考えられる。北東約４㎞に佐々木氏の本拠地である観音寺城を望む当地域周辺には、佐々木氏関連の居城が密に存在している。長田町は、浅小井城・長田城・金剛寺城に囲まれた径約1.5㎞の範囲内にあたり、方形区画を有する遺構が複数存在している。Ｔ１－ＳＤ１・Ｔ２・ＳＤ１をはじめとして、同じ高木遺跡内北方約330mには焼土層を有する１区画、東北東約500mには、香庄館と想定される１区画、南東約880mに１区画あり、香庄館の南約250mにも当該期の遺構が確認されている。

以上の様に、今回の調査では高木遺跡が11世紀～13世紀の集落を中心として、弥生時代後期～16世紀におよぶ複合遺跡であることが判明したわけであるが、今後周辺地域を考えていく上でのいくつかの課題を提示することともなった。浅小井遺跡で検出された弥生時代中期以降の土壙墓群・方形周溝墓と小集団の方形周溝墓群との関係とこれらに対応する集団の居住域の把握、7世紀後半～9世紀における集落構造の転換と生産域、居館と村落の把握、豊織期以降近世集落への転換等であり、これらが今後の調査・研究によって解明されていくことを望むと共に、本書が、当地域における歴史理解の一助になれば幸いである。



第84図　T20建物群模式図

第一表　掘立柱建物規画表

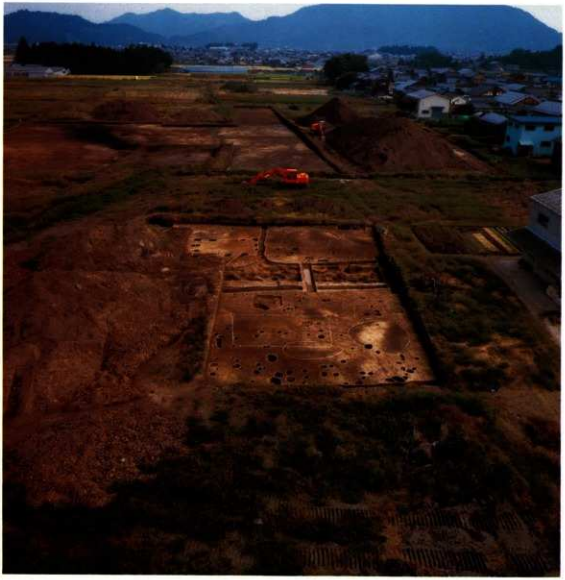
トレンチ番号	SB番号	主軸方位	規模		備考
			梁間×桁行	床面積	
T1	SB1	N—27°—W	3間×	(4.32m²～)	
T2	SB1	N—33°—W	4間×	(8.64m²～)	礎石建物
	SB2	N—33°—W	2間×	(8.00m²～)	
T18	SB1	N—26°—W	2間×3間	28.6m²	須恵器
	SB2	N—22°—W	2間×3間	23.5m²	須恵器
	SB3	N—34°—W	2間×4間	42.9m²	
	SB4	N—37°—W	2間×3間～	21.4m²～	
	SB5	N—30°—W	2間×	(17.4m²～)	
	SB6	N—30°—W	2間×3間～	17.94m²	
T19	SB1	N—34°—W	3間×4間	31.2m²	須恵器
	SB2	N—19°—W	2間×	(6.3m²～)	
	SB3	N—30°—W	2間×	(6.8m²～)	
	SB4	N—30°—W	2間×3間	34.2m²	
	SB5	N—34°—W	2間×	(16.1m²～)	
	SB6	N—40°—W	2間×	(5.8m²～)	
T20	SB1	N—42°—W	2間×3間	21.3m²～	
	SB2	N—38°—W	2間×3間	24.2m²	
	SB3	N—36°—W	2間×	(4.2m²～)	
	SB4	N—36°—W	3間×4間	26.4m²	
	SB5	N—21°—W	3間×4間	24.6m²	
	SB6	N—33°—W	2間×3間	24.7m²	
	SB7	N—31°—W	1間×2間	8.6m²	
	SB8	N—31°—W	1間×2間	7.5m²	
	SB9	N—29°—W	2間×3間～	24.1m²	
	SB10	N—29°—W	2間×3間	26.5m²	
	SB11	N—32°—W	3間×2間～	28.6m²～	
	SB12	N—33°—W	2間～2間～	19.5m²～	
	SB13	N—35°—W	2間×2間	6.9m²	
	SB14	N—33°—W	2間×2間	6.5m²	
	SB15	N—22°—W	2間×2間	12.4m²	
	SB16	N—41°—W	2間×3間	21.6m²	
	SB17	N—30°—W	2間～×		
	SB18	N—32°—W	1間×2間	13.4m²	
	SB19	N—37°—W	2間×4間	33.0m²	
	SB20	N—19°—W	2間×2間～	13.3m²～	
	SB21	N—37°—W	3間×	(6.7m²～)	
	SB22	N—30°—W	2間×2間～	10.6m²～	
	SB23	N—20°—W	3間×2間	25.3m²	
	SB24	N—24°—W	1間×2間	12.5m²	
	SB25	N—27°—W	2間×3間	28.9m²	
	SB26	N—28°—W	3間×3間	43.6m²	
	SB27	N—27°—W	2間×3間	20.9m²	
	SB28	N—29°—W	1間×2間	9.9m²	
	SB29	N—19°—W	1間×2間	5.6m²	
	SB30	N—9°—W	1間×2間	8.7m²	
	SB31	N—10°—W	1間×3間	8.1m²	
	SB32	N—14°—W	4間×3間～	36.4m²～	
	SB33	N—30°—W	4間×2間～	33.6m²～	
	SB34	N—29°—W	3間×3間	25.2m²	
	SB35	N—32°—W	3間×3間	20.2m²	
	SB36	N—25°—W	2間～×	—	
	SB37	N—67°—W	3間～×	—	
	SB38	N—5°—W	4間×3間～	18.4m²～	
	SB39	N—30°—W	1間×3間	17.7m²	
	SB40	N—32°—W	2間×2間～	15.4m²～	
	SB41	N—22°—W	3間～×2間～	30.9m²～	

1．観音寺城　2．常楽寺城　3．香庄館　4．金剛寺城　5．浅小井城　6．長田城　7．金剛寺城
8．本郷城　9．谷氏館　10．西宿城　11．久郷屋敷　12．馬淵城　13．長光寺城
a．T1-T2　b．昭和61年度Ｔ１～３　c．安土町教育委員会調査　d．昭和63年度調査
e．後川遺跡昭和63年度調査

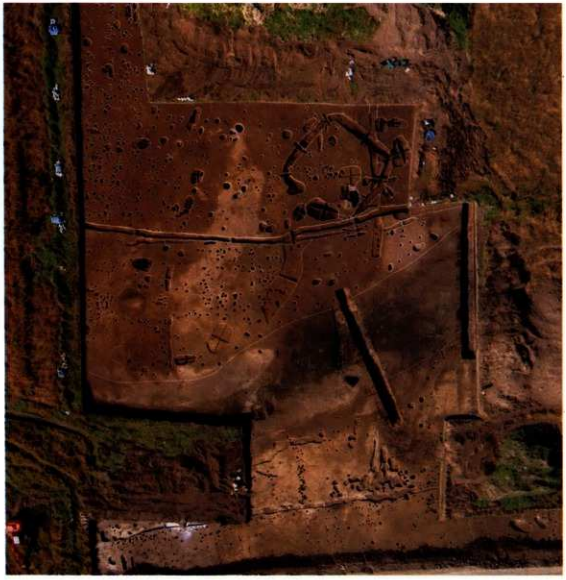
第85図　中世居館跡関連遺跡分布図

図　　版

調査対象地周辺遠景（北から）



T19 上空から安土町を望む



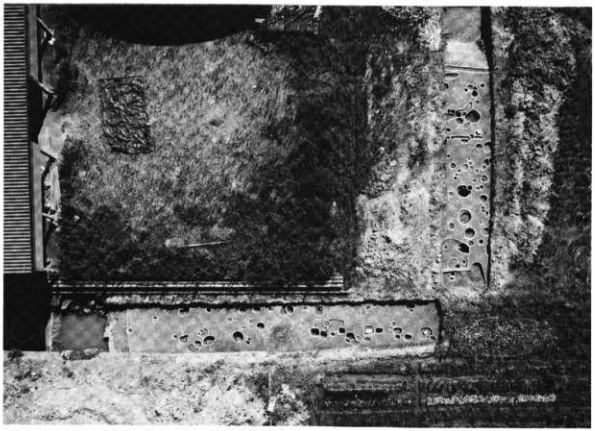
T20 全 景（右上限が北）

T20－S×1　土層堆積状況

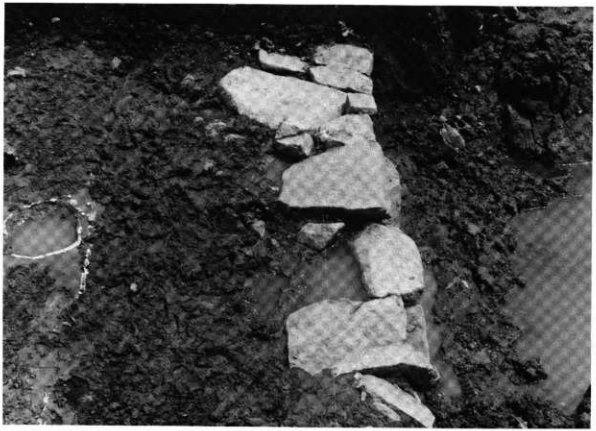
1．調査全景（西から観音寺を望む）

2．空測用バルーンによる作業状況（T2上空）

1．T1～T12全景

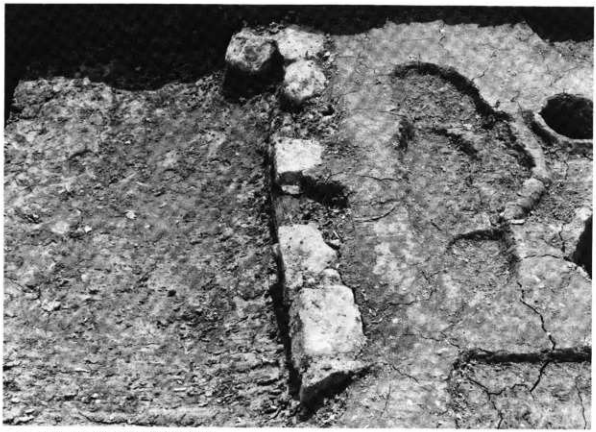


2．T1・T2方形区画溝内全景（右下隅が北）

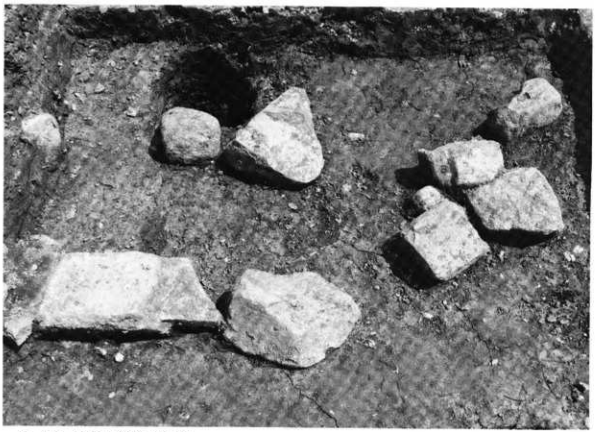


1．T２-SD１石垣状石組遺構検出状況

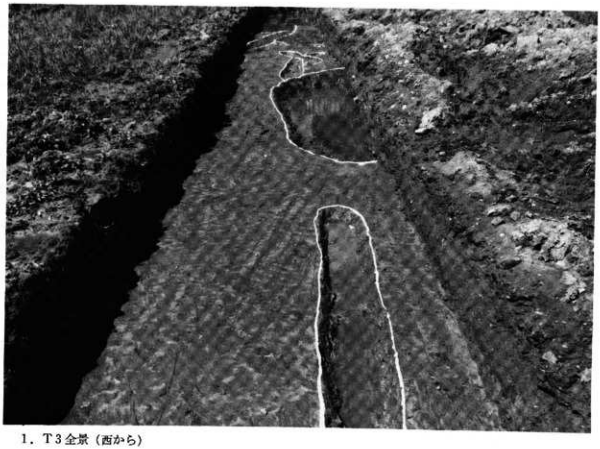
2．同上、側面



1．T2-SK6石桝状遺構検出状況

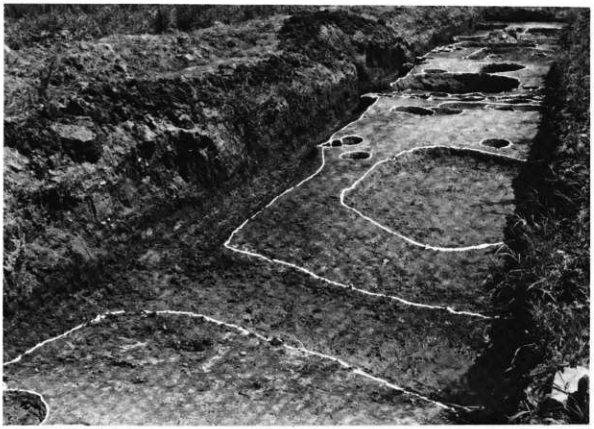


2．T2-SK4配石遺構検出状況

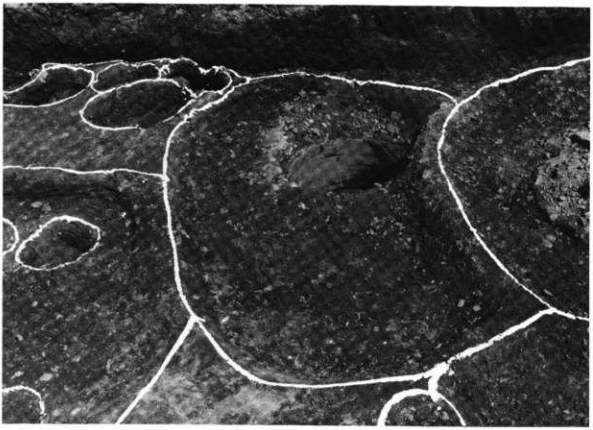


1．T3全景（西から）

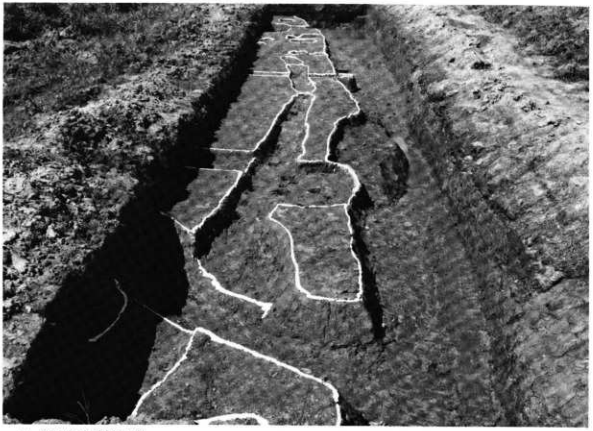
2．T4全景（西から）



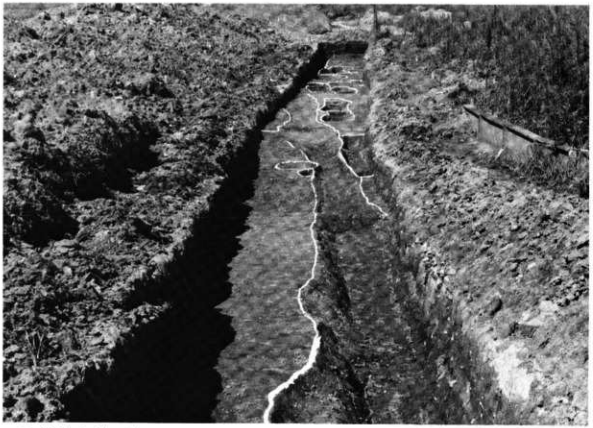
1．T5全景（西から）



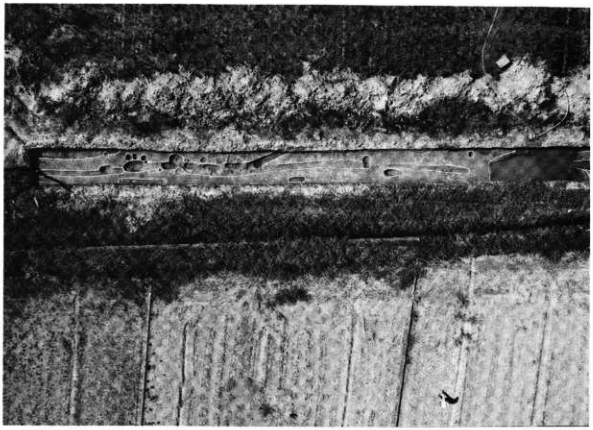
2．T5-SE1



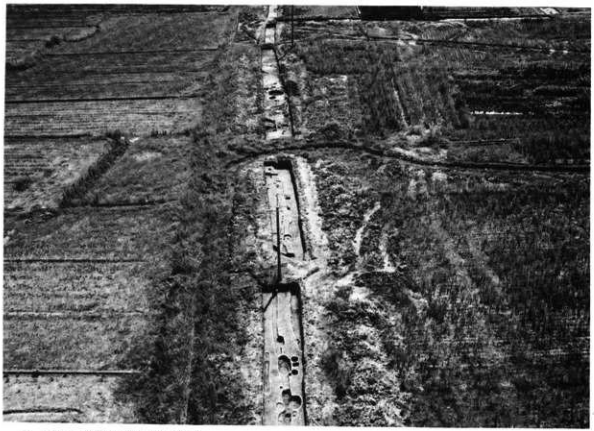
1．T6全景（東から）



2．T9全景（東から）

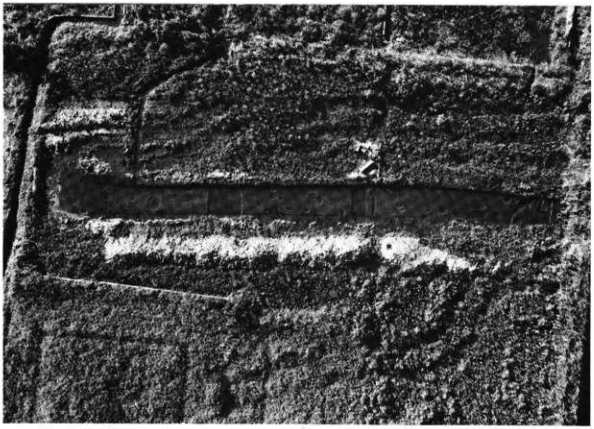


1．T７全景（右上隅が北）



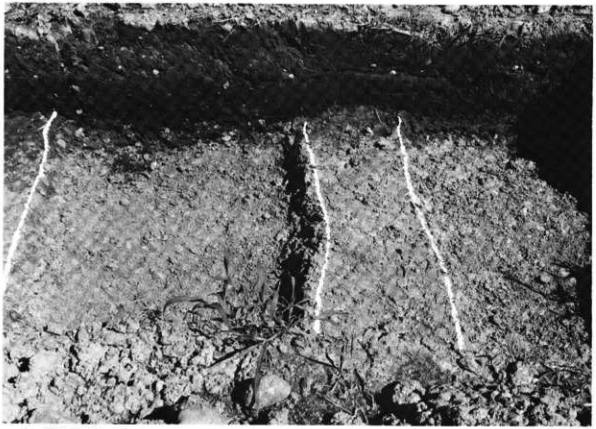
2．T３～T6全景（東上空から）

1．T11全景（東から）



2．T12全景（右上隅が北）

1．T13全景（西から）



2．T13-SD7・8

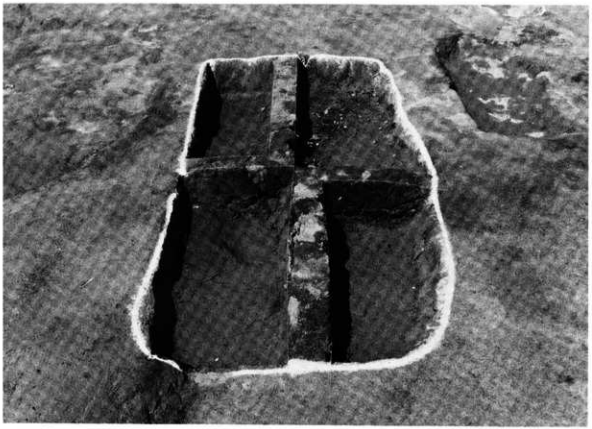
1．T14西端部柱穴分布状況（西から）

2．T15全景（西から）

1．T18全景（東上空から）

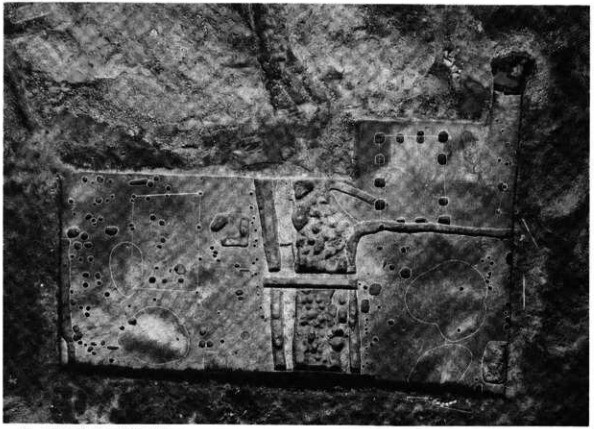
2．T18全景（右上隅が北）

1．T18土壙群



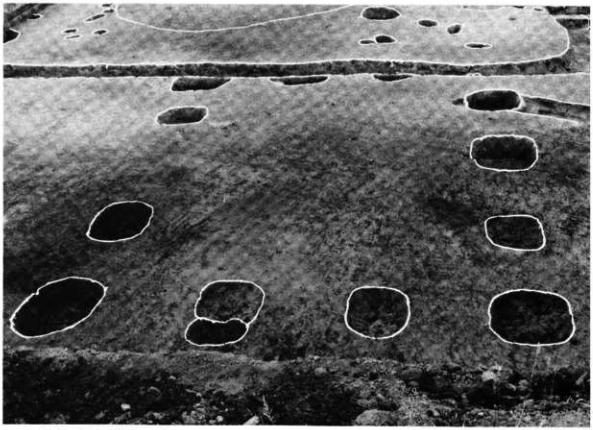
2．T18-SK7

1．T19全景（東上空から）



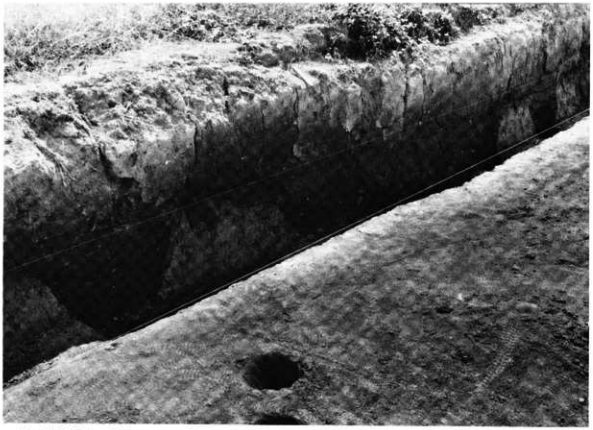
2．T19全景（右上隅が北）

1．T19-SD 6 土層堆積状況

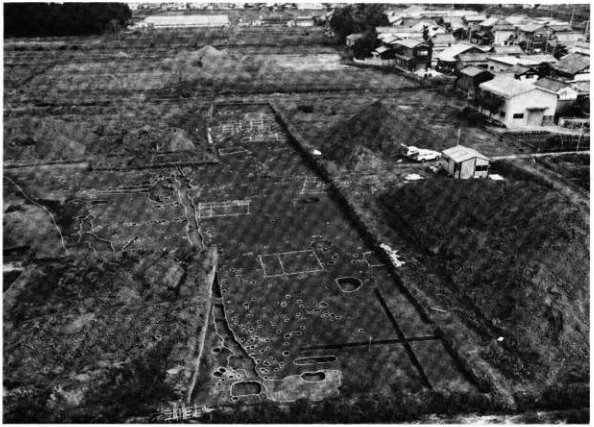


2．T19-SB 1（北西から）

1．T19-SD1・SD2・SD3並列部分

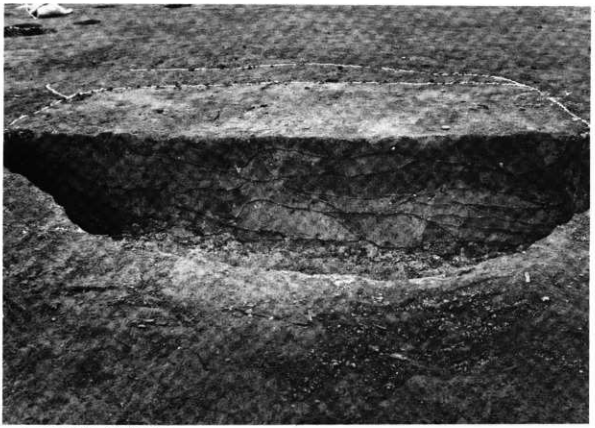


2．T19-SD1・SD2・SD3土層堆積状況



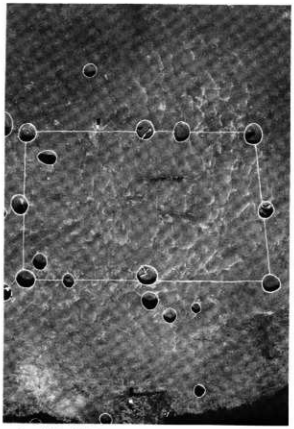
1．T20南半部分全景（西上空から）

2．T20-SD3（東から）

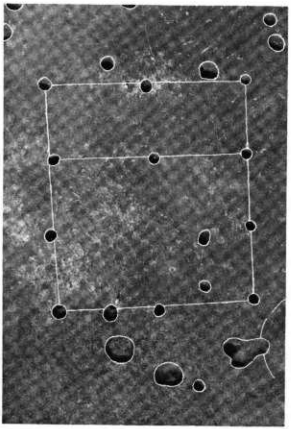


1．T20-SK１土層堆積状況

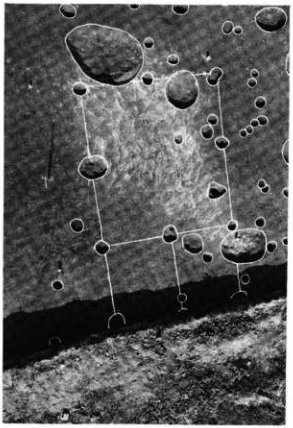
2．T20-SB６～15柱穴検出状況（西から）



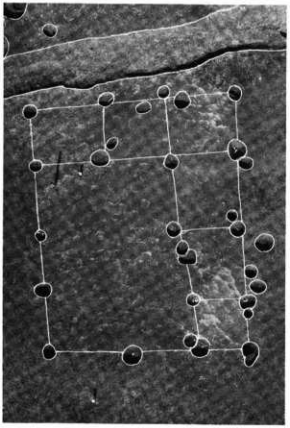
1．T20-SB15



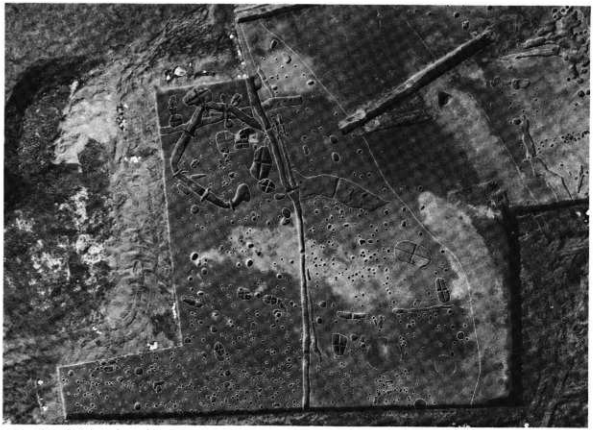
2．T20-SB 2



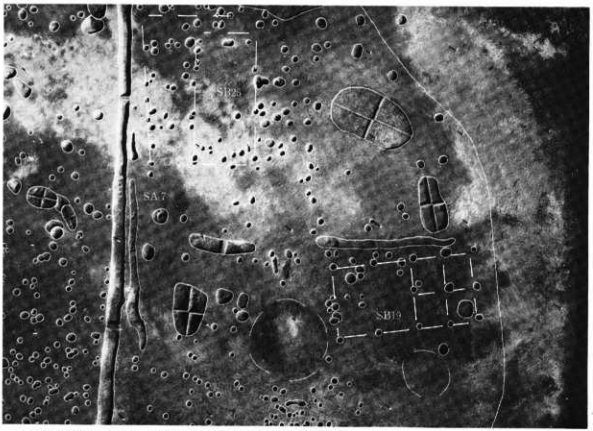
3．T20-SB 6



4．T20-SB 4

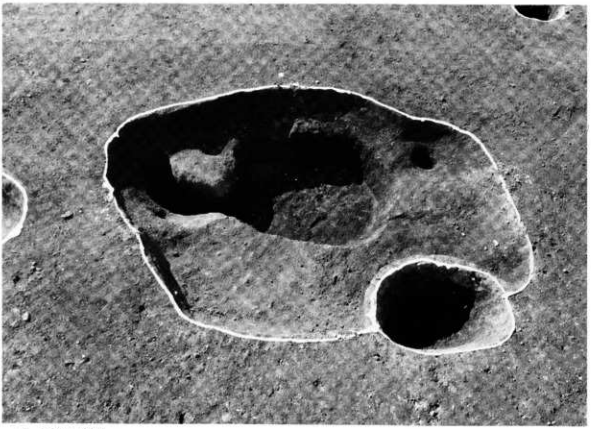


1．T20北半部分全景（左上隅が北）

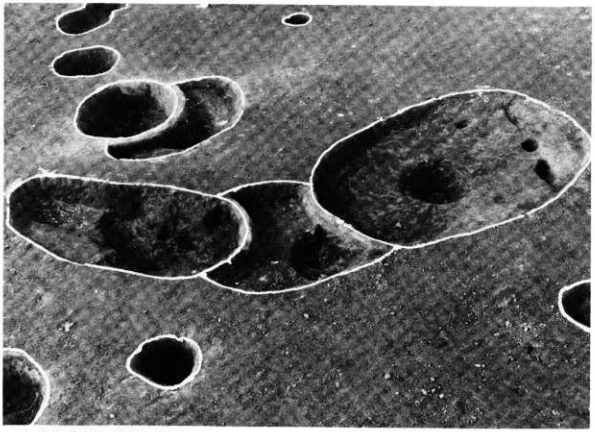


2．T20-SB19・SB23・SB24・SB25・SA 7（左上隅が北）

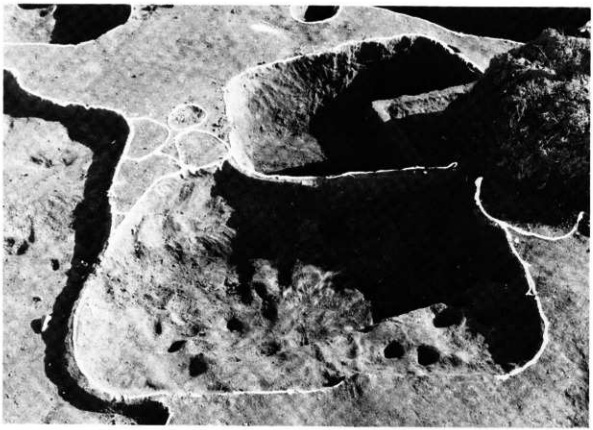
1．T20-SD1（西から）



2．T20-SK17



1．T20-SK18・SK19・SK20

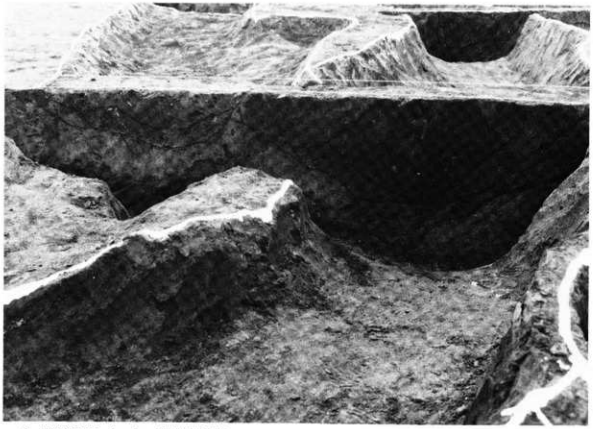


2．T20-SK23・SK24

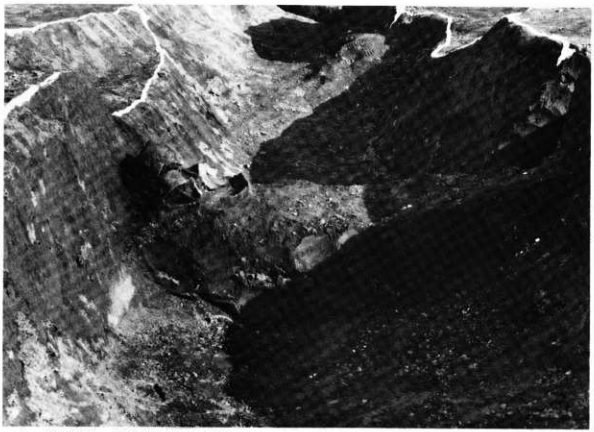
1．SX１周辺（北から）

2．SX１・土壙群（右が北）

1．T20-SX 1 -Sec 5　土層堆積状況

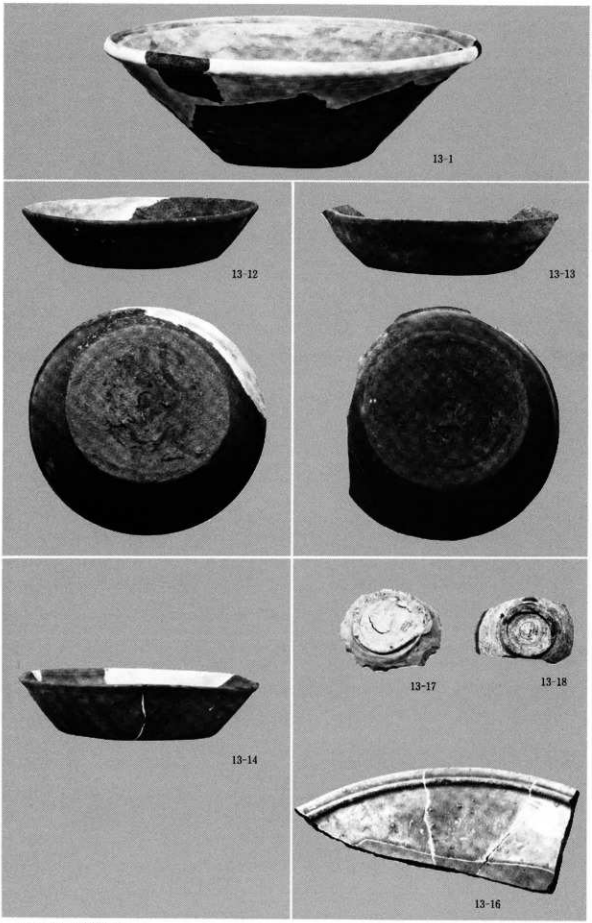


2．T20-SX 1 -Sec 6　土層堆積状況

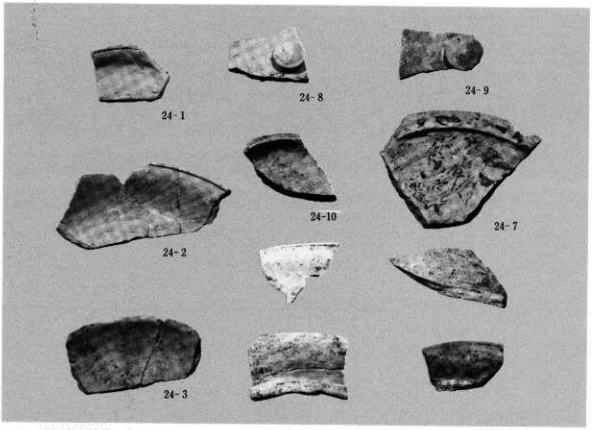


1．T20-SX 1　長頸壺形土器出土状況

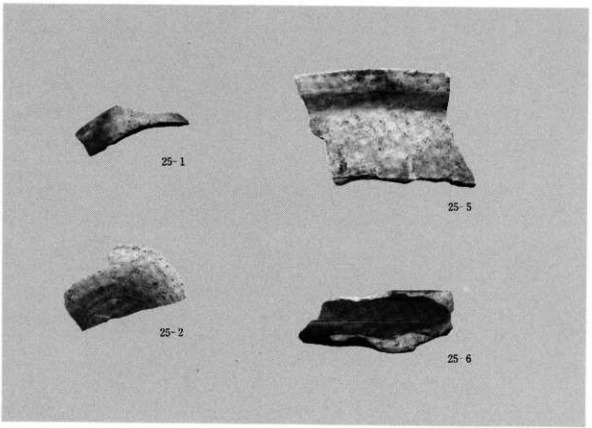
2．同上



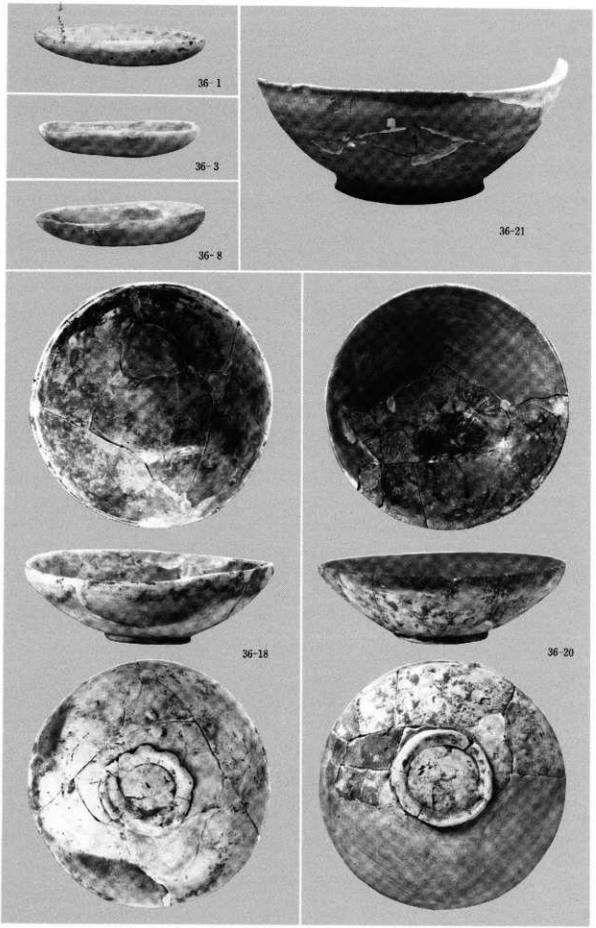
T1・T4出土遺物



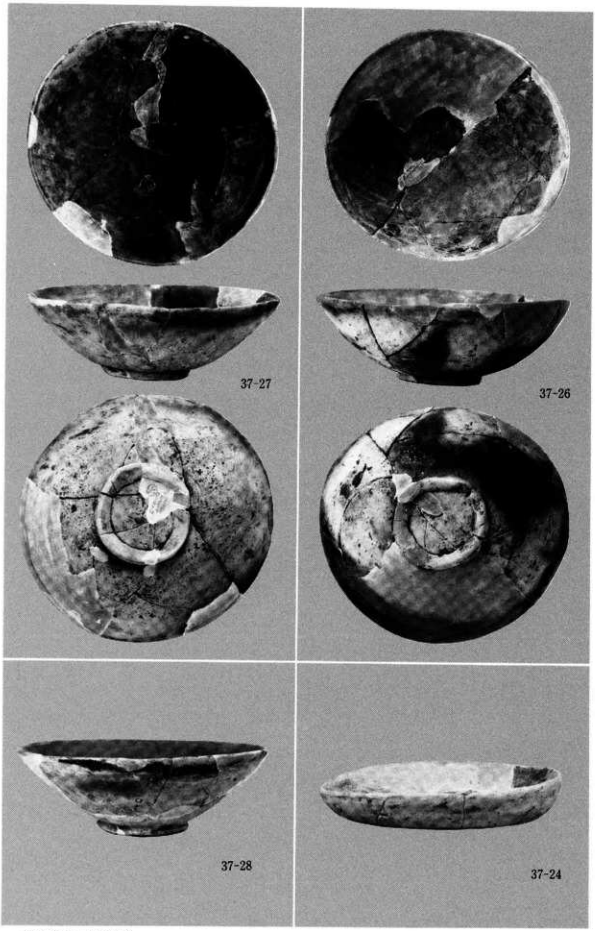
1．T17出土遺物



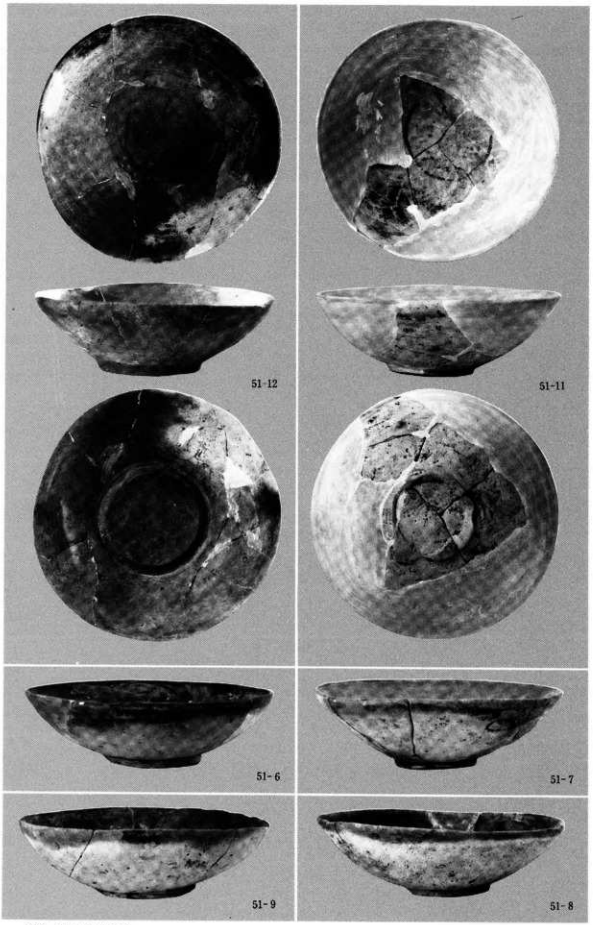
2．T18出土遺物



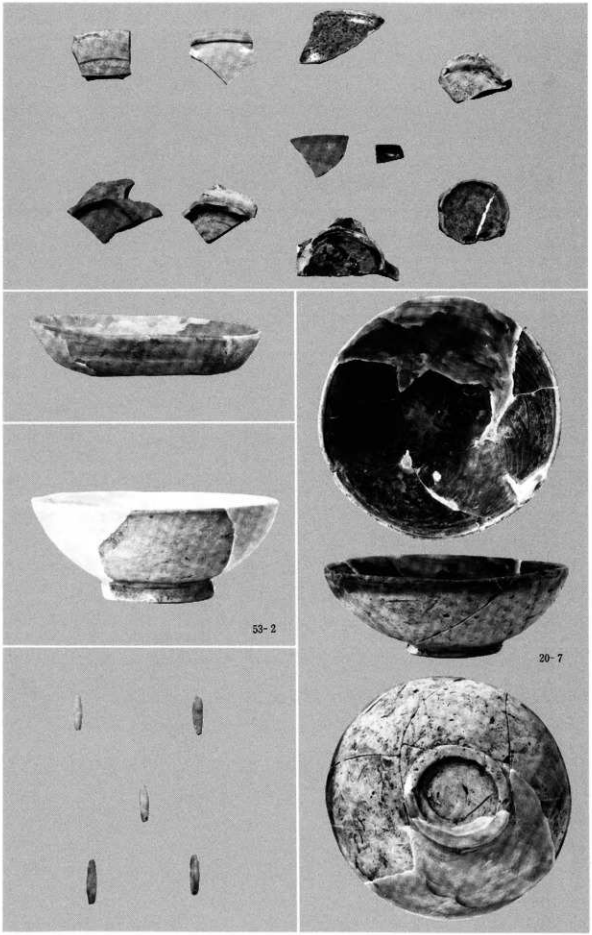
T19-SD 1 出土遺物

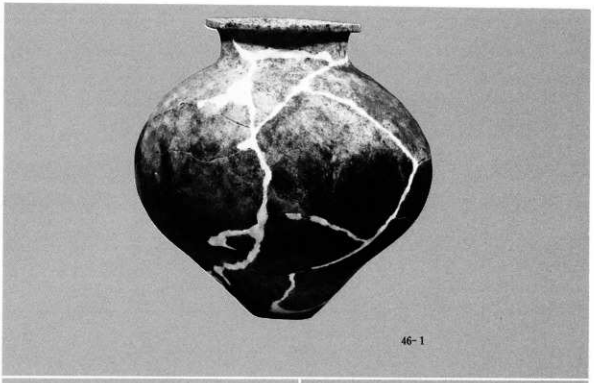


T19-SD3出土遺物

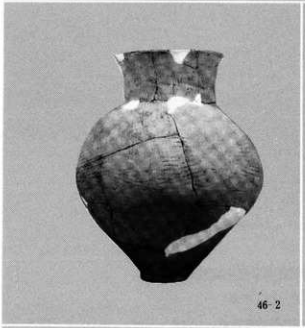


T20-SD 1 出土遺物


53-2
20-7



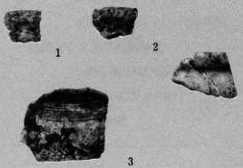
46-1



46-2

46-3

SK22
（1～3は同一個体）



T20-SX 1 ・SK22出土遺物

平成元年３月
『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書ⅩⅥ-２』
高木（浅小井）遺跡
編集・発行　滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目１-１
電話 0775-24-1121内線2536
㈶滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
電話　0775-48-9781
印刷所　上田印刷有限会社